毎月十日廿五日發行

家庭雑誌

壹冊 定價金五錢



明治二十九年一月十日發兌

第六十九號

新年大附録

社説＝舊禮廢すべからず　科學＝吉原田圃の動物

史傳＝エリサベス、ザン　談叢＝雲原の甚助

下村房子　德富蘇峯

糸のもつれ　金子春夢

青い山清い水　水田みづは

金鵄勳章　一葉庵主人

木からし　賤の舍女史

家政＝下女　社交＝新春賀見

雑録＝獸苑＝其他いろ〳〵

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恭賀新年

大方の御華客様益々御清盛御加年被遊大慶に奉存候隨而弊舖義年來御婦人用裝飾品を時々の流行に魁け精製の物品を販賣致し來り候處經年すと共に一般の御引立御愛用を蒙り自然御信用の深きを辱のふせし段眞以而難有御厚禮申上候爾來は一層御信用の深きに反ざる樣注意致し販賣品の種類を不問又價格の高下に不拘品質の善良にして正確なるを本意とし時々の風俗に隨ひ考案を盡し品位の卑しからずして價値ある諸品を調製して正價を附し販賣候間左記賣品の略報幷に地方送品○交換手續き等御一讀之上何卒奮に倍し永年御愛顧の上多少に不限陸續御用命あらんとを伏て奉願上候

東京市南傳馬町二丁目　大西白牡丹

賣品略記

○鼈甲店賣品

儀式用鼈甲櫛笄簪一式
金製寶石入彫刻類各品
美術蒔繪彫刻櫛笄各種
本珊瑚瑪瑙根掛簪玉類
諸名木製蒔畫櫛笄各種
銀製簪根掛帶止其他各
新製流行櫛笄簪根掛類

○油店賣品

元祖雪の梅白粉
御髮の油類各種
和洋香水上中下
特製御花簪各種
新案かけ物るい
うつ北絞縫取類
附屬品類數百種

地方送品

○地方より御注文の節は可相成其品名を區別して御用の御年齡を記し代金爲替封入御郵書被下ば到着直ちに物品を正撰し小包郵便にて送品仕候

金製物品

○金製諸品には特に責任證明書を添附して其金位寶石名義又は彫刻等之正確なるを保證仕候

物品交換

○弊舖販賣品御購求後尙貴意にかなわざる節は正札附の儘汚損なきに於ては市內は(一)周間內地方は(一ヶ月內)に御遣しあらば他品と交換いたすか又は正價を返納可致と

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味薄きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるスコツト乳菓が最も適當なる食料にして、忽ち肉を肥し發育を助くるなり◎此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となることを疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコツト乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし◎◎◎此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を補すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

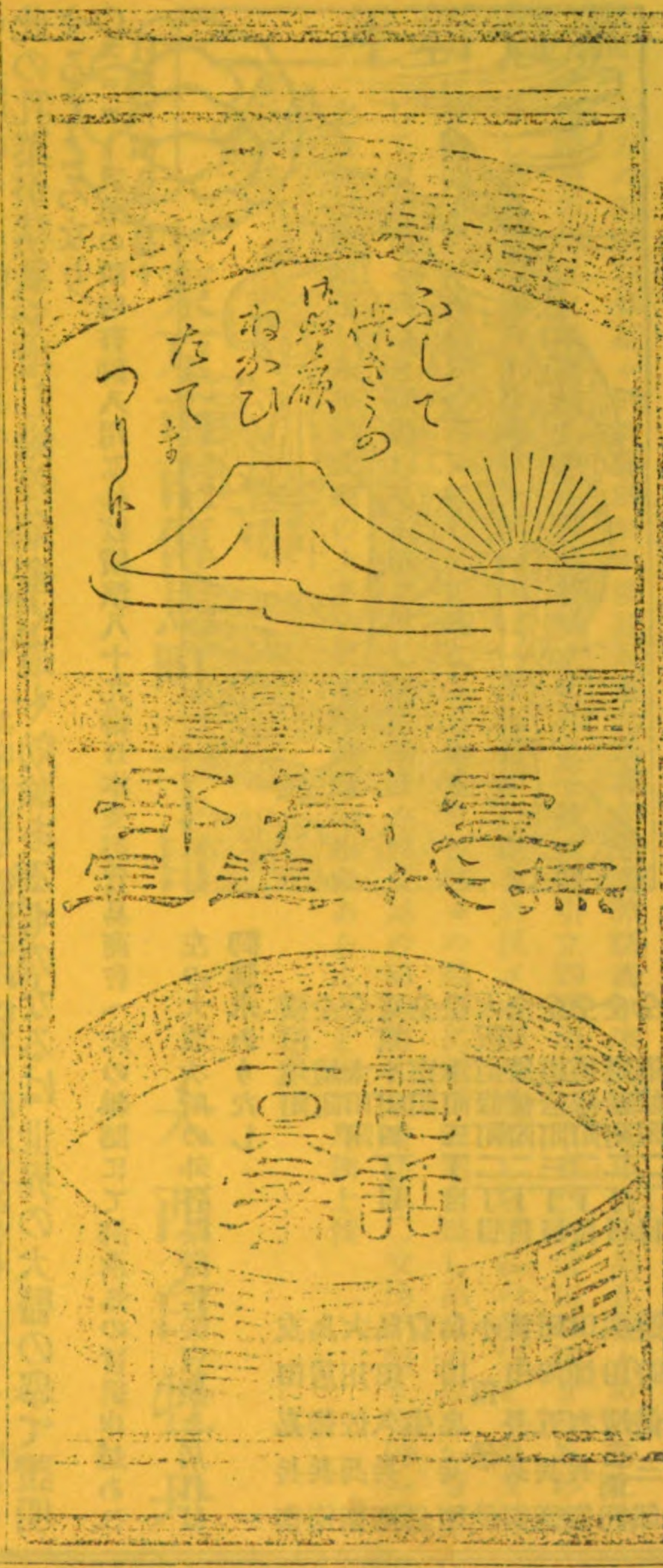
此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコツト乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎



今世名家文鈔

四版　定價二十錢　郵稅四錢

本書載する所皆な新日本の文壇に雄視する名家の傑作にして其の撰擇一に作者の指示寄贈に係るものなれば流俗社撰の書と同日の論にあらず且つ其の文體には今躰あり古躰あり和文あり漢文あり普通文あり其の文章には論辨あり小說あり小品あり光彩陸離文學の大觀たるに怍ぢす加ふるに其の文悉く高尚純潔なり作文の規範たるに止らず家庭學校間に諷誦して以て青年修養の一助たらずんばあらず

右暫く品切れの處此回第四版成り世の需に應ず

發兌元　民友社

東京々橋區日吉町四番地

塚越芳太郎著

近松著作一斑

菊版 五百拾頁
定價 三十五錢
郵稅 八錢

◎經濟雜誌曰く　此巻には近松の史戯曲を評釋したり、停春樓主人の批評眼例に依て深刻なり、◎東京朝日曰く　嚮に近松門左衞門を著して世の喝采を博したる塚越芳太郎氏の著にして近松著作の類別より戯曲の幹、戯曲の想、戯曲の効果並に史戯曲の事に至るまでを本巻に舉げたり氏の前著は單に近松が生涯思想等に就て大綱を舉げしに過ぎず本書は之を補ふが爲め其著作一斑を細説せるものにして兩者相俟つて始めて完全無缺を得るものなり近來文學上の著作多しと雖も本書の如く着察調査の精を究むるものあらず實に文壇必須の著にして近松も亦た地下に知己を得たるを謝するならん。

一◎大阪朝日曰く『近松門左衞門』の著者停春樓主人塚越芳太郎氏其林子が著作に就て前著僅かに簡單なる解題を施せるに止めたるを此には其細部を極め精を盡して研究の手眼を示せり而して御週して一斑といふの著し謙也今上巻を出す其鑑裁先づ著作の區別、戯曲の體・其進歩、其想、其開展、戯曲の効果等に就て縦説横説發揮餘蘊なし次に其史戯曲中の梁女、國姓爺、會稽山、繋馬の四種を解剖し毫を訴ち微に入り原作の辭氣躍然たり近來巢林子の著作を把りて其の解題、批評等を公にせしもの世に其人多し然れども皆片鱗隻甲のみ未だ全豹の六に亘りて之を研究せしものあらず著者既に前著に於て巢林子の人を傳し想を叙し今又此大著解釋あり下巻の完成を見んと樂しむ意ふに巢林子全集の此盛著に對觀すべきもの未だ之あらず豈一大恨事ならずや著者其れ餘力之を成せ

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

民友社編纂

比律賓群島

本月下澣出版

精細なる地圖及土風畫十葉挿入

我新版土臺灣の南隣に接し、大小千二百の島嶼散布す、之を比律賓群島とす。
本書は比律賓群島を實見せし人の手に拾收せられたる材料と傍ら同島に就て目下現存せる諸記錄を周く涉獵し、世の經世家に聊か資する所あらんとして、編纂せしもの也。
我社已に北西の強大國を知るべく「露西亞帝國」を出版し、今また此編に及ぶ、眼を北邊に注ぐもの亦併せて此南陲の書に注意する所なかる可からず。
本書出版の目的即ち此に外ならざる也。

發兌元　東京々橋區日吉町　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

平田久著

露西亞帝國

紙數 四百七十三頁
定價 卅五錢 郵税六錢
肖像 露帝ニコラス二世
地圖 露西亞の膨脹 中央亞細亞の進略 ハミール高原 悉比利亞鐵道

各新聞の批評

◎時事 著者の言葉に曰く今日の時勢に於て露西亞の事情を知るは日本の事情を知る所以にして之を學ぶは學問の爲めにあらず實に我等生活の必要に因れりと即ち此書は能く時勢に應じて著はしたるものと云ふべし著者は平田久氏なり

◎教育時論 四百五十六頁の大冊子、是れ平田久氏が露西亞帝國研究の陳渉呉廣たらんを期して、著したるもの。地理あり、歴史あり、國民の特質あり、日本國民の心得として必一讀すべく、將來露西亞帝國研究の途に上らんと欲するものも、讀んで以て其方針を確定すべし。

◎毎日 東洋に事多く、遂に露西亞が東洋の政治舞臺に其腕を揮はんとする傾向あるに至りしより、露國のことを談論するもの、著述するもの少しとせず。然れども始終相應し所論確實なるもの、所謂完成の著述未だ世に公にせられしをなし。然るに頃日民友社員平田氏の著述にかゝる「露西亞帝國」てふ大冊(四百七十三頁)出で、漸くこの感去る、可喜可賀。」今まこの「露西亞帝國」を閲するに、露西亞……………の諸問題に就き頗る叮嚀に論辯されぬ。文章の美、徵證の周到なるには感服の外なし。著者がこの大文字をものせんとて費されし研究考證の勞は定めて容易ならざりしならん。バルカン、印度、朝鮮問題に付ての著者の論述されしうちには(二六ページより三〇三まで)、露國に於て曾て耳にするを得ざるを多く甚面白し、且つ最も有益ならん云々

◎基督教新聞 筆を露西亞の天然に起し其膨脹力、同化力を説きて國民に及び卷頭新帝尼格第二世を總論として掲げ附るに肖像を以てし卷中露西亞膨脹地圖中央亞細亞侵略地圖「パミール」高原地圖悉比利亞貫通大鐵道地圖を挿む全篇四百五十六頁章を別ち節を立つる頗る詳材料の豐富なる殊に推して近來の好著と謂ふべし云々

◎神戸實業新聞 露西亞てふ名稱は今や我が國人に一種言ふ可らざる感情を惹起し對露西亞策なる者は實に我邦朝野の間に於ける最大至重の問題となり將來に於て我が帝國の國是方鍼を一定するは一に此問題の解釋に待たざる可らず左れど今若し對露西亞策を講ぜんと欲せば須らく露西亞の以て露西亞たる眞相を知るを要す……………『露西亞帝國』の著者は能く時勢の須要を察し皆ふてこの知り難き露西亞帝國の眞相を究めて之を我が國人に紹介せんことを試み而して又能くその目的を達したると言ふことを得べし………憶ふにその材料の拾收撰擇は是れ著者が最も苦心を用ひたる所なるべく文章流麗亦その當を失はず卷中露西亞國民を論ずるの一篇五章は當時佛國經濟學者の泰斗たるポール、ルロアー、ボーリウの同胞にして最も露西亞の形勢事情に通ぜるを以て其名聲歐洲諸學者の間に藉甚なるアナトー、ルルロアー、ボーリウ氏の原著を露人ラコジン氏が飜譯評註したる「ザール帝國及び露西亞國民」に本きてこの奇怪不可思議なる露西亞國民の性質、氣風、素養、慣習を説明して最もその當を極む全文の光彩實にこの一篇に在り云々

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

徳富猪一郎編纂　久保田米僊畫

六版 誕生日

一冊 金十五錢 郵税二錢

○斯書は父母兄弟姉妹朋友の誕節を記臆せんか爲め其の誕生日を記錄する冊子也
○巻中の一面には餘白を剩して其の人々をして自から其の姓名を誕節に相當する月日の欄内に記錄せしむるを得可し是れ獨り其の誕生日を記錄するのみならず併せて父母兄弟姉妹朋友の手蹟賴たるを得可し
○他の一面には東西の聖經賢傳詩歌金言を掲げ以て晨夕の諷誦に供す
○又た米僊子の清淡奇逸なる一年の期節に相當する細畫七十餘を挿めり
○斯書を編纂したる主旨は獨り自個の誕生日を紀念し祝し且つ勵むに止らす併せて其の父母兄弟姉妹朋友の誕節を祝して纏綿顛倒の情を表するにあり是豈に人生の和樂を增し社會の情緒を温むる所以にあらずや
○冊子小なりと雖淡麗淸楚且つ各種の便宜備る金闘簿たるを得可く備忘錄たるを得可く金誠集たるを得可く又た文苑給畫の奇觀たるを得可し何人も一本を持す可き要書と信ず

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社



舍主宇都宮仙太郎は米國ウイスコンシン州農科大學乳業科得業生なり
牛畜は每週囑托獸醫の診斷したる健全の者なり
醫科大學にて每日試驗濟の上御買上に相成居れば乳質の善良にして安全なる推して知る可きなり
代價は世間並に候御試用の上御吹聽願上候

麹町富士見町六丁目一五
帝國大學醫院御用　回陽舍
電話六百十五番

院長　醫學士　増田知正

入院並に遠近往診共臨時申込を受
外來診察每日午前八時より正午迄
婦人科の手術は大小を論せす之を施行す
產科——產婆派出の需に應す

東京神田駿河臺袋町十三番地(小松宮邸前)

増田産婦人科醫院

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價
一冊　金五錢　郵地 金五厘
半年(十二冊)前金五十錢　税方 金五十六錢
一年(廿四冊)同金一圓　共 金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿九年一月十日發行

家庭雜誌第六拾九號

目錄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第六拾九號

（明治廿九年一月十日發兌）

社説

舊禮廢すべからず

讀者諸君に對して謹んで新年の御慶を申上ると共に一言したきとあり。近來世間漸く簡易を崇びて歳末年始の禮儀なぞを粗末にする者なきに非ず。或は近縣旅行と稱して一室に閉籠り居る者もあり、或は名刺を人に配らせて回禮を濟ます者もあり、其自から言ふ處を聞くに、今日は軍國の世にて申さば戰國時代なり。それに緩慢なる古禮を株守するは愚の至りなり。天下漸く急がはしき今日なれば何事も端折て手短かにするこそ善れと。一應は尤の樣なれど世間が急がしければ急がしき程禮節の如き者は重んじたき者なり。輪の急に廻はる時は其中心は益静かになる者なり。平生急がしき時にこそ歳晩新年には打解けて親舊相會し平生の疎情を温むべき必要最も多き筈に非ずや。世が急がしくなりたればとて、自己も亦自から急がしくし、歳末の禮も年頭の式も廢したらば、時間に節といふ者なくなりて取り留めなきに至るべし。

泰西にはクリスマスと云ふ者ありて親戚朋友互にカードを取交はし、贈物を取交はし、愛情を取交はし、一年の中最も樂しき日とすることとなるが一年の中にかゝる祝日を設け平生の殺風景に代へて温情海の如き宴會を開きたらば聊か人情の衰頽をも救ひ得べし。

且世が急がしくなれば、家の主人在宅して家人團欒の樂を取ることとも、從つて少なき譯なれば、かゝる時こそ色々に工夫して小兒を樂ましめ、又自から樂しむやうにすべきに非ずや。

小兒に物を與ふるが如きも、日々些細の物を與ふるよ

りは寧ろ新年を期して年玉等の名を附し一まとめにして有益なる者を與ふる方よろしかるべし。新年を以て子弟の最も快樂すべき日とするは家風の爲めに利益あるべし。

小學校にても新年を利用し席書、文章朗讀、生徒作品展覽會なぞを催したらんには生徒をして喜ばしむることを得べし。

今日の世界に於て倫敎を敦ふするの道は人道に協へる古禮は必らず之を保存するに在り。昔し孔子は告朔の餼羊をすら存せんとしたりと云へり、吾人は讀者諸君の此邊に注意せられんとを希望す。

君ならで誰にか見せん梅の花
色をも香をも知る人ぞ知る

科學

吉原田圃の動物

（理學博士石川千代松氏講筵）

余は吉原田圃に於て研究せし顯微鏡的動物に就て報導する所あらん彈丸黒子の如き吉原田圃なれども之を研究せば生死問題、進化問題雌雄問題の如き大疑問をも解釋するに難からず敢て全豹と謂はざるも其一般に通ずる原則丈は知る事を得るに庶幾し

吉原田圃狹しと雖も蝶、とんぼ、くつわ虫、蛙、ばッた、みじんこ抔千萬の動物此中に生棲するを観る是等の動物を研究し何故に淡水中に生棲する動物は海中に生棲する動物より其數に於て寡少且つ形躰に於て微小なるやと疑問するに到れば興味ある也翻ふに陸上動物は元來海中より移住し來れるものにして移住の順序は海水

より淡水に淡水より陸上に迄波及し來る者なるが故に海水中の動物は多數を占め陸上のものは謂はば海中より溢れ來るものなれば比較的少數也、而して陸上にても二種の別あり湖水の如き水の永久に湛へたるものと田圃の如く時あつて乾涸する一時的のものとありて水の有無に隨て動物の多寡增減を來たすもの也而して水の乾ける間は動物は如何になり行くものや其間は動物は死する乎生き居る乎生きて居らば如何にせる乎世人は動物は自然に『わく』ものと思ひ違へをれども動物は決してわくものに非ず動物は水中に住するもあり空中に飛行するもあれども動物は皆親より産るゝものなり渾てのコムマバ





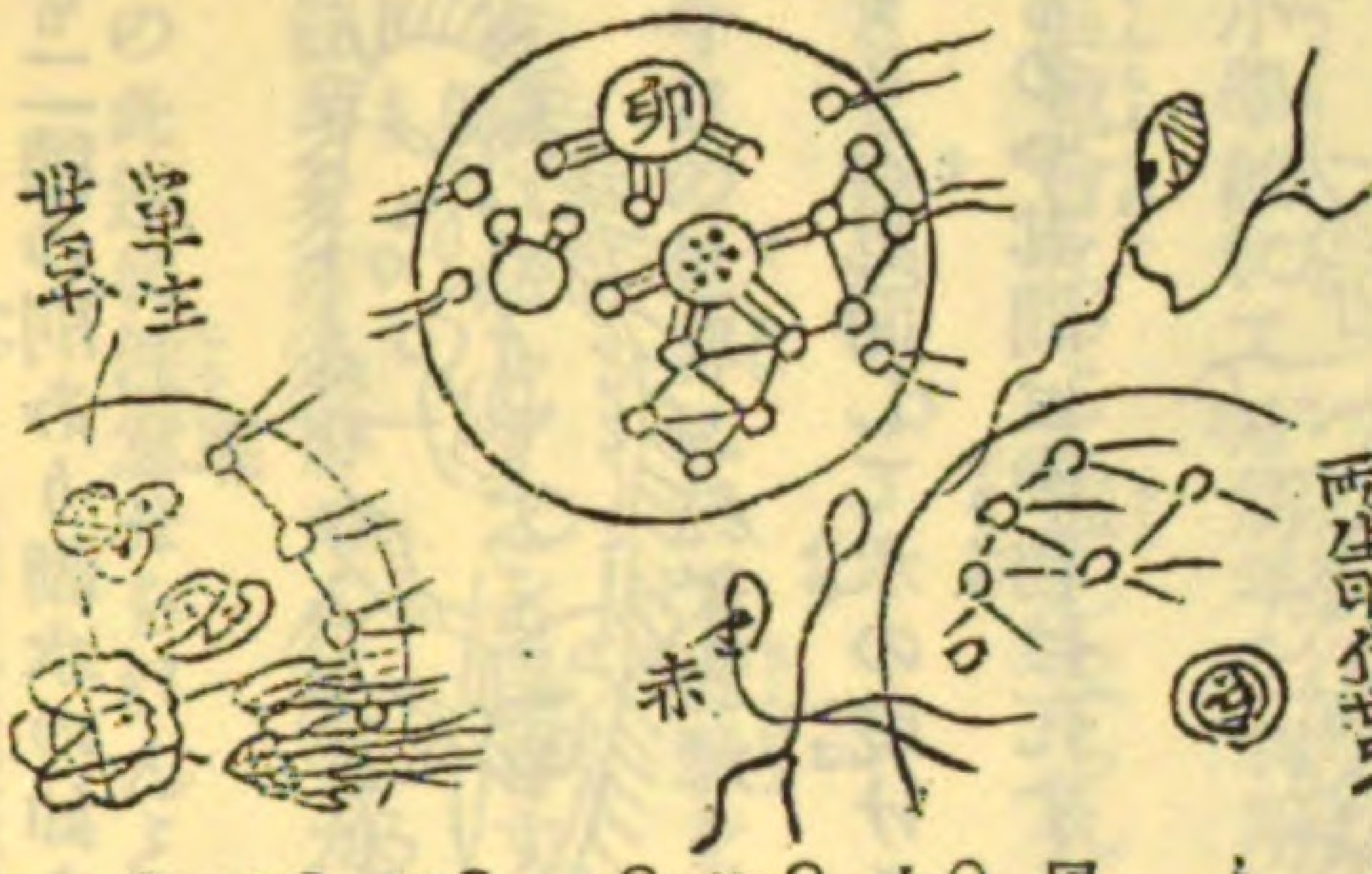
チルス等は産るゝものにして卵生のもの也、

『みじんこ』は卵生にして其卵は水なき地上に落ちるも死するものに非ず卵には雌雄兩性を互代に産み雌を産む時は雌のみを産み雄の時は雄のみを産む也詳言せば『みじんこ』には雌雄の雙親ありて雌は雄に比して大且つ消化機も具備すれども雄は小にして腸も胃もあるなし口もなし其卵子には大小の二種ありて卵子には動くものと動かざるものとありて動くもの動かざるものに附着す而して附着するや全く同形となるもあり其外部に厚き皮を造る此處に到れは決して死するとあるなし是れ卵子也雄は直に死亡し雌は是より三種の卵を生む(其中の大なるものは雌となるべきもの也)故に最初の互に分離して飛行し活動し相附着し孵卵するに到るものには三個の時代を指す曰く無生時代曰く單生時代曰く兩生時代是也

三個の時代に於て注意すべきものは生は始めは同しけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れども進化して高等となるに隨て無生、單生より兩生となるものなり而して何故に生兒と卵子は異なるものなる乎何故に卵子中にて一は動き一は動かざる乎是に答ふるには動物界にも分業法行はれ異なれる双親より



別種の新動物を造らんためなりと謂はんのみ

最後に生死問題に移らん動物中の卵子と生兒は死するものにあらず而して動物躰中に死ぬ部分と死せぬ部分とあり約言せば動物の躰中に死する部分の多寡あるのみ死と不死とは分業也下等動物と高等動物は死生の變化のみにて原始動物は不死の部分多く高等動物は死ぬる部分の多くなりしのみ人類は動物中最後に來れる最高等のもの也而して其進化の大法は千秋不易に實行せられ居れば今後是も亦變質すべきもの也而して進化の目的は何ぞや優勝劣敗の外他あらん乎

吉田松陰の年始狀

新年之御慶芽出度奉存候
尊大人樣大孺人樣を初め御滿堂宜敷御超歲奉大賀候獄中も一夜明候へば春めき中候別紙二書初一蕪詞一御笑正奉希候先新禧爲拜賀如此御座候恐惶謹言

安政二年正月朔旦賀　寅次郎

家大兄案下

尙幾重も芽出度奉存候不相替拜正之儀東西御奔走奉察候扨今朝食雜煮遣りきれん寄山亭にての如し
是戯謔之初初笑々々有詩曰眠足何用迎新正雜煮滿腹腹雷鳴要知新年吉兆處且聞善歲萬歲聲

史談

エリサベス、ザン

八　萩生

（一）

千七百七十七年の秋なりき大佐ハミルトン（カナダの知事）は、ホイーリング砦を攻撃せんと決心なしつ、其目的をばシモン、ギルチーをして達せんと思ひぬ、（ギルチーは白人種なれども、小兒の折、土人に捕はれ、其後土人の種族と和して、今は其の一主領なり）、ギルチーは實に、或る理由を以て、亞米利加人を惡み恨みし一種の惡人にして命をうくるや、土人五百人を率ひ、ケンタツキー州の方より南に進軍し、道はホイーリングの方向に取らざりしも、目的は白人襲擊に外ならず、シンシナチーの少し上手なる、オハイオ河に達せしと思ふ時、左に折れて、ヘンリー砦を擊たんと川上に急ぎぬ。

ヘンリー砦は、境界に於ける重要の砦にて、之を廻りて二十五棟の木造家は建てられたり、家は皆長方形にして、其四隅には物見やぐらを設け、其下には砲門あり、砦内には又た數多の小屋を有し、婦女幼童をば此内に居らしめ、銃器火藥の倉庫た亦此內部に設けられたり。

砦中第一の入口は、村の東側なる門にして、若し土人の襲擊に出會せば則ち家を打捨て、此門より遁げ入る事とせり、さればギルチーの襲擊せし時は、門は密閉して入るを得ず、土人は則ち二隊に分れ射擊をはじめたり、此時ギルチーは直に門より遠からぬ小屋に走せ行き、白旗をかざしつゝ、何事をか云ふべきの意味を示せしかば、發砲はしばし止められぬ、ギルチーはハミルトンより授かりし宣言書を讀みぬ、其意は實に左の如し。

『若し砦も武器も尋常に渡さば身の上に害なきを保證し、之に背かば砦を打崩くのみにはあらで、土人は一人も殘さず汝等を屠るべし』

讀み終へて如何になすべきやを問ひしに、砦の守長セバルドは左の如き意味にて叫べり。

『吾目の黒き間は、ハミルトンの如き惡人には、決して砦も武器も渡しはせじ』と。

セバルドの聲未だ終らざるに、砦中は一齊に鯨波を作りて賛同せり。

戰はかくて開かれぬ。時しも九月の朝早く指し來る朝日熱からで、森の葉色は黄と紅に彩られき。

土人は鯨波を作りて愈よ進撃甚しく、砦よりも一々應戰且つ一々狙ひ撃をなしければ、土人の死傷幾千なりしを知らず、此方法にては、乘取る事能はじとや思ひけん、直に突撃をはじめ、突進急撃砲門にせまり來て砲門より射撃を行ひしも、其結果却て味方のみを失ひければ、土人本隊は直に林中に引上げぬ。

（二）

土人隊の引上げし後、砦には會議を開て曰く

彼等今こそ退却なしたれ、必ず時をうつさず、再度の攻撃をなさん事鏡にかけて見る如し、さらば其の準備をなし置かざるべからず、然るに茲に容易ならざる一大事は火藥の欠乏せる事なり、よしや村の一家には火藥桶を貯へ置きたれど、土人の襲撃咄嗟の間なりければ遁るに急にして之を忘れたりと

皆頭をあつめて

『さて如何にすべきぞ』

火藥なくんば如何にして戰はん、戰はずば妻子供々殺されなん、唯だ賴むべき一策は、其の火藥桶を取り來る一事なりき、さりとて其の家は砦を距る事六十尺、今ま土人の一人見ゆるものなきも、彼等は必ず警戒なし居るならん、されば砦より人の出るを見ば、之を攻

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

睪するや明けし、之に於てかセバルドは則ち壯丁を呼びて詳しく事情を打明け、誰か此中より、火藥取寄せの任命を果しくれずやと、言葉未だ終らざるに、血氣にはやる若者は、三四人同時に膝おし進め、吾こそ行かめ、吾行くべしと爭ひぬ、されどセバルドは

セ『そー三四人一時に行かれては、砦の人數が手薄だから、誰か其内から相談して一人行く樣に』

此をきくや、吾行くべき任あり、吾行かざるべからず等と甲論乙駁何時はつべしとも見へざるに、土人再度の襲擊も來るべき氣遣ありて彼是れ一方ならぬ心配の折から、群がる女の中より、一人の貴女突然現はれ、吾必ず行くべしと云ひぬ、そも此貴女は其名を何とか云ふ

エリサベス、ザンとて未だ年少き一女子、恰も此時ヒラデルヒヤなる寄宿舍より、歸省なし居たる者なりき雲をもつける六の男の、何とてかゝる手弱き女の請を容るゝべきぞ

『どふしても此處は女娘の行くべき處ではない』

『女が行た處で唯だ死ぬる許りだから、此處は男が行かなくてはならぬ』

エ『否え其處が私が自分から行かなくてはならない理です……人の足りない砦の事ですから、男が一人減ても大したものです……がしかし、娘が此中から一人二人死んだからッて、何の損も御坐いますまい』

とて氣鋭く、聽き容るゝ氣色も見へねば、遂に火藥取寄せの大任は、エリサベスに任せられぬ、

前に云ひし如く、火藥桶貯藏所は、六十尺を隔たりしもエリサベスは、一走りに持ち來らんとて勇み立ちぬ

エ『よろしい、用意は出來ました』

此聲と共に門は開かれぬ、エリサベスは鹿の走れる如く左右も見ず、前後も顧みず、一直線に火藥桶貯藏所

に走せ行きたり。

(三)

エリサベスの砦より走せ出し時、二三の土人は、砦外の小屋に、警戒なし居りしも何故にや、走り行くエリサベスを見しのみにて、別に發砲もなさゞりき、然りながら何故に發砲せざりしやは、誰しも之に答は出來じ、或は衣服取りに、洗濯のハタ取りに、其他女子の粧裝道具取らん爲め行くなりと、想像せしならんと推測せばよかるべきか、されど土人は疑ひなく、小き娘の火藥取りに行きし等とは思はざりしなるべく、よしや思ひしとするも、歸り途には鐵砲にて或は鉞にて打殺すは、何の苦もなき事なればとて、さては一發の丸も放たざりしなるべし。

エリサベスは火藥の桶を見出しければ、確と小脇にかき抱き(恐らくは小くありしならん)砦を指して走せ出せしに、此時は土人もはや何の爲に來りしかを覺りしものか、直に鯨波をあぐるとともに、一齊躰撃を以て、雨の如く打かけしかども、ねらひを外れて、左右を飛び空をかすめて、一彈も身に中らざりければ、是幸と、砦に走せ付き、門を開くと其儘飛び込みしと同時に、土人の一發ヒユーと音して、門の戸縁を打抜ぎたり、アヽ今もし一瞬後れなば、エリサベスの命はなかりしものを、土人隊は急迫して攻め來り、尤も頑固に尤も猛烈に、戰を挑みたれども、白人は冷然として、狙ひ打のみなしければ、一發の空丸なく、土人の殺さるゝ者のみ多く、時の間に其邊りは死尸もて覆はれぬ、日暮れに及びて、朝來エリサベスが見舞ひし小屋に、二十の土人隱れ居りしが、突然門邊を追撃し、木丸太、鐵棒等もて、破門を企てしも、遂に果さぬのみか、五六人殺されければ、亦も林中へ遁げ失せぬ。

夜又た進撃せばやと思ひ、先づ老ひ朽ちたる楓の丸太の大きやかなるを見出せしかば、先づ木片の適宜なる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものを拾ひ取りて、一方の口を栓をなし、鍛冶屋より奪ひし鐵鎖もて、グル〳〵幾重となく巻き立てゝ、火薬を突きつめ、鐵の小片、石の小片等無暗に押しつめ、最早口に及びければ、則ち之を(一種奇怪の大砲)砦の門を距る六十尺の所に運び來りて、道火をうつせば、轟然として轟く音は、百雷の一時に落ちし如く、湧然として起る烟は、さながら雲の起る如く、實に其のすさまじき有様は、魂魄將に飛ばん許り、恰も此時忌まはしき恐ろしき、土人の叫聲は、木玉に響いて物すごくあやなき暗を破り來て、天地も崩るゝと思はしめしもあはれや叫びは、凱旋の叫にはあらざりき、木造の大砲は木片微塵に打破れて飛び散り刎ね散り、散り行く木片、飛び行く石片、鐵屑は、四方に居りし土人をかすめて、皮をやぶり肉をさき、悲しき若しき聲を出さしめ、或は見る影もなく肉ちぎれ、首と足とは處をかゆる等、其有様の慘澹たる事、實によく盡すべきにあらず、斯る有様なれば林中の土人も、急には追撃なさゞりければ、白人は暫時終日の勞れを休むる事を得たり。

誠に交戰の長かりし事、日出より日沒まで殆んど止む時なく、爲に銃は熱して用ゆる能はざるに至りしにさても善運のつゞく事よ。

(四)

ホイーリングに近き所に此の報知の達するや、獵師は、獵銃提げつゝ朋友助けんとて走せ來りぬ、カルロックは四十の部下を率ひて、ショット、クリークより翌曉到達なしぬ、(此の一事ありし翌曉なり)されば此等の人々を入れんとて、砦は門を開きければ、一隊の人々は急ぎ進みしに、土人隊は之を機會に、短兵急に進撃なせしが、此時巳にカルロックの一隊は入門なし終へしも、あわれカルロックは殿なし居りし爲め、部下とかけ隔てられ、はやくも土人は、其間にこみ入りければ、カルロックも砦

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に入るの望を絕ち、今はこうよと覺悟を極めて、馬にかく入るゝと見る間に、馬は蹄の音高く、ホイーリングの丘さして、一目散に馳り行く、土人は己れ遁しはせじと追ひすがる。

一發の銃は容易くカルロクを斃さんも、カルロクは土人の好敵手として其名高く、幾多の土人を殺せしものから、生捕にして其肉をさき、あぶり喰はんとの意氣盛なりければ、さては發砲なさゞりけり、

カルロクも亦、土人の心を知るものから、捕らるゝより寧ろ死せば安樂なりと思ひける、今カルロクはホイーリング丘に達せしに、前は百五十尺の嶮崖絕壁、而も其下は滔々たるクリーク河の流るゝあり、

土人の追擊は愈甚しく、今ははや如何ともせん樣なく、左右と後ろの三方は遁れんとても道はなし、遁るる唯の一道は前に飛ぶより外ぞなき、覺悟極めて左手に銃、右手に劍を握りつゝ、馬を眞向ひきむけて、一かく強く、腹も破れよと入れければ、馬も乘手も諸共に、深き谷間のクリーク河の深みに落ちて幸にも、共に無事にて遁れたり。

之にてヘンリー砦攻擊の戰は終へ、ギルチーも望なしとや思ひけん、村を灰にし、生殘りの土人を率ひて、遂にカナダの方に歸り去りたりき。

をりにふれて

水田みづほ

秋の木の葉は根にかへり
年もくれぬる後に又
めでたき春やめぐりこむ
雪にうもるゝ梅が香を
ふきておくりて深山なる
鶯さそふ風もがな
さはさりながら心せよ
七重に八重にさくとても
實のらぬ花は何かせむ
人もつとめて後にこそ
てふにもくるへ花によへ
むなしくけふをくらしなば

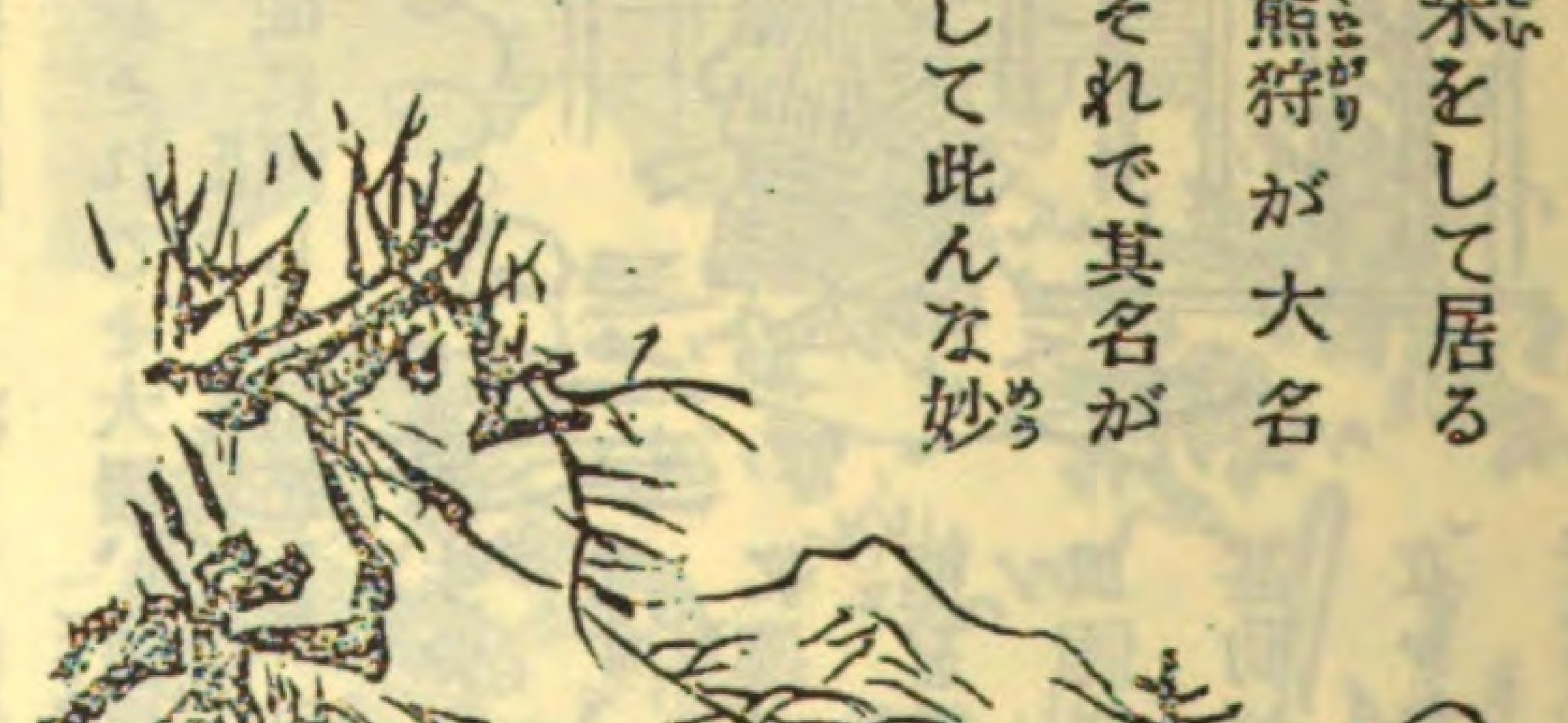
柳の糸のながき日も
花のおもわもたのまれで
夜半にあらしのそれよりも
わが身の上をさそふなる
無常の風を心して
ちらぬ先にさつさめよや
かくして後にみる花ぞ
まことめでたき花ならむ
ちりてもかをる花ならむ

談叢

雲原の甚助

雲原の甚助、其名は未だ少年諸君には御存知ではありますまいが、雲原の甚助の名は酒呑童子の鬼の名と高き大江山の麓、丹後の國雲原にては雷のやうに轟き渡りぬ、いな人の耳よりも熊の耳には雷よりも恐しい、熊が甚助の名を聞いたら立ろに震ひ戰くであらう

甚助は最早六十の齢を越えた老爺で、少さな直髷が白い蜻蛉のやうに禿藥罐にとまり、目は左の方が微にあるだけで右は全然丸つぶれ、それに鼻もない、口もつぶれてどこからが唇やら眞にのつべらぼう、實に奇々妙々な男です



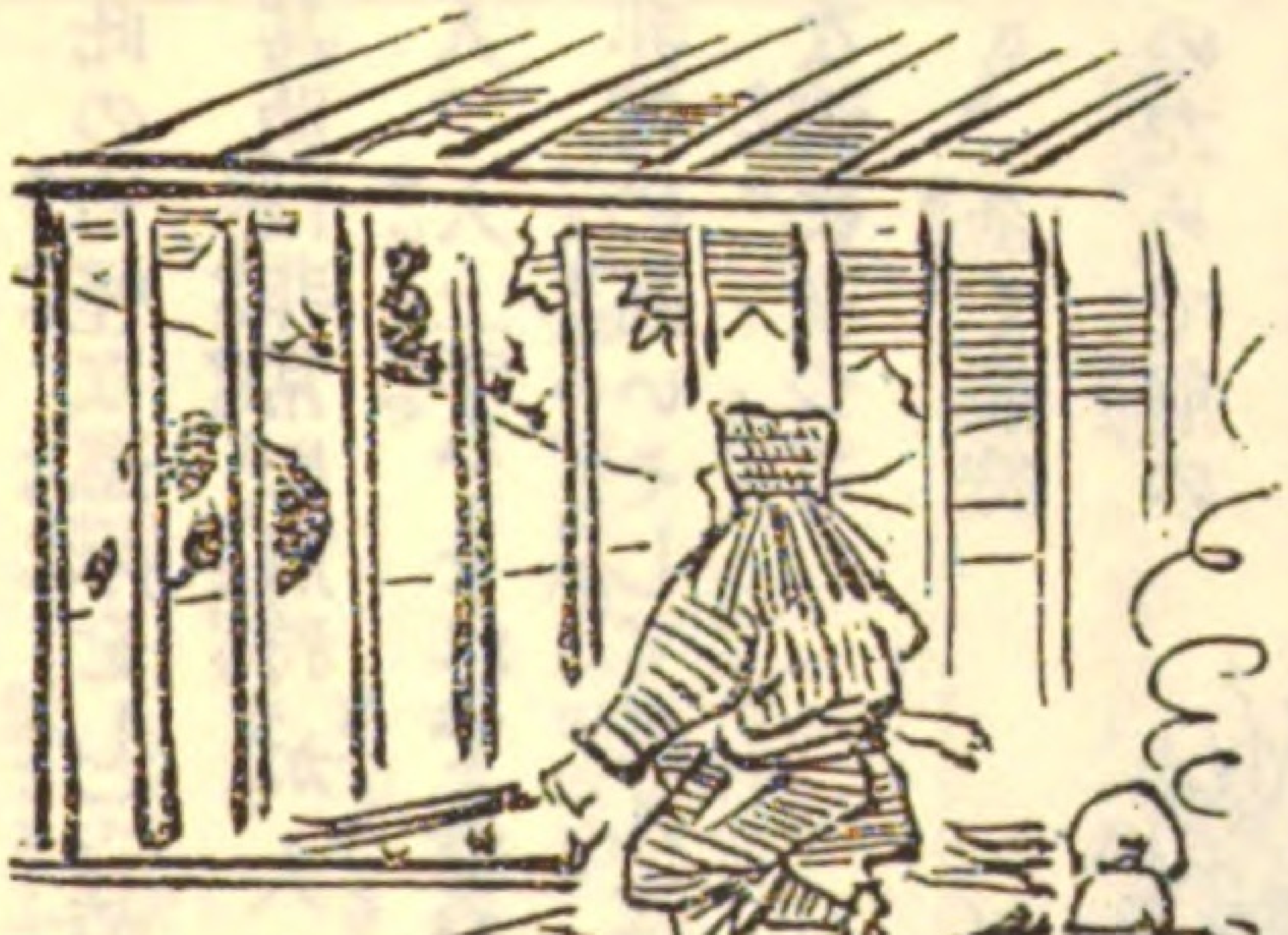
此の奇怪な風采をして居る甚助は非常に熊狩が大名人、大上手、それで其名が非常に高いそして此んな妙な姿になつても、全く熊狩のためで熊のために不具者となりました、けれど其後も熊狩を休めず、其の左の片々の眼で、二眼を備へし獵師よりも遙に射撃が熟練、殊に穴熊を射つことが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

至つて上手です

雲原近邊で如何にして穴熊を獵するかといふに、頗る危險な業で、此獵を試むるには必らず雪の夜が最も便宜を得る、六花紛々、一望銀世界の日、熊は穴より外へ出でゝ食をあさり、其料を己が棲所へ持ち歸る、足跡は白妙の雪に點々と印するを段々尋ね行けば熊の居る所へ達します、そこで甚助はいつも左の手の棒の頭に蠟燭を點け、其穴の口より身を潜め行く、穴は淺くて三四間、深きは六七間に及ぶ

熟練の功は大きなもので、甚助が左の眇眼で睨んだ穴には、必らず熊は居る、多きは三四頭も集つて居る、甚助は決して恐るゝことなく、穴に忍び入りて熊と僅かな距離に接近して、右に銃を構へ、左の手で例の差出棒をさし出す、熊は明が來ると寢た姿ならば、やをら起き上りて蠟燭の香を嗅く、すると熊の顏は明に分かッて、首の廻りの月の輪が甚助の目に見ゆると同時に、片手射に發つ、熊は急所を射たれて斃れる、殘りの熊は仲間が斃れるを見ば、恐れて急に人の傍をくゞりて穴の外に逃げ出し、決して抵抗をしないか、急所を射ち損じたらそれこそ大變、負傷の熊と仲間の熊と力を戮せて人間に烈しく抵抗し、已に穴熊を射損じて生命を落した獵師もあります、併し甚助は其非運に遭つたことはない、穴熊を狩るには百發百中、眞個に熟練なものです、甚助が熊のために不具になッたとは、穴熊のためでなく、此男か廿八歳の折、ひどい目に遭ひました



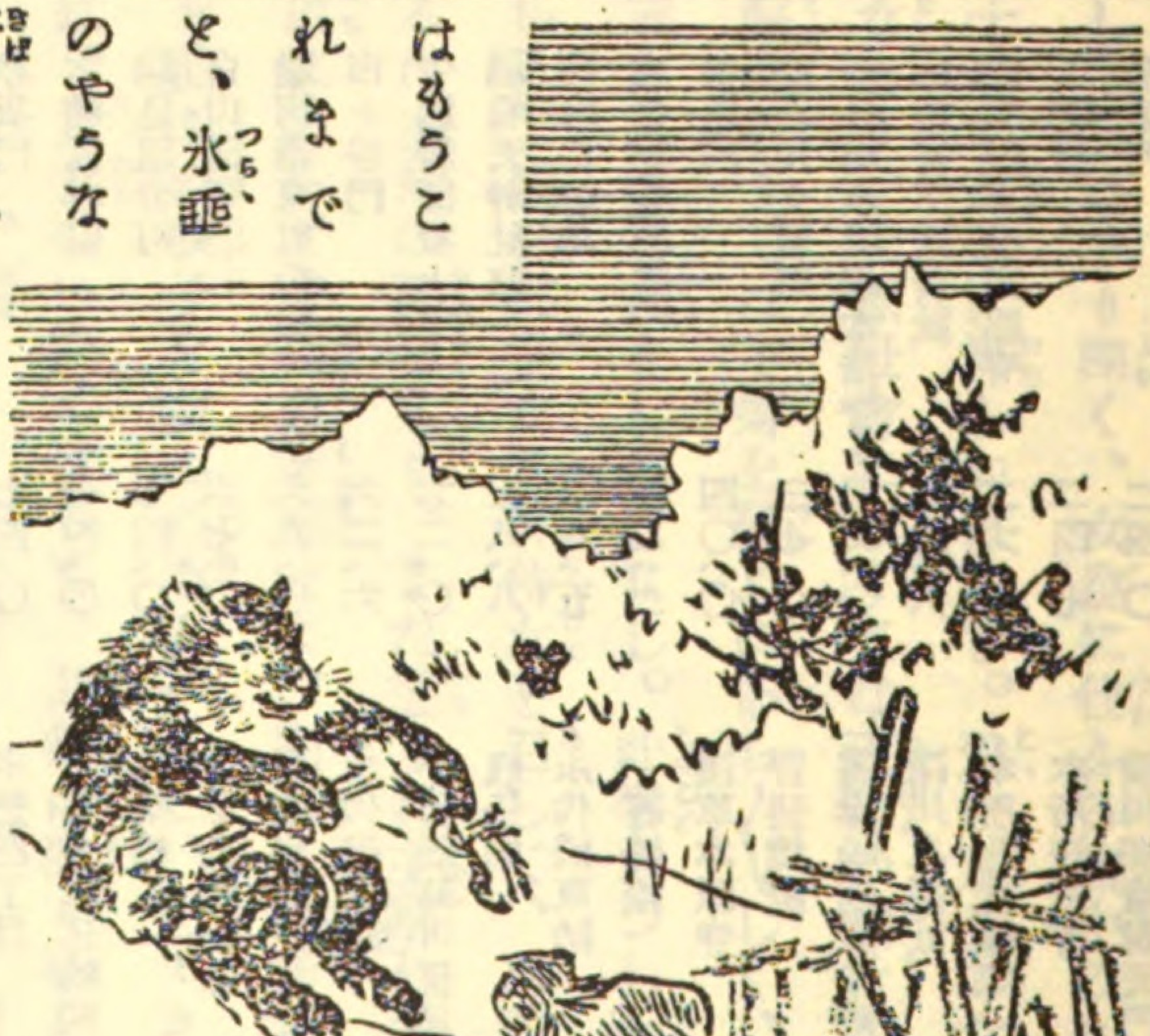
幵は如何なる事ぞと申すに、雲原近邊の山の谷間に太き丸太にて岩疊に檻をしつらへ、宵から朝までそこに

躙み、火を焚し食事も其所で濟し、其前を通る熊を檻の中から打ち止めるを此甚助の熊狩の一法として居ました

すると或夜、前面の山蔭から、小牛のやうな眞黒い大熊が來かゝる、此時まで双眼具備の甚助は早くも見つけてさてこそと彈裝せし銃追取り、近よるを待つ、大熊はだん／＼近寄りて人間が檻の內に怪しな風をして居ることを認め、怯めず憶せずやつて參り、檻から尺に足らぬ所へチヤンと座つて甚助の顏をつく／＼眺め居ました

甚助は大熊が餘り手近に來て平氣な顏をして居るゆゑ、氣が轉倒してねらひも碌に定まらず、月の輪見がけてヅドンと一發放ちました

命中はしたれど急所を外づれたと見えて、熊は一聲鋭く叫んで一先づ檻の周圍を駈け廻り、凄じい勢で檻を破毀にかゝッた、甚助は仕損じたり南無三寳と思ッても、其時分は火繩筒であるゆゑ、どうする事もならず狼狽する、熊は勢込んで苦もなく檻の丸太を引ッこぬき金剛力を兩手に籠めて甚助に飛びかゝッた、此方はもうこれまでと、氷柱のやうな牙をはみ出して嚙みつき來る熊の大口を見かけ、滿身の力を銃身にこめてヤッと一衝、熊は高く哮へつゞけ、ひつば



づし甚助の銃身をもぎ取りて物の見事にへし折りました、銃はまるでさゝらになつた事までは覺へて見ましたが、其後は一切夢中だと本人申しました此夜甚助は熊のため目も鼻も口ももぎ取られ絶命して居るのを、其翌朝仲間のものが見出し、介抱の上不思議に生命は助かり、不具にはなつたれど、此齢まで倘ほ猟銃で、好の道は止められず、まだも熊狩を續けますと本人の物語

東京地の高低

地名	海面上高度	地名	海面上高度
青山六道辻甲賀町	一〇九、八尺	芝愛宕社華表下	二三、〇尺
同南町四丁目二番地	一〇八、〇	虎ノ門	二二、五
四ツ谷門	一〇二、四	下谷上野廣小路	一九、一
麻布六本木光悪寺	一〇一、二	下谷上野信濃坂下	一七、五
市ヶ谷八幡社	九四、八	芝赤羽根橋際	一六、四
麻布一本松氷川社	九三、五	日本橋南詰	一六、二
牛籠門外	九二、六	神田萬世橋際	一六、〇
芝愛宕山上	八六、六	京橋際	一五、九
牛込赤城社前	八五、八	兩國橋東西詰	一五、一
田安門	八四、四	芝金杉橋際	一四、八
市ヶ谷藥王寺門前	八四、〇	神田橋	一四、五
牛込喜久井町	八二、五	一ツ橋	一四、〇
赤坂紀伊國坂上	七九、五	高輪大木戸	一三、八
赤坂門	七四、〇	本芝四丁目	一三、〇
本郷眞砂町	七四、〇	下谷金杉三嶋神社	一三、〇
駒込追分町	七四、〇	蓬萊橋	一二、六
白山前町	六七、〇	淺草鳥越神社	一二、五
駿河臺東紅梅町	六六、〇	馬場先門	一二、四
市ヶ谷門	六二、六	永代橋西詰	一二、三
牛込神樂坂上	六二、〇	下谷通新町圓通寺	一二、四
湯嶋天神社前	五八、八	雉子橋	一二、〇
葵町二番地	四八、五	永代橋東詰	一一、九
白金村覺林寺	四二、二	一石橋際	九、六
牛込門	四〇、〇	淺草本願寺	九、六
小石川久堅町	三七、〇	吾妻橋際	八、八
小日向水道端本法寺	三二、〇	靈岸嶋新船松町	八、五
麻布宮下末廣社	二九、六	深川八幡社	八、五
麻布四ノ橋東福寺	二六、七	本所北辻橋際	五、四
水道橋	二四、七	本所法恩寺	四、五
櫻田門	二四、〇	深川洲崎辨天門前	三、九



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家政

下女

K. K.

東京の如き都會にては、人の多く便宜もそなはり、下女を要する場合には直に得らるゝ故、少し氣に合はねば直ちに去らせる去るといふ風ありて、主僕の情を味ふに至るもの稀なり。田舍にては之に引替へ短かきも二三年長きは十年廿年さては一生奉公し、殆んど家族の親あるもの多し。何事も水の如く始終流れ居る都にては、斯る事は出來難きも、主婦の躾方と辛抱にては、隨分ナポレオンの泥の中よりよき大將を作り出したる樣に、山出の女よりよき下女を作り出すことも出來るものなり。記者曾て聞きぬ、某下宿屋の主婦に、一ヶ月二十五人の下女をかへたるものありと。斯くては主婦と下女の間、仇敵の樣にて、家のよく治まる時はあらざるべし。

英國の女皇ヴイクトリアは、下々召使を使ふに親切にして思ひやり深く、女皇に仕ふる宮中のもの、率ね何十年の長きに涉らぬはなし。爰に女皇の女官中に一貴女あり、交際社會にありては天晴の貴女なれども、家庭にありては下婢を使ふにあらく〳〵しく、其召使の女三ヶ月とて續きしことなし。此事いつしか女皇の耳にいり、或日其貴女と其侍女を召して、召使の常にかわるは主婦の恥辱なり、また徒りに主家を去るは侍女の道にあらず、共に辛抱せよ、別して主婦たる御身は人を使ふに我子を使ふ心あるべしと、懇々さとされければ、貴女はいたくはぢて、其後は深く心を用ひしといふ。よき下女はまことに少なきものなれ雖、よき主婦は猶多からず。主婦の一人の下女を使ふは、大將の一軍團の兵を使ふよりも六かしきものなり。やさしきに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

過ぐれば制裁行はれぬ様になり、嚴に過ぐれば表面に服して裏に背く。此間の手加減、主婦たるもの丶殊に心す可き所なり。

寒中の心得一つ二つ

カタル性感冒にかゝりたるときは、濃き鹽水を少しづ丶、日に數回飲むべし。

寒くなるにつけ、子供を大切にするの餘り、衣服を着せすぎる弊あり富裕なる家の女兒などは、殊に袖長く飾りて、自由に運動できざる様になり易し。幼兒の着物は輕く、寛かにする事を忘る可らず、幅を廣く仕立て、下着胴着などにはあまり紐をつけざるをよしとす。子供は呼吸深きもの故、胸のあたりをゆるやかにせざれば、呼吸を妨ぐ。又帽子ヅキンなどは、部屋の內、温かきときは被らせざるをよしとす。襟巻は習慣となれば、一寸とりても直ちに風ひくといふやうに、誠に弱くなるものなれば、用ゐざるをよしとす。

流行

家持の大禁物は「人が何様思はうか」にて、是が長ずれば家の獨立自立といふ事は、消へ失するに到るものなり。

近來の衣服其他の流行は、誠に便利有益なるものも、多けれ共、中には隨分馬鹿〳〵しきものも少なからず。考へある主婦は、家を土臺として流行を撰擇し、外觀の奴隷流行の奴隷とならぬ様にする人なるべし。巴里は世界の流行の中心といふ程ありて、畫伯久保田米僊氏の話に先年巴里の博覧會に行れし折、わづか數十日の間に、男子の絹帽子三度かはりしと云ふ程、流行の速なる處なるが、巴里の流行もとを質せば、隨分馬鹿げた事より起れるもの多し。或年パリに黄色のもの大流行を來し、黄色にあらざれば色にあらずといふま

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でに至りしことありしが、其本はといへば、佛蘭西隨一流の女優ラセール或時貧しき呉服屋の婆よりもゆふばかりの黄色の反物を、押賣され、やさしきたちの人とて、詮なく買ひて箪笥の中に押しこみ置きしが、或日不計思ひ出し、しよひをきても詮なければ、いや〳〵ながら衣服に仕立させ、それを着して舞臺に出でしに、其翌日よりパリー大流行の色となりけるなり。又或外國婦人巴里にあり。競馬を見に行かんとせしに、古びたる着物のみなりしかば、寧ろ黒に染めんと黒色の服つけ、將に出でんとせしとき、下女「あなた赤の蝙蝠傘をおさしなすつたら、うつりがようございましよう」といひしかば、其言に從ひて出でゆきけり。思ひきや翌日より、パリー中眞赤になりたり。又或女優宴會に招かれしに、時せまりければ、大急ぎにて縞の服をつけ、下婢に手袋を出させ、受取りしまゝ見もせてポッケットの中にをしこみ、馬車にとびのり行きぬ、玄關に達して手袋を出しみれば、あさましや、一方は黒にして一方は白なりけり、あな見苦しと思ひしも、せん方なく、はぢらいつゝも其まゝ席にいでぬ。これをみるより多くの婦女は、めづらしがり縞の服に、片ちんばの手袋をいたくめでゝ、はてはパリー中の流行となれりとぞ。かくの如く流行の本をさぐれば、實につまらぬ處より起るもの多し。我國殊に東京の如き都會にありて、いろ〳〵の流行あるが中に、廉價にして美術の趣味もあり、隨分採用するに足るもあれど、一も二もなく流行流行とてこれに從ひゆくは、主婦の不見識を披露するのみならず、家の破滅となるべし、謹しむべきことなり。

家內日用雜事

同

箒(別して臺所などの)を永く保つには、一週間に一度

熱きシャボン水に、三分時ばかりの間ひたし、さかしまにたてゝ乾すべし。

いぼをとるには、ヒマシ油を毎日一回づゝ、二週間乃至六週間も怠りなくつくれば、見事にとるゝなり。

油手の人は、誠にこまる事あるものなるが、酢に香水と燒酎若しくはブドウ酒を混じて洗へば、次第に油氣をさるべし。

黒のキヤラコを洗ふに、豫め鹽水に浸しをくときは、色さむる事なし。

毛織物を乾すには、決してしぼる可らず、打ふりたるのみにて、竿なり紐なりにかくべし。

内職案内

眞綿摘　これは女中方に至極適當な内職にて仕業も日ごろ手懸られる事ゆゑ別に言ふ迄もなからん賃錢は百匁に付き十錢位ゐなり日永の節少し熟練に至ると百匁以上仕上るは左まで骨折にはあらざるよし中以下細君の留守仕事などには先づ手綺麗にて適當の分ならん

古木綿切　これも熟練不熟練に係はらぬ女中向きの仕事なれど堅く固まりたる古綿を細かに切り解く事故隨分小汚なき業なり賃錢は一貫目に付き三錢五厘ぐらゐ不熟練の者にても一日三貫目位ゐは仕上ぐべく熟練に至れば五貫目以上を遣るもあり併しこの分は大躰貧民の内職なり

落花生の皮剝　近來落花生の皮剝きたるを砂糖掛にせし菓子が流行るので此の皮剝き内職なか〳〵忙がしく一升に付き賃錢六錢位ゐ一日一升五合位ゐは子供にでも出來べく夫れゆゑ内職を望むもの追々多きに至れりと

ボール箱　菓子箱、鷄卵箱、石鹸箱、花簪箱にまで近年皆このボール箱を用ひるので内職人に不足を來たす勢ひあり賃錢は一日六錢以上十錢以下にて甚だ格安な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れど孰れも十二三歳の子供が多く辨當を持て日々先方へ通ひ行くものと知るべし



社交一斑

新春瞥見

流行子

綠門は年々に左手に成り行き、西洋料理、洋服裁縫店、寫眞店等の門外に見るのみ松飾りの目新しきものは、意氣な社會には斜竹かづんどう竹の三本揃に姫小松を根占にして砂盛高く、繩の結び目を梅花形にしたるは松竹梅の目出たい當込なり、ずつと簡略にしたる所では、西の内を裂へベッたり張紙の、はるの心の松竹と大きく、其下に七五三と書いたはきつい洒落と知り玉へ、通り一丁目より仲橋に至るまで軒別に松、七五三飾りの賑ひは流石東京の中心點、それより北へ室町より本町、淺草橋に至るまでは問屋々々の店並び、土藏の光りは元日の見る物にせん富士の雪と黒白の色を爭ひ、中に綠の松と竹、一際まばゆき大旭旗、聯隊旗を押し立てたりしは問屋店の大きい所なり、淺草橋より須賀町邊までは松の色こそ淡けれ、吳竹の節正しき男竹一對軒並に葉繁きは町内一般の申合せなるべし

新年最も多く見受けたる紳士風は、黒七子の三紋六分五ツ紋四分、三枚襲三分二枚襲七分、上着はより糸織か市樂、下着は市樂風通織一枚か二枚、帶は紋織博多、袴は練仙臺の淡縞最も多く見受けられ、此上に斜綾羅紗の外套の胸を開きて美衣をほのめかすは所謂紳士の當世風か

商人らしきものゝ手堅き風は諸糸織の羽織、結城紬の上着、下着も同品か、ずつと澁く行く所で大島紬を重ねたるを見たり

新年禮服にはあられど紳士の不斷着の樣子を見るに大島紬の書生羽織に同じき上着下着を重ねたるは例の如く流行

平民的は薩摩絣か久留米絣にて上下を仕立つゝちと武骨なれど必らずし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も書生社會に限らず、今春は眞岡の紋附羽織頗る多く見受け申しぬ
婦人のは禮服に淡色の縮緬か（色は鼠第一等多數黑も相應に見受けらる）、紋織お召二品に限る、但し三枚重にして裾模様七分ふき模様三分の形勢

遊歩着の羽織は矢張黑縮緬の三紋多数を占め、千草色も今年は存外見受けたりき、女兒には幽禪縮緬の總模様又は高砂染（あけぼの）多かりき、しごきには鬱金縮緬目立ちぬ

世間の好景氣と反對にて不景氣に見ゆるは花柳社會の新年なり松飾りこそ變られ、藝妓等の新年廻りを見るに三枚重も大抵昨年のものを問に合せ、新規のは稀に見る所、新橋は本場だけいやでも表を飾り牛込神樂坂邊は軍人の懷中の温い所より存外景氣づきたれど其他の場所は中には年始を廢して炬燵にうづくまりて新年旅行と紳士がるものあるよし、道理で綺羅剛々の華美引立たざりしは寧ろ國家のため賀すべき事なり

雜録

廣丙號の沈沒

吾人は日本國民が海事思想を振起し、海上事業の發達を致し、以て大々的海國民たる我國人をして『海の日本人』たるの實を盡さん事を切望す然れども海上は最も危險多けれど、此目的を貫徹するに於て何かあらん、最近の一例を以て如何に海の危險なるやを語らん

征清役の一個の好紀念物を失ひ威海衛の一勇將藤田海軍少佐を失はんとしたる廣丙號沈沒の電報は全國民の驚愕は勿論同號乘込員の家族が如何ばかり其安否を氣遣ひ居るかは中々に想像も及ばぬとなるが近頃臺灣より歸京したる鹿兒島の種田誠一氏が同號沈沒の詳況を其筋に報告せんと臺南より臺北に赴く途中基隆に來りたる同號便乘者にして同じく覆沒の厄に遇ひ九死一生を得たる宮内澎湖島司に邂逅し親しく同氏より聞き得たる談話の概略は左の如くにて宮内島司には兼ねて八罩島なる澎湖附近の一小島に林廷禎なる一兇徒澤山の金員を所持し潜匿し居るとの事知れ居たるを以て右の兇徒捕縛の爲め同號に便乘し居たりと云ふ

明治廿八年十二月廿一日午前七時三十分余は警部上妻

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隆行外二十三名を引率し澎湖島廳を發し媽宮城順承門外第一棧橋に於て守備隊長熊耳大尉憲兵支部長米澤大尉の一行十一名と會合茲に於て一行三十六名豫て島廳より差廻し置きたる三十六名に對する三日分の糧食と共に端艇三隻に乘組澎湖水上警察署所屬小滊船隼房號に引船を爲さしめ同八時第一棧橋を發し同八時十五分軍艦廣丙號に搭載同八時三十六分揚錨前進同八時四十七分左舷錨を投じ同八時五十五分再び揚錨同九時五分前進微速同九時十分全進同九時四十五分漁翁島砲臺下通過針路を南東四分一東に定む同十時廿五分針路を南二分一東に變ず同十一時五十三分海圖になき暗礁に乘り上げたり位置は倉島(八罩島將軍澳)を距る一哩四分の三にして「スチーブル」島南西二分の一南「ロウエル節山」北西四分の一西へ礁列島東に南南西深さ右舷ベウ一尋二分の一なり本艦暗礁に觸るゝや艦長は第一着に余の一行三十六名を甲板上に整列せしめ端艇の用意を命じ「ピンネース」に余外二十四名第一「カッタ」に上妻警部外十名を乘せ上陸せしめ而して一行が倉島南岸に達したるは午後一時四十一分是より先き本艦暗礁に乘り上ぐるや風力(北)は一層其度を高め益々强風となり激浪本艦の甲板を越へ既に顚覆せんとするの狀景なりしにも不拘艦長は順序を追て能く萬事を指揮せり爲めに一行三十六名は九死の中に一生を得たり而して余は上陸するや將軍澳の南端に在る黑思主廟を假りに宿舍と定め警部上妻隆行に命じて第一着に八罩島綱按へ巡査一名憲兵一名を派遣媽宮城在海門艦へ遣す報知船の徵發に着手せしめ一面は將軍澳に於て本艦へ差向くる救助船の徵發に着手ジャンク船一隻に憲兵巡査の內一名宛を監督として乘組ましめ出發せしめたるに既に本艦は沈沒して艦影を失したり于時午後二時なりしに依て徵發せしジャンク船の準備整ひ次第追々數隻を差向けたるも如何せん次第に風力相加はり到底前進する

を得ず途中より引返したり然るに右救助艀舟に本艦のボートは將軍澚へ寄するを得ず風波に漂ひ八罩島網按の方位へ進行せり故に他に亦た施す可きの策なし余も之れには殆んど閉口せり而して黒思主廟前の柱に海軍旗を揭げ標識と爲し一面は郷老を呼出し本艦遭難の旨を告げ人民動搖せざる樣懇に篤諭し糧食の徵發に着手せしむ然るに當村には白米又は玄米とてなく只だあるは籾のみにして一升或は五合と四方より徵發して之を搗かしめたるに午後七時迄に漸く白米三升を得たるのみにて到底余の一行三十一名（五名は救助に派遣したるも風波の爲め歸村するを得ず依て此人員を省く）笠松大主計以下二十四名（將軍澚に上陸の分）合計五十五名に一椀の粥を與ふる譯に參らず青菜の鹽汁（味噌醬油と云ふものなし）にビスケットを給與せり本夜は巡査總員の半數八名を以て夜警を爲さしめ內外保護の任に當らしむ一行は不意に暗礁に乘り上げられたるとて漸く一命を全ふしたるのみにて携帶行李を取出すの餘暇なきのみならず最初本艦暗礁に乘り上ぐるや其音響に各自打驚き先きを爭ひ甲板上に飛出したると同時に艦長は便乘者に整列を命じ直ちにボートに乘組上陸す可き事を命令せるが故に憲兵巡查は銃劍を取出すの餘暇なく既に該室は侵水出入を禁じある次第にて又た如何とも致方なく實に九死一生の場合なりしを以て着服の外一品も携帶せず加ふるに上陸の際は激浪ボートに打込み爲めに衣服は悉く海水に浸されたるも別に着替ゆべきものなく且つ北風強く寒氣甚敷非常に困難を極めたり本夜は一同黒思主廟の土間に莚一枚を敷き俗に云ふ「ジャコ」寢を爲したり其の憐れなる狀景は筆紙の能く盡さるゝ處にあらず

明治廿八年十二月廿二日午前七時前日來徵發せし處の支那米を以て粥を炊き鹽（臺灣鹽の眞黒きもの）を混入し之を給與せり然るに一同前日の朝飯を食したるの

みにて前夜は少量のビスケットを給與せしと雖も空腹を僅か支ふる迄にて今朝の粥に至つて始めて空腹を満し蘇生の心地を爲したり食事終り次第ジャンク船を徴發綱按地方遭難者搜索の爲め屬員を派遣せんと其準備中一隻のジャンク船に航海士川村少尉乘組み來訪艦長以下六十二名綱按へ漂着の報知に接し直ちに一同倉島即ち將軍澳を引揚げ午前九時十二分同村を發し同九時四十分綱按へ到着同村郷老許占魁家宅を宿舍と定め藤田廣丙艦長と同宿せり而して艦員總計九十四名本官一行の三十六名合計百三十名を八ヶ所に宿舍を定め郷老を呼出し糧食を徴發せしめ將軍澳同樣の粥を供給するに至れり是より先き前夜艦長以下六十二名綱按へ漂着の際は綱按郷老許占魁等の盡力にてジャンク船二隻に人夫六十四名を出し艦長の一行を救助し且つ糧食宿舍を徴發供給する等非常に優待せり元來郷考許占魁なるものは綱按の紳士にして同村の名望家なるを以て曩き

に態々澎湖島廳に招待して　天長節祝賀の宴に列せしめ且つ御眞影を拜賀せしめたるものなるが余の一行及遭難者一同を優待し萬事便宜を與へたり是より先き藤田艦長は余の一行及び主計軍醫其他病人等を上陸せしめ端艇の歸艦を待ち上陸者に供給する糧食等を送らんと其用意を爲し甲板上に糧食を運び端艇を待ち居たるに既に端艇は本艦を距る五六十間の處まで漕ぎ着けたる際本艦は暴風と激浪の爲め船躰は斜に相成り既に沈沒せんとするの狀を呈したるに依り機關の破裂せざる樣夫れ〱手當を爲し艦員一同甲板上に集合を命じ玆に於て　天皇陛下萬歳を三唱續て生存者萬歳を唱へ終ると同時に本艦沈沒せしに依り銘々海中に飛込み泳ぎ居る處へ端艇を漕ぎ着け艦長等を救助せしものにして艦長ボートへ救助せらるゝや海中に泳ぎ居りし艦員は一同口を揃て艦長さへ助命すれば滿足此上なしと叫びたりと是れ艦長が施したる前後の策其宜敷を得たる結

果なりと云も敢て過言にあらず

却説艦員行衛不分明の六十六名捜索及び本艦遭難の始末報告の爲めジャンク船を徵發せしも何分前日來の風波減退せず去りとて天候の平復する迄猶豫するに於ては行衛不明艦員の捜索に機を失するのみならず生存者百三十名に對する糧食は徵發しつゝあるも到底數日を支ふるの見込なき處より風波平復を待つの暇なく明治廿八年十二月廿四日午前十時五分余は屬員押義學外二名を引率加藤少尉以下々士卒五名同行徵發したるジャンク船を無理に出船せしめ危險を冒し漸く同日午後十時安平港へ到着せしも暗夜のことて行先見へず港口分らず如何んとも致方なき處折節運送船隅田川丸碇泊中なりしを以て同船に乘り移りし處幸ひに板橋大尉(通信部員)乘船にて廣丙沈沒の有樣を述べ行衛不明の艦員捜索幷に生存者に對する糧食輸送方等一切の請求を爲し同行の加勝少尉の一行は同船にて打狗へ差向け余は屬員押義學外二名を隨へ同港碇泊の運送船、賀の浦丸に移りしは翌廿五日午前一時なりし同船に一泊の上午前八時安平通信部へ上陸大本營及海軍局長には廣丙艦長の名を以てし續て本官も總督府幷に澎湖島廳海門艦水雷敷設部等へ廣丙沈沒の旨を電報し且つ安平出張所より金三十五圓と白米二俵を借用八罩島より安平までの船賃を支拂ひ同日午前十時安平通信部を發し同十一時三十分運送船滋賀の浦丸に乘船同午後二時三十分安平港出帆同五時三十分打狗港へ到着同時に屬員押義學を打狗通信部へ上陸せしめ遭難者救護船派遣の實況取調を命じたり本夜風波の爲め屬員押義學は同船せず余一行は本船に一泊す而して其翌廿六日午前八時上陸せし處運送船有明丸安平に向ひ同九時出帆すとの報告に接し直に出發の準備を爲す是より先き板橋大尉に救助船派遣の事を托し置きたる處運送船隅田川丸にて廿五日午前一時二十分安平を發し同四時廿分打狗へ到着

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

烟草三萬本毛布二百枚四斗入酒二樽一斗入醬油二樽を運送船熊本丸に搭載同日午前九時打狗を出帆遭難地なる八罩島へ向へりとの報告に接し大ひに安堵せり茲に於て打狗兵站司令部長多田中佐同通信部長西山少佐を訪問せり同兵站部に於ては余の一行へ毛布八枚を供給せり同日午前九時四十分運送船有明丸へ便乘正午十二時三十分打狗港出帆午後三時十分安平港へ到着同八時十五分安平通信部へ上陸兼て目的の林廷禎を八罩島に於て捕縛の旨牧民政局長代理へ電報を發し且つ余は遭難始末上申の爲め總督府へ出張の旨澎湖島堀口警部へ打電の上同九時安平兵站司令部長武中中佐を訪問遭難者へ供給すへき衣服及毛布の請求を爲したるに出來得る丈け取纒め澎湖島廳へ廻送する事に承諾を得たり本夜は隨行員と共に同所へ一泊せり翌廿七日午前七時安平兵站司令部出發同八時運送船旅順丸に便乘同十時三十分安平港出帆するや午後より風波相起り動搖甚しかりし爲めに進航意の如くならず翌廿八日午後四時四十五分漸く基隆港へ到着す波風の爲め着港豫定時間に遲くるゝと十時間にして之れ航海中困難の一般を徵するに足る而して午後五時廿分基隆通信部へ上陸同六時十五分基隆石牌街十九號東京館内田幸太郎方へ投宿す是れより先き廿五日打狗を出帆せし熊本丸は八罩島へ航行の途次八罩島の内東吉島の屬島なる東嶼坪に於て水雷長海軍大尉長井群吉以下二十九名を救助の上八罩島へ出向同島滯在の廣丙號艦長以下九十四名警察官の一行三十二名合計百五十五名を搭載翌廿六日午前九時澎湖島へ到着便乘者一同を上陸せしめ同日午後二時熊本丸は澎湖島を出帆同日午後七時三十五分安平へ歸港せり廣丙乘組海軍大尉中島市太郎は遭難始末海軍局長へ上申の爲め熊本丸に便乘安平に於て余の一行に加はり旅順丸に便乘す廣丙乘組總員百六十名より艦長以下生存者百二十三名を控除せば行衛不明の者は准士官上等

兵曹笹村英助以下三十七名とす蓋し將校以上は悉とく生存す

便乘者人名

澎湖島廳

島司宮内盛高、警部上妻隆行、雇員押義學、巡査長阪忠哉、仝圖師敬介、仝野間口高俊、仝東恩納盛展、仝山口盛弘、巡査酒匂八藏、仝林茂實、仝大和新次郎、仝池野辰藏、仝加來某太郎、仝永友安一、仝田中眞熊、仝西原作一郎、仝川俣源助、仝伊藤松彥、仝酒井亮介、通譯官古立昌盛、島廳雇南亭、仝徐温、看護人中村正一、人夫中山新吉、仝植田源助、

小計二十五名

守備隊

隊長陸軍歩兵大尉能耳盆藏、從卒一等兵三浦市之丞、

小計二名

憲兵支部

分隊長憲兵大尉米澤元子、憲兵曹長宗止詮、憲兵上等兵谷本晉作、仝森田龜吉、仝安藏熊吉、仝清水千代三郎、通譯官兒島菊太郎、憲兵雇土人葉螢秋、仝張頁

小計九名

便乘總計三十六名

廣丙號生存者八名（八罩島上陸の分）

艦長海軍少佐藤田幸右衛門、機關長大機關士清水門之助、軍醫長大軍醫岡本覺太郎、主計長大主計笠松千代治、水雷主機大機關士中島市右衛門、分隊士海軍少尉加藤雉次郎、航海士仝川村茂勇、少機關士吉松威稜麿、少軍醫和田八千穂、機關師堀江作右衛門、仝大場德松、一等兵曹小枝競、仝白井峰吉、仝吉岡千太郎、二等兵曹播田岩次郎、仝山崎勝之助、三等兵曹工藤喜代吉、仝加藤新太郎、仝柳橋才藏、三等兵曹藏田源次郎、二等機關手森田熊吉、仝小松清作、仝長田德藏、三等機關手前村勘右衛門、三等機關手宮本彥藏、二等機關手岩田三次郎、三等機關手長野金太郎、三等船匠手木川檜次郎、三等鍛冶手宗廣捨松、三等看護手三浦常之進、一等主張久保田喜作、二等主張橋本仁之丞、三等主張石川市太郎、一等水兵藤本松太郎、仝藤田右源太、仝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

洗彌一郎、仝萩原源之進、仝松本壽太郎、仝吉田數造、一等水兵西田要次郎、二等水兵鐙津富吉、仝倉本光次郎、仝成疋初太郎、仝保田清太郎、仝關楠彌太、仝妹尾祐教、仝中山善五郎、仝國中末吉、仝富田巳之吉、二等水兵清田金次郎、仝長谷川市太郎、仝廣本銀十郎、三等水兵福島喜一郎、仝柏谷三太郎、仝河村久藏、仝十柴春治、仝谷口久內、仝福村信貞、仝松頭長松、三等水兵平尾長次郎、仝北野房吉、仝山下源藏、四等水兵石田松太郎、仝佐藤啓藏、仝長戸和休、仝小寺留吉、仝墨瀨甚太郎、仝池田千太郎、仝大谷源吉、四等水兵山下籐吉、二等信號兵本川與之助、一等機關兵十出水忠藏、仝原口德太郎、三等機關兵竹內岩太郎、仝清水萬次郎、仝川田與吉郎、仝西村太兵衛、四等水兵田中前助、四等機關兵小島信、四等機關兵中西直助、仝中村幾太郎、仝谷口佐平、仝八木國太郎、仝松浦長藏、仝片山定次郎、仝川島光吉、仝本村庄吉、一等木工酒井才太郎、三等木工和田勘吉、一等看護內田辰次郎、一等主厨小林彌太郎、二等主厨石里龜藏、四等主厨仲木定之助、艦長從僕近藤國太郎、

小計九十四名

總員百六十名　差引六十六名不明

第二回廣丙號生存者人名（東嶼坪上陸の分）

水雷長海軍大尉長井群吉、航海長木村剛、分隊長仝中島市太郎、分隊長仝烏丸光正、分隊士海軍少尉藤本定吉、少尉候補生生野太郎八、上等兵曹渡邊國太郎、三等兵曹武田喜三次、仝布施銀藏、一等水兵松尾熊吉、仝殿浦久吉、二等水兵林藤吉、仝丹羽喜三郎、仝花岡國藏、二等水兵上田淺樞、仝岩田龜吉、仝長谷川芳松、仝瀨尾求馬、仝梶川善太郎、三等水兵角田助次郎、四等水兵綿崎十二郎、仝武田喜作、三等信號兵島瀨爲樞、仝川上玉郎、二等機關兵大田香太郎、三等機關兵片原虎雄樞、四等機關兵俵市太郎、仝遠藤初五郎、

小計二十九名

生存者通計百二十三名

總員百六十名　差引三十七名行衛不明

廣丙號行衛不明人名

上等兵曹笹村英助、一等兵曹高辻喜太郎、仝石原杵藏、二等兵曹坂下竹松、二等兵曹大西卯太郎、仝井上關太郎、三等機關手山口平八、一等水兵中井元助、一等水兵木村音吉、一等水兵藤本又一郎、仝岩永常太郎、二等水兵窪田要次郎、仝德岡榮吉、仝東山楠吉、仝谷村庄太郎、三等水兵岩田倉吉、仝加藤龜作、仝永谷房太郎、四等水兵永田丑之助、四等水兵大槻兼松、仝松島鐵之助、仝藤井福太郎、二等信號兵增田勇次、一等機兵田窪彌太郎、仝越智友次郎、仝石原長太郎、二等機關兵宮崎虎次、三等機關兵松村元四郎、仝柴山鐵次郎、三等機關兵錦會利作、一等鍛冶岩本光五郎、一等主厨秋山平四郎、仝大原嘉三郎、三等主厨定光富太郎、剃夫日野久次郎、割烹幾田金藏

小計三十七名

卷首の書畫

加賀千代の眞筆　卷首に添へし短冊は廿五歲より七十五歲まで寡居の生涯を送り、俳諧風流を以て天下に名聞へし加賀千代の眞筆なり曰く『梅が香や殊に月夜のをもしろさ』

社友の祕藏せるを寫眞石版に上したるものなり、千代の小傳は本紙五十三號にあれば詳く記さず

米仙の新年揮毫　本年新春の宮中歌題は何、本年は支は何、新年家庭の樂は何、畫解を用ゐすとも、諸君は已に默會せらるゝならん

歌苑

寄山祝

くまもなき空にそびねて富士の根は動かぬ御代のしるしなるらん

寄山祝　(村瀨のふ子)

大空にそひゆるふしのみ山よりきみが御威稜の高くもあるか那

松上鶴　(同人)

いろかへぬ操かなれもめづるらん松をはなれぬ千代の友つる

閑居竹　(同人)

吾庵はもさより竹の陰なるをかくれすむさや人はみるらん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隣家梅

中垣のへたてあれともへだてぬはとなりの梅のかほりなりけり

琴

いづくにか主はさゝかにわかれともいやなつかしき琴の音そする　（筑峰女史）

新年鶴

春霞けさたちかへる大そらに十代を壽久田鶴が音そする　（同　人）

家庭雜誌の隆盛をことほぎて

庭の面に生ふる小松の年毎に千代を契りて榮ひ行らむ　（信濃　白虎生）

寄山祝

幾千代を經ても動かぬ不二の山國の姿はかくやあるらん　（同　人）

都鄙迎年

志ろしめす君か御威稜に安らけく年や迎んひなも都も　（同　人）

家庭雜誌を讀みて

家を治め母たる人の一時もはなさずや見る文は此文　（同　人）

國民新聞の隆盛を祝して

國民の國に立ちたる其日より立てし功は限り志られず　（同　人）

名所松

千代かけてかはらぬ色に榮ねなん神代ながらのはしだての松　（横濱　天然生）

松間月

ときは木の高きみさをやめでぬらん清くもかゝる秋の夜の月　（仝　人）

敎へ子に示すとて（韻文）　（小池友之）

月日は矢よりもはやけれど。過ては又とかへらぬぞ。
あだにな過しそ今日の日を。あすを待まで勤めてよ。
頭にゆきのふりてのち、いかに悔ともかひはなし、
花のつほみの少女子よ。學ばん時は今なるぞ。

新年

あら玉の年たつけさの嬉しさに老も忘れてくむか豐御酒　（小池友之）

同

さしのぼる朝日のかげを一年の御代の光に類へてぞ見る　（同　人）

冬山家

木枯の吹きくるなべにむさゝひの聲おそろしき冬の山里　（群馬　藤生友光）

初春見鶴

初春の日かけのとけき松か枝に八千代を歌ふあしたづの聲　（同　人）

海

うなはらの限りやいつこおほつかなこきゆく舟もくもにいりぬる　（田中君廻）

晴嵐

うちわたす廣野のからは雲もなしいつくよりふくあらしなるらん　（同　人）

新年

新玉のとしのはしめはなにとなくこゝろのとかに樂しかりけり　（佐賀七浦中野萬龜子）

新年祝君

あらたまるとしの始めの大空に君萬代をよはふたつのれ　（同　人）

霞

いつしかも春やきぬらむ足引の山邊のとかに打かすみたり　（同　人）

池邊柳 (同 人)

曇りなき池のかゝみにむかひつゝ
まゆつくろらん岸の青柳

病あるころ家僮の福壽草といふ
はなをおくりこしければ (若 廻)

しのゝめの 立ちぬらん
そらより春や あさひこの
さよさかのほる まくらべに
窓よりさせば 福壽草
なゝしくも匂ふ たまのきぬ
こがれのかむり こゑすなり
八千代たいはふ
げにも愛度くさ花よ！
みやびなりけり 家のこが
病のとこの いふせさた
なくさめんとて おくりける
心は花と さきそひて
千代たことほく 風情なり
げにもやさしの下ッ男よ！

社告

懸賞募集小説應募諸君

新年大附錄募集小說、文學堪能の諸君より投寄の勞を蒙り已に集ること百餘篇に達す豫告の通り此内より甲乙丙の三個を撰拔し本號へ掲載しぬ然れども此外に掲載すべき各篇佳作少々たらざれば次號より載せて江湖に紹介せんことを期す

三十一字及新躰歌投寄諸君へ

倍々三十一字及新躰歌を歡迎す但し成るべく時節物を可とす

一月十日 家庭雜誌編輯局

家庭叢書全部拾貳册完成

- 第一巻　六版　家庭の和樂
- 第二巻　四版　夏の家庭
- 第三巻　三版　玩具と遊戯
- 第四巻　四版　家庭教育
- 第五巻　三版　小兒養育
- 第六巻　三版　家庭衛生
- 第七巻　再版　家政整理
- 第八巻　初版　簡易料理
- 第九巻　三版　社交一斑
- 第十巻　初版　婦人と職業
- 號外　初版　家庭理財
- 號外　初版　名士と家庭

定價各拾錢郵税各貳錢

發兌元　東京市京橋區日吉町　民友社

豫告

少年傳記叢書

我社江湖讀者の愛顧に依り叢書の出版を重ね、今重ねつゝあるもの、既に六叢書、五十有餘册の多きに達し出。曰く平民叢書、曰く社會叢書、曰く家庭叢書、曰く國民叢書、曰く青年叢書、曰く十二文豪、皆な其盛を極むるに非らざるはなし・是れ夙に我社が愛顧者に對し感荷措く能はざる所也。而して今や江湖の急需は我社をして更らに一の叢書を出版せしむ。

少年傳記叢書是れ也。

少年傳記叢書は家庭叢書に依りて、慈母の愛育を受けつゝ成長せし少年が、其清淨にして軟弱なる腦髓に前途の大志を孵化せしむる養分たらしめんとするに在り。

故に其說く所ろは平易にして正平、健全にして確實、周く國の内外洋の東西に於ける偉人英傑の少年時代を說明し、叙述し、以て彼等に圓滿の希望を抱負せしむるを期するに在りとす。

右第一巻として本月内に發兌するは

フランクリンの幼少時代

にして其記事の有益なるは今呶々を要せず。

發兌元　東京　民友社

○○雜誌界の巨人進歩止まず週刊となり分冊英文となる

國民之友

一冊六錢十冊五十五錢二十冊以上壹圓の割郵税五厘英文分冊一冊十二錢但し此讀者へは特別價十錢郵税內國五厘

平民主義の主唱者革新軍の先鋒たる彼れは世界的思想を發揮せん爲め新たに英文雜誌(ファーイースト)を分冊として發行せんとす

○○高尚なる論議な插入せる新聞泰斗

國民新聞

一枚二錢一ヶ月金三十五錢市外郵税一枚五厘

自主的外交責任內閣の實行を疾呼し强兵富實世界に濶歩して恐れなき恥なき國民の指導者代表者を期す

○○家事經濟の指南者

○○社會根底の改良者

家庭雜誌

一冊五錢半ヶ年十二冊五十錢一ヶ年二十四冊一圓市外郵税一冊に付五厘宛

他日第二の東洋大戰爭に天晴れ勇々敷殉公殉民の偉丈夫を賀出せんは健全清和の家庭獨り之れを克くすと知らずや

(友)(新聞)(家庭)

○○發行所は東京京橋區日吉町四番地

民友社

國民新聞社

家庭雜誌社

○○爲替振宛局は芝口支局

速記法

自宅獨習生募集 月謝二十錢 二ヶ月卒業

規則書入用の者は郵券二錢を投ずべし

東京下谷區徒町二丁目三十番地

速記學專修所

恭賀新年

民友社員一同

國民新聞社員一同

家庭雜誌社員一同

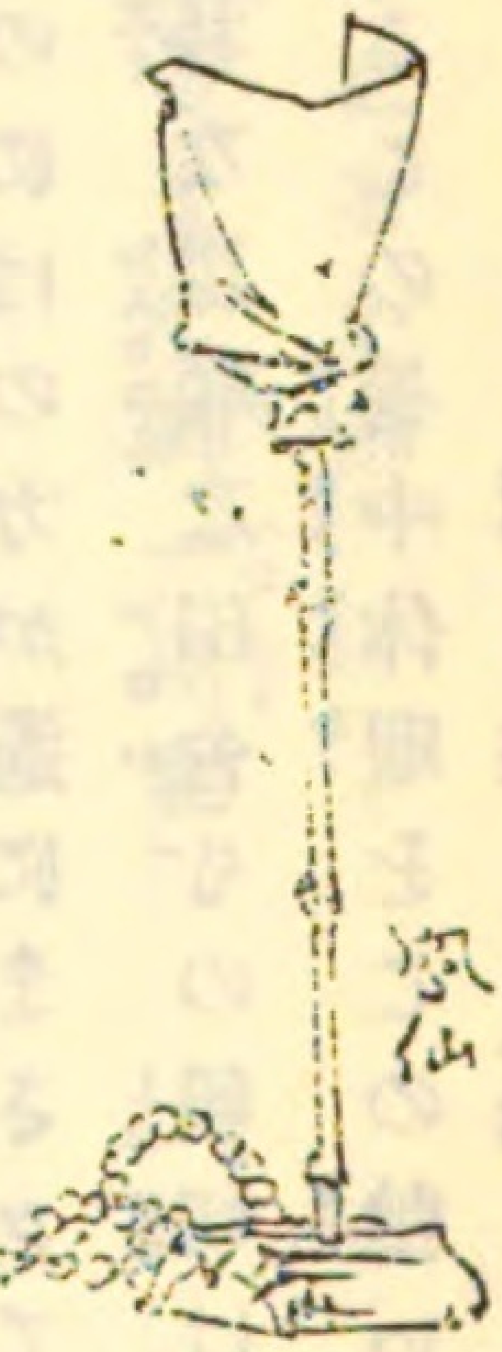
家庭雜誌第六拾九號附錄

(明治二十九年一月十日發兌)

文藝

募集小説

甲選



私は自活自學の一書生、その暇をぬすんでのこの作、まして小説――といふ程でもないが――はこれがはじめて、自分ながらもまだ〱氣にくはないけれどさりとて暇もない、期限も切迫して止むをえずかくの如く　みづほしるす

青い山清い水　　水田みづほ

第一回

あゝ青い山清い水！あゝ田舍ほどいゝ處はない。おれはなぜから喧しい處にうまれてきた

のかしらん。一町さきに行くにも車、二町先にゆくにも馬車、いかにも便利は便利である。煉瓦造りの家、花崗石しきつめた道なるほど立派は立派である。都はさて便利で立派な處「車馬絡繹、人口織るがごとし」。然しおれにはいやな文句である。あゝあの田川の流＝たとひ肥料のためには濁るとがわらうとも＝又あのわらやずまひ＝たとひその障子のくすぶつて破れてをらうとも＝むしろおれはそれを愛する。そこに一生を送りたい。一たびその快樂を味はッたものゝ、いかで忘れられやう。上野隅田の春も何で及ばう畦道にそうて立つてゐる一本櫻にも。朝夕のはき清め四季の植木屋の手入れそれほどいかめしい庭園よりは飛花落葉散るにまかせて箒の目も入れぬ農家のにはの方が遙にまさッてゐる。御世辭でもちきりの下婢奴僕うるさくてたまらぬ。あの質朴な温順な田舍もの親切は却つてあれにある。あゝ青い山清い水目の及ぶ限り皆詩題である。この暑中休暇をこの熱い熱苦しい窓の下にくらすのは實に殘念だ。本をよんでも目はたゆくなる。腦を絞ッて考へても流れる汗などのいゝ趣向もでない。晝寢ばかりが休暇の役目でない。あまりの空想に夕日のかげもくらくなつた。やッとけふのあつさくるしさをおへた。向の屋根の上に月もでた。あゝをしい。都でみるも鄙で眺めるも月は同じ月。然るにあの青い山ぎはを放れる、趣、清い流にすゞしく宿る有樣、おくれて歸る農夫の道しるべする仁、到底都人の想ひ及ぶ所でない。かうおもふとおれの魂はもはやこゝを抜けだしてゐる。「親在す時は遠く及ばず」とは古人の敎、然しどうしても旅行にまさる樂

はない。

＊　＊　＊　＊　＊

片山里の秋のくれ
　枯野の露にぬれてだに
花の都になほまさる
　たのしきおもひはあるものを。

＊　＊　＊　＊　＊

「時にお梅お母さんはまだお戻りはないか」
梅「はい只今御歸りで……お孃さまと御一所に」

第二回

「お母さんおかへりなさいまし」母「秀雄や今日は御留守番で御苦勞だつたネ……お父さんの御墓參りや何かで遂遲くなツて……これはあの御賴みの『歌のしをり』秀「どうもありがたう御座ります」妹節「兄さん只今……今日はさぞ御退屈で御　いましたらうネ」秀「いやなに……今日は隨分あつかつたらう……こゝに御隣りから貰ツた桃があるから、お梅にでもむいておもらい……そしてお母さん私は明後日から暑中休暇なのですがそのひまに田舍めぐりを致したい考ですがいかゞでせう」母「それは何も異存はないが御連は」秀「今度はたゞ一人で而も滊車なんぞはかゝりない積りです」母「それでは御出かけなさい」

＊　＊　＊　＊

そもこの秀雄といふは今年二十一歳不幸にして父は一昨年の秋きえゆく狹霧と共にこの世を去てしまつた＝それも誠の父でない。今の母なる人も誠の母でない。即養父母である。誠の父はかれがまだ母の懷に抱かれてあつた時明治戊辰のとし東叡山のたゝかひに一種の櫻となつて散り母も亦それ玉に當て果敢ない最期を遂げてしまつた。それを今の養父母に助けられ育てられたのである。故にかれは誠の親の事は殆忘れてをる。否むしろ全くそれを知らないというてもよい。さればかれが誠の父母である。妹節とも義兄弟であるけれどもその睦ましさは他の見る目も羨ましいほど中がいゝ＝然し遺産も可なりあり近邊に家作地面も有てゐる。今では殘る母と妹と三人外に下女老僕とを雇つてをる。かれは來年の秋は某文學校卒業といふ身、なりふりは少しも搆はない……名を學資に托けて無にせびつてもあらぬ道に迷ひこむものゝ多い世に實に珍らしい。その代り世事には迂い方である。否むしろ世事にかゝはるのが大のきらひである。而してかれが最愛の友は書籍筆紙と又かの青い山清い水とである。その前者はかれが家庭の友となり後者はかれを誘うて旅行道樂となさしめた。

第三回

兩側を松の並樹に狹まれた一筋道、左にはその松の根を洗ッて清い水が流れてゐる。その先

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は見渡す限り一面のわせ田おくて田、今しも夕日は向の山ぎは近くなつて麓の方に白くたち上る烟は農家であらう。夕ぐれ告げる野寺の鐘の音をふき送る涼しい風は、水ならぬ稲穂に青い波をうたせてをる。右の方を見ると松の一本をたよりに葭簾をはりだした茶店がある」



時にこのおもしろいけしきに及ぶかぎり眼をくばりながら、ゆる／＼きかゝる一人の青年肩にはヵバンをかけ、白いちゞみの單衣、わらじ脚絆をつけ、蝙蝠傘を杖について……これは即秀雄である。かれは暑苦しい窓下の前日の空想を今實行しつゝあるのである。やがてその茶店に腰をかけた。茶店には一人の婆さんと十五六の娘……田舎娘としては品のわるくない……とがゐる娘は一盃の澁茶と一盆の菓子とをもつてきた。秀雄はそれとも氣づかずなほ四方を頻に眺めてゐたが不圖ヵバンの中より鉛筆とはがきとを取りいだして何か書き始めた。母と妹との元に送るのである。

今夜は○○驛に宿る都合にこれあり。只今道側の茶亭に口をうるほしながら松原ごしに眺むる田面のけしき風の涼しさえもいはれず。拙き筆のなか／＼十分一も及ぶ處には候はねども例の口癖止み難く候まゝ

穗波うつ田のもの末にかねの音を
　　けふはすゝしくきゝくらすなり

又明日は御約束の名物〇〇必ず御送り申上ぐべく候匆々

秀雄より

と認めをはつて「御婆さん手紙を出すには何處が近いか？」婆「これから直です。娘に出させませう」秀「なにそれには及ばない、急用ではないのだから」婆「それでも、どうせ序があるのですから」秀「それでは御手數だが願はうか」婆「お易い事……それでは御前序にこれを」娘はそれをうけとつて隣村迄用たしに出かけた。途中何心なくはがきの裏を見た。何が目にとまつたのか、頻と見つめた。松の根株に爪づくのも知らずに見つめた。

第四回

秀雄は婆さんを相手に田舍話を初めた。婆さんは山の色を見て明日の天氣を豫報するなどいろ〳〵珍らしい話に秀雄も餘念なかつた。處に娘は戻つてきた。秀雄は「御苦勞」と禮を述べた。娘は又何やらいはうとしてためらつてゐる樣子。やう〳〵口を開いて「あのあなたは歌を御詠ですテ」

秀雄は思がけない問の言葉に「どうしてさういふ事を尋ねます？」娘「實はあのお、お手紙の中のを一寸拜見致しまして」秀「ハ、、ー好きは好きであるが極下手なのさ……して御前さん

も咏むのかヱ」老婆はさも自慢げな顔つきして「へイこれは田舎ものにも似あはぬ奴でいつ何處で覺えたのかをり〳〵咏では、ついわきの盲の和尙さんに直して戴きますが私共には一向わかりませんので御たちよりの御客さま方が御覽になつてほめられました事もあります」兇「さうかヱ私にも見せてくれまいか……なるほどうまい甘心だ………そしてその盲の和尙さんといふのは歌が御上手だとみえるヱ……會はせてはくれまいか」婆「宜しう御座ります……その和尙さんは元は御武家さまでしたとか……それにつきましてもいろ〳〵の御話も御座いますが兎も角も……あのあれが御すまひなので……」と畠の中の古寺を指ざした。娘「御案內申しませう」時に日は大分くらくなつてきた。

第五回

さてその寺を見ると形ばかりの垣根は態と蓬などに埋もれてしまつてその中に一つの堂がある。幾年の雨風にされたか知れぬほどの古い堂。娘は先にたつてかの庭にわけ入り「和尙さま」とよんだ。「あのお時さんかヱ、よう御出でだ」と應へて朽ちかゝつてゐる緣先に膝行出た一人の僧、星の光にすかした見ればなるほど盲らしい。

時「まだ御あかりが點きませんヱ」僧「なに私にあかりなんどが要るものか經も歌も暗闇で澤山だ」時「それでもけふは東京から御客さまが」僧「何御客さまが？」

お時は奥に入つて古行燈にあかりをつけて秀雄を和尙にかく〳〵の由紹介した」僧「このむ

さくろしい處にわざ〳〵お尋ねなさるとは何方で又何御用で」秀「東京から旅行に出かけてきた大川秀雄と申すもの……貴僧が咏歌に巧であらせられるとの事をあの茶亭で承はりまして私も好な道だものですから無遠慮にも……」お時は茶亭にかへつた。

＊　＊　＊　＊　＊

風はふき來り吹き去つて燈火明滅水の音蟲のね夏はどこに逃げて去たかと思はれるほどのすゞしさ螢などが時々窓のあたりに音づれる。二人が話はこの間にやう〳〵深くなつた。而してその話はいかにかれら自身を導くであらうか。

第六回

二人の話はいよ〳〵進んだ。秀「それでは御老躰只一人でこゝに御起居なされますのか淋しい事は御座りませぬか不自由な事はありませぬか……喧しい都からやつてきた身にとつてはかういふ實に閑靜な御すまひなか〳〵羨しい事ですが……」僧「ナニどうせ世を捨てた身淋しいとも不自由だともおもひませんが又目がみえねば黄なる菜の花青い稲穗も何にもならない。梅のかをりはわかつても櫻の色はみえぬ。たゞ昔はみえた眼の想像で昔おぼえた詩歌をひねくつてをります。又村の子供が學校の歸りなどに遊びにきてわからない字などきくともあれば字畫などきゝとつて敎へてやります。すると又桃がなつたから柹が熟したからなどゝいろ〳〵もつてきてくれます。これらが樂といへば樂……然し昔の事

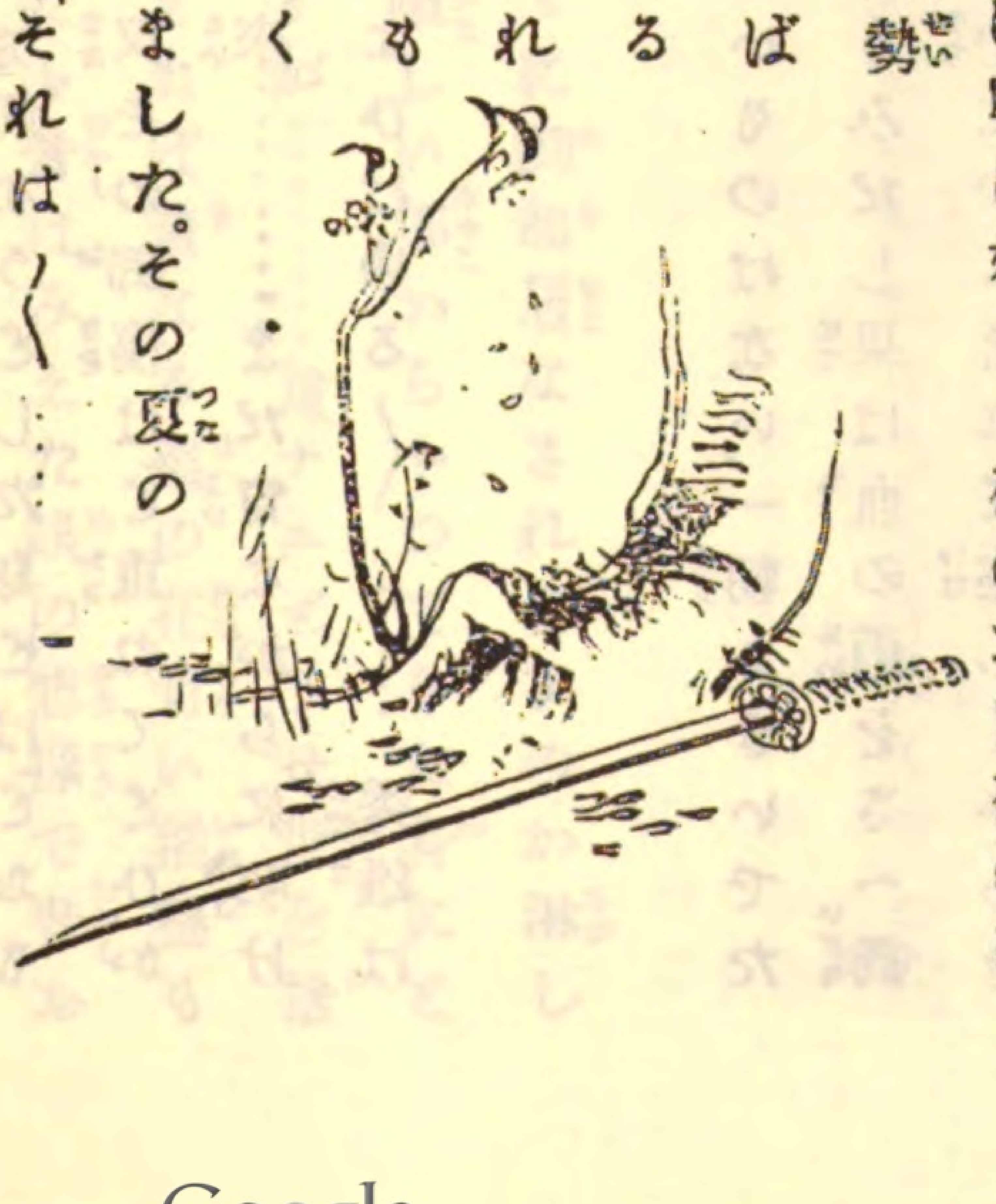
をおもひいだすと何となく……」秀「承はりますれば元は御武家だとかの事で」僧「さやう武士といへば元より戰のにはの露となつてきゆべき身、既に死なうとしたものを今まで生き殘つてゐるとは實に恥づかしい。然し助けられた人の恩もある。それを無にするのもとおもつてせめての事に同僚のなき跡を吊つてゐるこのありさま」秀「死なうとした身とは」とおもはず僧のかほを見上げると頬のあたりに一筋の太刀傷「かつ又その御傷は」と重ねてとひかへした。僧「さればなりこのきずこそ、この兩眼こそわが身の由來……まだ宵ながらに明けゆく夏の短夜中々話しも盡されぬ。かういふ所で宜しくばこよひはゆる〳〵……」秀雄は一層膝をすゝめた。僧は次の話をかたりいだした。

第七回

指をり數へれば二十とせあまりの昔、げに浮世ほどはかり難いものはない。一朝ふきいでた木がらし＝維新風＝はさしもしげりあうてゐた葵の葉をちりみだし果は血の雨をさへ誘ひだして徳川の流は波たち漲つた。東叡山の櫻も硝煙彈雨の中につゝまれて空しくひらき徒にちつてしまつて眺める人もをしむ人もない。事もなく大平な時でこそ歌をもよみ詩を吟じもすれ。今はそんな時でない。まして年は四十の坂をこしてはをれど苟も武士の片われ、空しく筆とつてゐられる身でない。然るに徳川の流の末におひたつてゐる身の悲しい事は順逆の道は辨へてゐながらも天日に向てかざす刄のこはさおそろしさ淚をのみこんでゐ

た心のくるしさ……さりとて〳〵時世の轉變は人間のまゝになるものでないとおもひきはめて遂に彰義隊の一人に加はつた。

この時秀雄の眼は確にうるんだ。聲も志めつて「妻子はどうなされました」と問うた。僅かゝる時世に妻子なんど、携つてはゐられませぬ。かくと告げたなら畢竟事面倒……ふる雨に紛れて家を拔いで、上野の山にと馳付ました。夜もまだあけぬに戰は始まり砲のおと砲のけぶり、雨はいよいよふりまさつてきて實に落花浪藉。悲哉徳川勢はもはやおちかゝつた日である。一歩々々とまけ色をみせるばかり。然し味方は今一度の旗あげをたのみにしてこゝを落ちることになつた。その途中あびせかけられたは即この頰のきずそれもこの村人のお蔭でやう〳〵直りましたのが明治二年の春もはや戰のをはつた跡で世は大平にはなつたものゝ妻子のゆくへは元より志れず。味方の者は大抵戰場の露となつて志まひました。その夏のあつさに元の創口から毒が目にまはつて兩眼はこの通り」爰に「それは〳〵……



…さて私の實の父も貴僧と御同様母と私とを家に殘して脫走致し彰義隊に加はつて志まひ母は私を懷にして逃げる途端、それ玉をうけて苦しんでゐる所を通りかゝりの人に私ひとり助かつて幸か不幸か生き殘つてゐるのでその助けてくれた人は即今の父母……そ

の父も今ではあの世の人……です。母はやがてくるしい息のもとに一言二言を洩しては
かなくなつてしまつたとの事」

きいて僧も何か感じた樣子で「それでは貴公は勿論父母のお顔はお見覺えはないのでせう
ね」「それは勿論の事、その名さへも父の方だけはかすかに……櫻井忠亮とか……」

この詞に僧は非常に驚いた。驚くも理、櫻井忠亮とは僧が元の名であつた。武士であつた時の名である。この詞をきいては見えぬ眼を無理にも開かうと迄もしたらう。「さては今まで客とおもつてゐたは實わが子ではないか。あゝあの時母の乳房にすがつて眠つてゐたのもこの子であつたかあの脫走する時雨のおとに交つて赤子のなき聲のやうな聲もきこえたやうなおもひもしたらう。

然し世には同姓異人も少なくないもの。且はわれ僧の身、まして既に死なうとしたこの身、この世に俗緣の殘つてゐる筈はない。

第八回

僧はわれとわが心の波をやつと靜めて「さうですか亂れた世にはとかくありがちな事とは申しながらお互に昔の忍ばれる事です」と答へた。然しその心の波、どうして眞底靜まる事が出來やう。忍耐の船もをり〳〵覆へされさうになつたに相違ない。時に燈火も薄暗くなり夜もあけ始めた烏のなき聲も何となくあはれに「可愛々々」

秀「志らず〳〵夜もあけましてさぞ御迷惑、御名殘りをしくは御座りませすれど……」僧「私こそつまらぬ長談義こんないぶせいいほりの主人ながら御心も御座りましたら又必ず御出でを……」と後よりいざりながら送りいづる心の中、どうであらう。秀雄はたゞおのが父はこの世には居ないものとのみおもつてゐるのである。おかまひ下さるな」との一禮を殘して立ちいでた。田畠におきわたす朝霧に送られ、歸つた。

あとに一人殘された僧否秀雄の實の父。忍耐の船は辛うじて一時の風波をさけえた。が然しかへつてゆく秀雄の足おとはともすれば心の波を誘ひだしさうである。一層の事耳も不自由であつたならばいゝにともおもつたらう。見えぬ眼におもはずおとす櫂の雫げに海士が汲む潮よりもからい世の中風波の穩ならぬも道理である。

＊　＊　＊　＊　＊

その後秀雄は家にかへつてありのまゝ話した。母も妹も珍らしがつてきいた。秀雄は來年の暑中休暇をまちつけて再その地に旅行した。然し今度はたゞ青い山清い水をのみ愛してゝはない一つにはかの僧の話が何となくあはれになつかしくおもはれておのれと同情を表したからである。＝たゞしその僧がわが實の父だといふ事はなほ少しも氣づかない＝依てかれは直にその庵を音づれた。あたりの眺は去年と少のかはりもないのに庵のあるじは居ない。何處にいつたのであらう、去年の約束にも背いて。田川の流の魚すくひに餘念もない子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どもにきいてみれば「あの和尚さんは于あんばいが悪かつたから此間あたいがお菓子をもつてつてあげやうとおもつていつたら、もう居ないんだもの」と答へた。

さてはあの世の人ともなつたのかしらんともおもつたが去年の茶亭を尋ねてみやうとおもつていつた處が例の婆さんもお時も居る。



婆さんは云つた「和尚さんはこの春から御病氣でしたからわたしも大に心配してゐましたがこの月の始に『わたしも永々御世話になり今度はとてもとおもひきつた病氣も御蔭で少し快くなつて實にありがたい處でわたしの昔わかれた實のむすこが今東京にをるとの事、目はみえないけれども命のある中に一度あつておき

たい。御名どりをしいが杖をたよりてどうしても尋ねてゆきたい。いづれあつた上では又ここに歸つてもこよう』といはれてこの庵をでゝゆかれた。わたし共も村のはづれ迄見おくりましたがその後いかゞなされましたか……あの御不自由な御身……實に心がゝりで……』といひながら袖を目にあてた。

* * * * *

庵の壁にかいてある歌。

みえぬ眼にかこつけて
まことわが子と知りながら
語りいでずてやみにける
心の中の涙をば
そめいだしたる歌の文字
みる人やたれ知る人やたれ

これを見た秀雄の心どうであつたらう。かれの旅行道樂は又この涙となつた。あはれ〳〵又秀雄が最上のたのしみと思つてゐた青い山清い水の中にこのかなしみがこもつてゐたのであるあゝたのしみ常にたのしみならず、かなしみ又常にかなしみならず。

乙撰

金鶏勲章　一茶庵主人

(上) 家貧ふして孝子あらはるゝ、壁の骨
年寒ふして何と松柏の榮を汁粉屋の若夫婦



京建仁寺第二世龍山禪師宋に入りて元の順宗至正元年本朝に歸られけるが此時林和靖の末裔林淨因と呼べるもの師に從ひて本朝に來り奈良に住し姓を鹽瀨と改め饅頭をつくりはじめてより下戸の藏を立つるものなくなりぬ虎屋は干菓子を以て其名高く丸屋が求肥八百八町に類なかりし大佛餅幾世餅さては伊勢屋の花饅頭遺佚がほめし米饅頭は鶴屋の娘が賣出しなりけり其後次第に工夫をこらし汁粉といふもの世に出來しを下戸宗開山の去る和尚先づ舌鼓うつて善哉と呼び後世必ずこれを以て胃病を起す者あらんといはれしよし確ならず猶考ふべし
それは昔今は人智は次第に進みて銀座の十二月十二色の汁粉を賣りて下戸繁昌の世の中ぞめでたき去れば彼れかこれかと思ひ迷ふより場所を撰び他外〱よりも安くしたらん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にはと人のすゝむるがまゝに芝西の久保櫻川町の邊に小躰なる家をかりうけ汁粉屋をはじめたる梅田清太郎とよべる若者あり妻の於雪と共に馴れぬながらも骨身を惜まず小豆を煮餅を搗きあんを練りなどして朝早くより夜遲くまで稼ぎければ相應に繁昌したりけるも一人の親清兵衛といへるは知る人に猩々清兵衛と字名せらるゝ程の宗旨違ひの呑拔け若夫婦が汗水になりて得たる金錢をば傍より酒屋に運びて遠慮會釋もなき酒中の仙去りとて何斗長鯨をきめたればとて詩はもとより歌一首作るの能あるにあらず性來學ばねども孝には厚き清太郎遂に一度惡い顔したる事もなくて過ぎけるが次第〳〵に酒量はつのり店は資本も不如意となれば米屋薪屋の支拂も滯りゆくにつれて客足漸くうとく時には折角の客をも斷るやうになりたりければ思切つて夫婦相談の上或夜清太郎は恐る〳〵父清兵衛が前に坐りて「今晩は少し折入つてのお願が御座ります御存知の通り店は追々客足もへり彼方此方と殖へるは借錢ばかりどうぞお好な酒をやめてとは申しません二升の所は一升一升の所は五合ときめて下さいましさうすれば又一骨折つて追々には大人にも樂をさせましたい夫婦の考で御座いますと涙を流して諫むるもよく〳〵の事なればなるべしと察しやるやうな清兵衛にあらず酒臭き息を吹きてジロリと清太郎夫婦を見つめたりしが忽ち額に青筋たてゝ肩を聳かし「成程此阿爺が邪魔になる……さうだらふ此阿爺が生きて居る内は飲む、飲むと店が繁昌しない客足がへる……がまてよ……清太郎全

躰貴様の働かねへのだ能くものをつもつて見ろ今俺ァ毎日一升だ一升がまづザッと三十錢肴が三錢と見て三十三錢貴様にやァ此卅三錢の働かねへのだそら見ろ働次第でよタッタ一人の阿爺に日に一兩や二兩の小遣くれへ當がつてもいゝのだ手前の働のねへのを棚へあげて置やァがつて阿爺が酒を呑むから客足がへるてへなァなんだい鈍棒め………そゝそれでいやなら俺を殺すとも捨てゝ出てゆくともしろい馬にも踏ませず車にも挽かせず其圖躰まで誰がそだてたと思やァがるんでへ學校へも通ふて目鼻もあけ受取の一ッも書けるやうにしたのは誰の丹精だ貴様ァ大方餘計なお世話だと思つてやがるんだらふが親の身になつて見ろい大抵の苦勞をしたんじやァねへそれも先へいつて寐酒の一杯も餘計に呑みてへからのこつた娘で見ろ納豆屋のね糸さんのやうだ何時かお髯にべたついてよ兩親とも左團扇じやァねへか男のくせに生地のねへ野郎だ第一俺が事だとつべこべ言やァがつて嬶にやァやれ半襟の前掛の髮を結へ白粉をつけろと世話やくのが癪に障らァナニそんな事はねへとじやァ此俺が虚言ッつきか嬶の事だと直に肩を持ちやァがる助兵衛野郎……フ、、不孝者め内で呑で悪きや外で飲む分のこつたなにしやァがる放せ放しやァがれ」と留むるも聞かぬ無理一徹何處ともなく出でゆきぬ跡に於雪は良人の傍「なぜまァあんなだらふねへと打萎れつゝ良人の心察して見れば女氣の先だつものは涙なり清太郎はホッと吐息し「阿爺のいふ通り和方までにも嫁に來たばかりで心配かける始末なの

もみんな俺の腑甲斐ねへからだ……といふ折入り來る薪屋の丁稚今日は是非勘定しておくんなせへ」夫婦は思はず顔見合せぬ

（中）。燭を背けて共に憐む夫婦の愁歎
花を踏んで同く惜む征途の別路

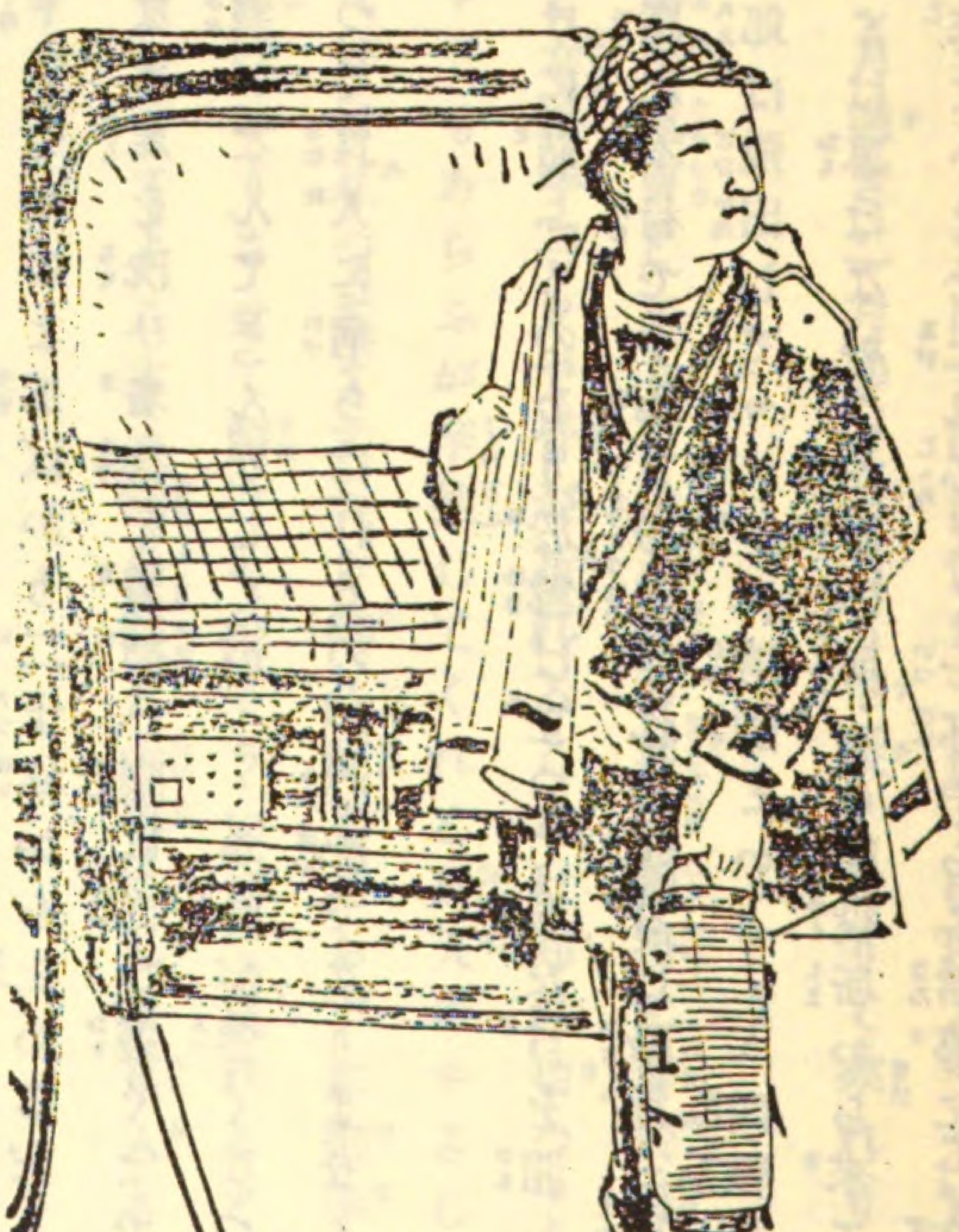
人生五十笑つて一家睦しく暮さるゝならば前世も未來も説くの要なし去れどそれがならぬばかりに佛も耶蘇も難有からるゝ世なり

汁粉屋の店も父親清兵衛が飲んで〳〵つぶしあんのこすに越されぬ年の暮清太郎今は躍起となりて車夫とまでなり下り霜シヤキ〳〵と踏むに音凄じき旦の星を戴き雪面をサラ〳〵と拂つて吐く息も氷る夕の風に晒され精魂をつくして稼ぎけれども猩々清兵衛は相も變らぬ猩々にして嫁お雪が隻時をも惜みて內職にいそがしかるをも頓着なく酒屋へ走らせ肴屋に走らせ燗がぬるくてならぬソレ豆腐屋が通るこんな日には此方からいはずとも湯豆腐ぐらゐは氣がつきさうなものと口やかましく追つかひ老朽ちたりといふにもあらぬ五十男唯一日酒に酔ひ暮して面白からぬ時は家を出でゝ彼方の銘酒屋此方の居酒屋と飲み廻り更に若夫婦の心勞を察する事なしかゝる男をや酒狂といふなるべし

猩々清兵衛は飲みつかれて鼾息の音もすさまじく一間に入りて熟睡せり夜は更け寒さ骨を刺して針もつ手もまゝならぬに良人清太郎は未だかへらず於雪は獨り薄暗き燈に對し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て良人の身の上を案ずれば何となく心易からず途中にて病や起りけん客を遠く送りて行き給ひけん戸障子立て廻して家の内にあるさい堪へ難き夜に如何に孝行なる心よりとはいひ馴もせぬ仕事に荒骨折てつらしとも苦しとも口に出して言はれぬ程女房の身にはこたへて悲しかるものを肉身分けた親の身に鬼なればとて少しは氣の毒といふ心はあらふ筈を…………思來りて千緒萬端火を起し湯を沸らせ着換の着物を暖め膳立の用意もして床までも延べて待つに早や十二時にもならんとする頃空車の露次を



きしる音響きて嬉しや良人は無事にかへり來れりお雪は急ぎ戸をひらきてこれを迎ひ「マア大層遲くなりましたサゾお疲れなさいましたらふ湯が沸て居ます早く足を洗つてお上りなさい毛布やなにかは今始末しますよ「今夜は下谷の方までお客があつたので遲くなつ

た其換りお土産にお前の好な物があるよ「オヤ奈良漬……澤山にまァ……「そりやァ乗せたお客が先の家への土産だつたのを車から下りる時どふしたか一ツの樽を投り出したもんで底がぬけて泥だらけになつたので車夫それでよけりやァ持つてつて洗つて食べてくれといひなすつて一樽まるで下すつたのよ瓜ばかり二十杯から上あるだらふ父親さんもお好だ明日は切つて上げて見なと足を洗ひ着物を着換へ膳に向ひ「遅くまで起て待つてゝ寒かつたらふ「なァに家に居て寒いなんてそんなことが……お汁が熱くなつてますからおかへなさい妾ァ無理な骨を折つて良人に病らはれるのが心配でなりません「なァに馴れて見りやァ夫程でもないのサ

「梅田さん〳〵……と此夜更けに訪ふものあり於雪は立つて未だ戸を開かず外には鏘々たる帯剣の響靴音「梅田さん近藤に木村です昨日徴發されて明日は敵地へ出發しますから一寸伺ひましたと聞きて清太郎は飛出して「マァ上れ清國といよ〳〵開戰といふ事は知つて居たが君等が召集されやうとは思はなかつた僕の所へも區役所から來て門口へ紙札を張つていつたがまだ召集令は來ないまァ上れ心よく一杯やらふ君等には在營中誓つた通り國家の爲め早く抜群の功を遂げて見たいと思つて實は召集令の下るのを待つてるのだ君等もしつかりやれと鼓舞一番勇氣凜然として車夫清太郎にはあらず梅田軍曹當年の意氣快叉濶

清太郎は稼に出でゝも號外の出づる毎に胸躍らせ心も浮立ちて捷利の報に接する時は早や身自ら北清原頭の陣營にあり砲煙彈雨の間に馳騁する如く覺へて客を乘せても走りつゝも知らず〳〵行くべき道をたがへ笑はるゝ事あり家に一日中必ず二三度は引返して召集令來れりやと問ふに來らず〳〵と聞く時は何とてかくは後るゝやとつぶやきつゝ其年はくれ廿八年と改まりて一月過ぎ二月ゆき三月も下浣となりて來れり來れり待ちに待ちたる召集令は來れり

昨日の車夫清太郎は今日梅田軍曹となりて山王臺の共同腰掛に妻於雪と物語「父親さんがアレだから留守中は何かと女の手一ッで骨が折れることは知れ切つてる然し親類といつて賴みになる者はなしいやでもあらふが辛抱してくれと良人のやさしき詞「今日から私は奉公に出て屹度父親さんだけは見つぎますから御心配なさらずに御手柄なすつてお歸りなすつて下さへ「引續て心配ばかりさせて濟ないがさういつて呉れると心丈夫だ何かの事は又手紙で出せるやうならいつてよこすよ隨分躰を大事にしな「良人も隨分……「父親さんにもよろしく申してね「ハイ……

早咲きの櫻ははや梢に匂ひて日本武夫の途出祝ふもいさましゝ

(下)。

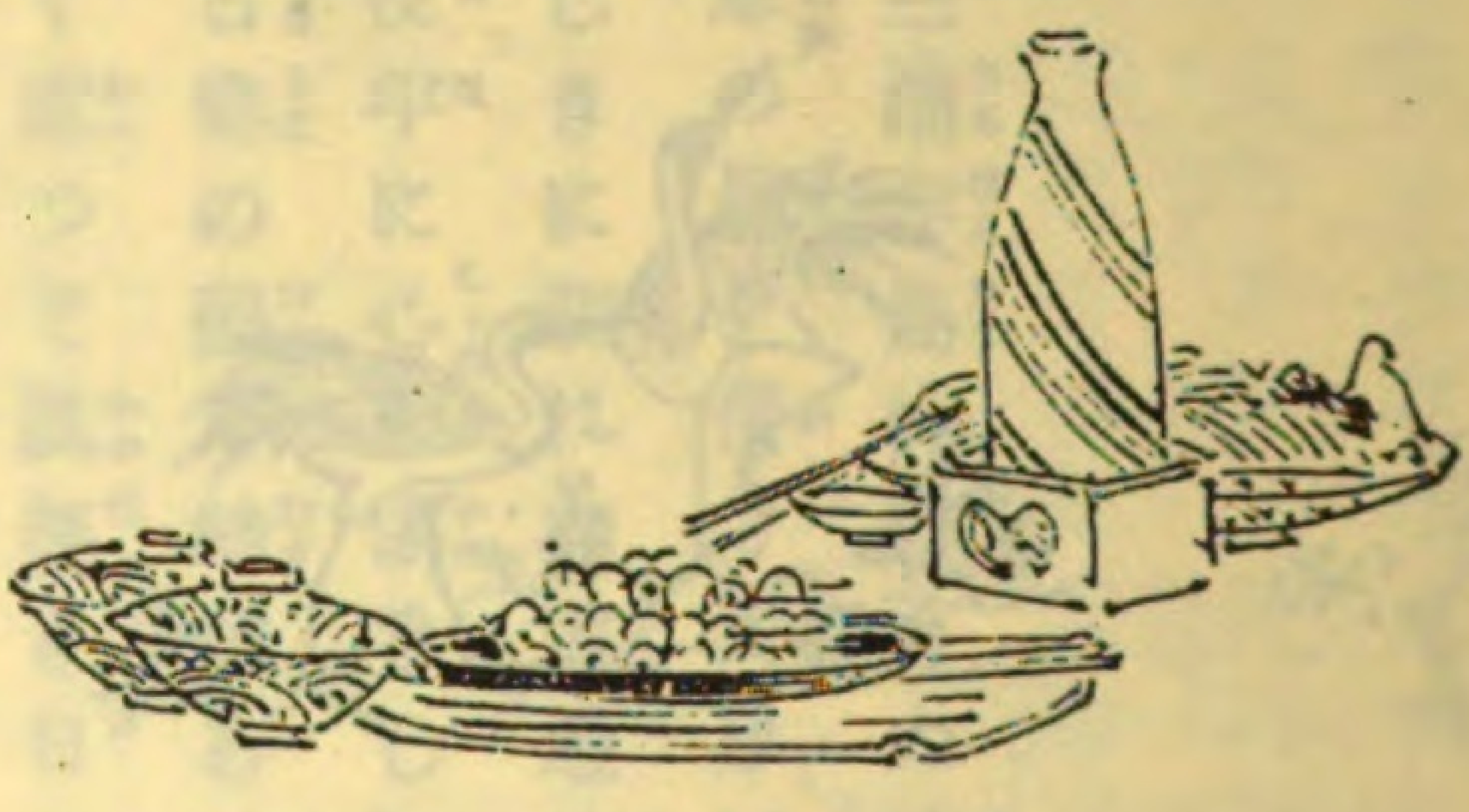
如我昔所願頑固親爺の醉醒めての後悔

今者已滿足俗にいふ忠臣孝子の門にいづれもの賞讚

清太郎は戰地に赴き嫁於雪は奉公に出で、家にあらず清太郎が殘しゆきたる手當於雪が許より三日にあげず送りくるに小遣錢酔ふて日を暮すに事かゝねど水を汲み火を起し酒屋肴屋の用達し何も彼も一切一人でせねばならぬ煩はしさ流石の猩々も少々ならず弱りて酔醒寒き曉の床に眞人間の心動きそめける所へ御免なさい梅田軍曹の御宅は此方ですかと慇懃に案内を乞ふものあり起き出で、戸をあくれば二重廻し黒山高の帽子金縁の眼鏡見るから立派なる紳士腰をかゞめて私は帝國新聞社の社員で御座いますがと前置して清太郎が平生の行爲なにくれとなく問ひ一々手帳にしるして兼て撮りたる寫眞あらば是非一枚惠まれたしと逼る清兵衛不審に思ひて清太郎がどうぞ致しましたかときくに「去ればなり梅田軍曹は征淸勇士の内に於ても殊に目覺しき働金州城の戰旅順の攻擊委細は明後日の新聞にて御覽に入るべきも師團長には梅田軍曹の手をとり天晴日本兵士の鑑と賞揚されたと申すこと親御の身になりては如何嬉しく覺へ給ぞ思はず朝早くより出ました御邪魔を致しましたとソコ〱にかへりゆく後影見送りて清兵衛は呆然たる所へ朝光新聞の社員來り東京新聞の社員來り同じ事を問ひ同じ事を語りてかへるかと思ふ間もなく區長來り市會議員來り孰れも見も知らぬ立派なる人々狹き露次に押合ひて口々に清太郎が手柄話思も掛けぬ面目に清兵衛いよ〱日頃の我過を悔いて清太郎が凱旋の日を待つて盃納とすべしと思ひぬ翌日も翌々日も訪ひ來る人目出度しとて品物を送る人市をなし

て日頃懇意にしたる人々は懇意なりといはるゝをパヽに彼方此方大手をふりて吹聽して歩き清兵衛が身持ちに愛想つかしたる親類縁者も舊情を暖めんとて集ひぬ

於雪は夜に入りていそ〳〵として來りぬ一ッの壜詰にしたる酒を主人よりの祝物なりとて出し清太郎さんが戰場の御手柄ゆゑに御主人も今日よりは此私を奉公させては世間へ對して相濟ぬ何なりと力となるべければ家にかへりて親御に孝行つくされよとのことで御座います朋輩に賞められ御主人に賞められお客にまで賞められて外出すれば彼れが梅田軍曹の女房よとて羨まるゝ嬉しさ尊父にも清太郎さんを賞めて聞せて下さりませと涙こぼして嬉がるに清兵衛もワッと聲立て泣出しける



清國降を乞ふて平和なれり忝くも我至聖至尊なる大元帥陛下には百萬の貔貅征途の勞を分ち給ひて廣島に大本營を進めさせ給へ夙夜戎服を解かせ給はず神慮を惱まさせ給ひけるも目出度國民歡呼の間に還御まします事とはなれり猛將勇卒整々くとして凱旋の日は至りぬ梅田軍曹は殊に無上の名譽を以て歡迎せられぬ程なく一躍して曹長たるの榮を得たり主上は彼が功を賞し給ふに猶飽かずとして功五級金鵄勳章をとつて彼が胸に燦然たる光彩を添へ給へぬ年金下賜の恩命は下れり

梅田軍曹は泣けり猩々清兵衛も泣けり妻於雪も泣けり三者手をとつて泣けり……噫聖恩無窮！

猩々清兵衛は其後人に語れり持つべきものは杯にあらずして男の子なりと　（完）



木がらし

賎の舎女

十月初め予は東都を去りて相模の三浦半島に行きぬ病後轉地療養の爲なれば海近く山も遠からぬ景色よき所に小やかなる草の屋を借り受けて暫時其所に旅寐する事と成りぬ大方も秋とし云へば何となく物悲しきに馴れぬ海邊のわび住居洲崎に騒ぐ千鳥の聲は曉の怨を増し礒間にかゝる楫の音は夜半に心を傷ましむ、ましてや浦風つよき折々は浪たゝ此許より立つ心地して夜もすがら古郷の夢も結びあへで明せし事も多かりき、然れど漸々馴れし後は浪の音も騒々しくは無く返つて風無き日は淋しく覺ゆるやうに成りぬ

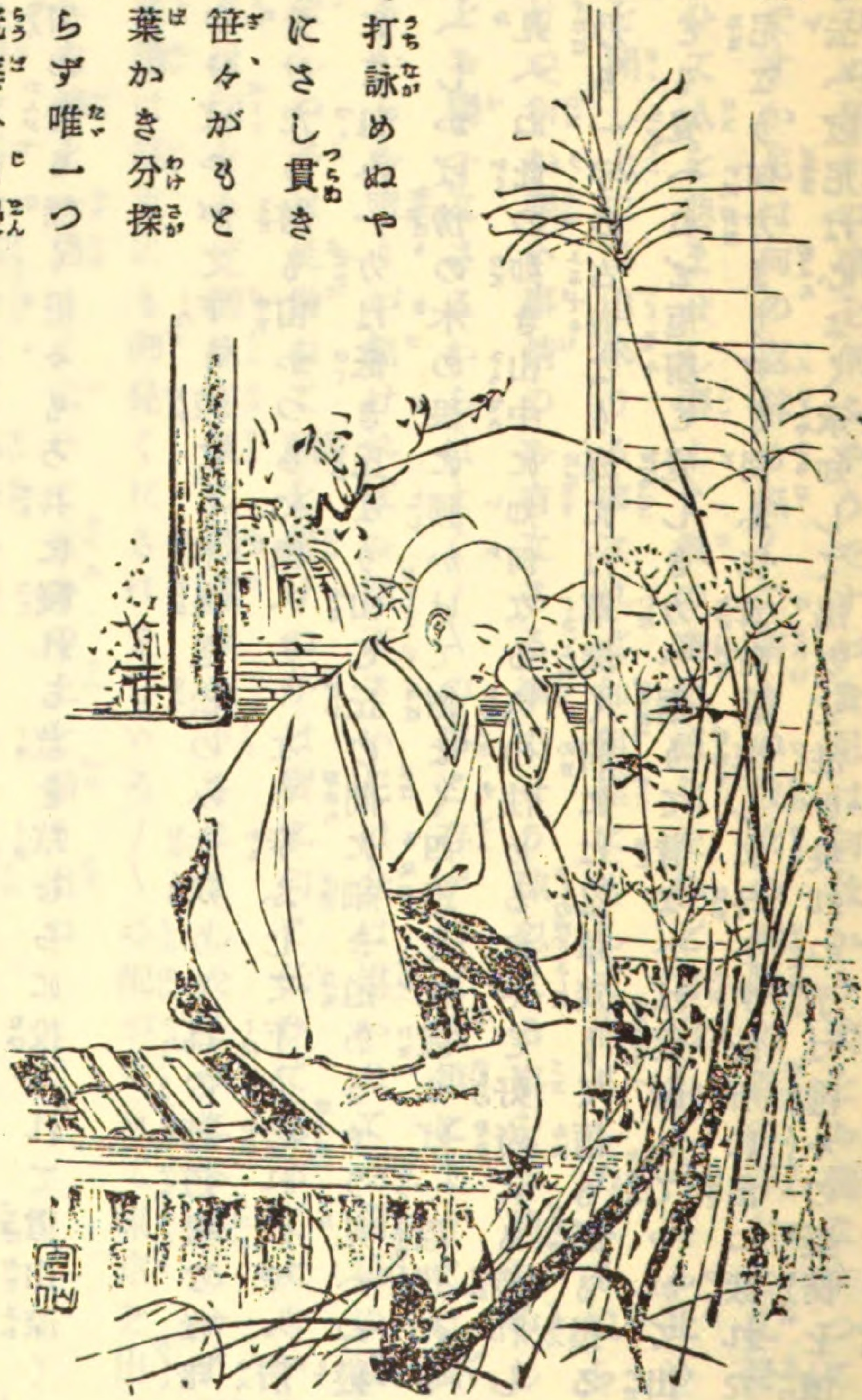
元來定まりし役務ある身ならねば近傍の名所を問ひ古跡をも探らんと思ひ立ちて或時は衣笠の城趾を尋ね晴嵐梢を鳴らし、夕日の影閑なる所に當時苦戰の有様を想見して懷舊の涙を濺ぎ、義明の墳墓に詣ては巖松高く聳へ青苔道を塞ぎ荒れ行くに任したる狀に榮枯盛衰の道理を悲み久里濱の浦を過るとては義澄が父を殘じて落行し當時の心事を思ひて袖

を絞り、又或時は小網代の城趾、荒次郎が入水せし所と聞く油壺の海をも涙のよる〳〵探づね、又三崎、城ヶ島にも杖を引き北條里見合戰の様を追想しなどす三崎よりは伊豆の大島よく見ゆると聞しも折から晴天既に暮なんとし夕霧隔てゝ見る事能はざりき月は海上に浮びて磯打つ浪と共に碎け汐に引れて沖へ行く漁船は半天の雲に遡るが如く都は山川程遠くして見るに由なし、折から越ゆる厂の一連聲々に鳴き渡るを聞くにも所からにや哀一入深し

兎角しつゝ日數を過す内秋もはや程無く成りぬ此四五日氣分よからで旅宿に籠り居りしに折々たづね呉るゝ隣家の老婆問ひ來しが話の序手に初茸の生る山は無きやと問ひしに何所の山にも毎年多く生ずれど今年は甚だ少しと答へぬ

其翌日は忘れもせぬ十一月の十一日なりしが珍しく氣分よく天氣も好りしかば十時頃より旅宿を出で野邊を分け行くに少時見ざりし間に盛なりし萩は露と共に散り蕾なりし菊は諸所に赤く白く又桃色に吹き出で尾花も風に倒れ伏せる淋しき野を飾りぬ、生茂りし草もやう〳〵枯れ方に成りて道幅廣く成りたるやうに覺へ無暗と横ぎり行けば足もとより飛出す鶉に幾度も膽を消し漸く野を過ぎて片方は小松山にて一方は廣き田ある所に出ぬ偶見れば彼方より里の子供等四五人初茸を細き笹々にさして持ち來りぬ呼び止めて何地にて得たるぞと問ふに此所より五町計行きし所にて此山の後なりと答へぬ、いで予も一つ

二つ取らんと思ひ數へられし山をさして行きぬ吹きつゞきたる木枯に梢淋しき雑樹山を越へ此春あたり植しと見ゆる小松山の麓を廻り清くして掬ぶにたへたる細き流れに添ひし少し行きつきあたりの山なりと覚しく小松生ひ茂りたり道のまに〱昇り行きて落葉をふとかきたるに美しき色したる茸一つあり嬉さは少時は取もやらで打詠めぬやがてあたりの細き笹々にさし貫き手初よしと勇みつゝ小笹々がもと荊棘が間とも云はず落葉かき分探せども〱其後は見附らず唯一つにては歸りて後隣家の老婆へ自慢も出來ず如何にもして三つ四つ取らんと思ひ一生懸命になりて探すうち何時か其山も見はてたれば次の山へ〱と移りて尋ぬれど一つも無したま〱茸のかげ見ゆるに嬉しく



はせ寄りて取れば似ては居れど泡茸なり餘に腹立しければ力を込めて松の根に打附れば粉々に成りて飛散りけりあな心地よしと思ひてふと見れば情なや大切にして提げ居し只一つの初茸茅にやすれけん木の枝にや打附けけん笠は落ちて影も無く太き莖のみ殘り居たり口惜さ限り無く予は何の考も無く徒々もろ共に殘れる莖を草むらに投入れて猶山深く分け入りぬ

次の山は高くして昇りつけばやがて下り坂なり木高き松のみ生茂りて蔦の細道晝なほ暗くわづかに樵夫のふみ分けたる跡も山かつらに絶へ〳〵なり辛ふじて下り終ればやゝ廣き谷なり三方は高き山にて包み一方は低き丘なり山と丘の間に細き道あるやう見へぬ獲物無きに一入疲れを覺へしかば傍の木の根に腰かけて猶よく四邊を見渡せば一際茂れる松林の中に家らしき物見へぬ此の如き山中に如何なる人の住めるにやと好奇にも疲れし足を引摺りつゝ至れば乃ち一宇の古寺なり、庭には草深く軒には忍草茂りて雨も風も堪るべくも見へず住む人有とも覺へねど庖厨と覺しき方へ廻りて音なへば返辭してやがて出來しは廿歳計と見ゆる尼なり何方よりぞと問ふに茸狩に來しに斗らず此所に出ぬ疲れたれば暫時休ませ玉へと云へば尼は心よく承知して湯など注ぎ呉れぬ予は種々の疑問を懐きぬ此尼一人にてかゝる古寺に住めるにや何故に若き身にて姿を變へしやらんなど思ひ廻したる末遂に問ひぬ「貴尼お一人で此寺にお住ですか」尼は「イヽエ師の老尼と二人で居り

ます」と答へぬ予は又問ひぬ「唯今お出ですか」「村に參つて居りません」問答は是にて暫時絶へぬ

やゝありて予は又問ひぬ「附かぬ事を伺ふやうですが貴尼は何故かう姿をお變なすつて此樣なる山寺にお住ひですか」尼は何の返辭も無くて俯きぬ彼女の兩眼に涙の浮ぶを見受けぬ予は益無き事を問ひて人を悲ませし事よと氣の毒に感じたれど言出して今さら止めるもきまり惡く又事實を聞し上にて出來うる事なれば如何樣にもして慰もし力にも成らんと決心し又言葉を續けぬ「何か深い事情のお有なさる事でせう疎忽なる事をお問ひ申しました然しお若いに姿をお變へなさるからはよく／＼の事と存ずれば次第によりては幾分かお力にも成りませうからお障りが無ければお話下さい」尼は今は堪かねてや墨染の袖を顔に押當て其所に泣伏しぬ予は見兼ねて顔を背けぬ予は實に何と云ひて慰めてよきやを知らざりき少頃して尼は面をあげ「御親切樣に御尋づね下されましたそれにお答もせず益無き涙にくれました失禮は幾重にも御免くだされまし色／＼心配が重ッて東京を出で此寺にて姿をかへました譯を一通り」と云ひて其身の上を語り出ぬ

「妾は都の片ほとりなる四ッ谷の某所にて生長しぬ、うまれしは國にてなりとの事なれど二歳に滿たぬ内東京に來しなりと亡母の常に語り玉ひき父は某省の相應なる役を務め給ひしが妾が十四に成りし春うせ給ひき其後は母と妾と二人なれば少許の遺産あるを賴みて

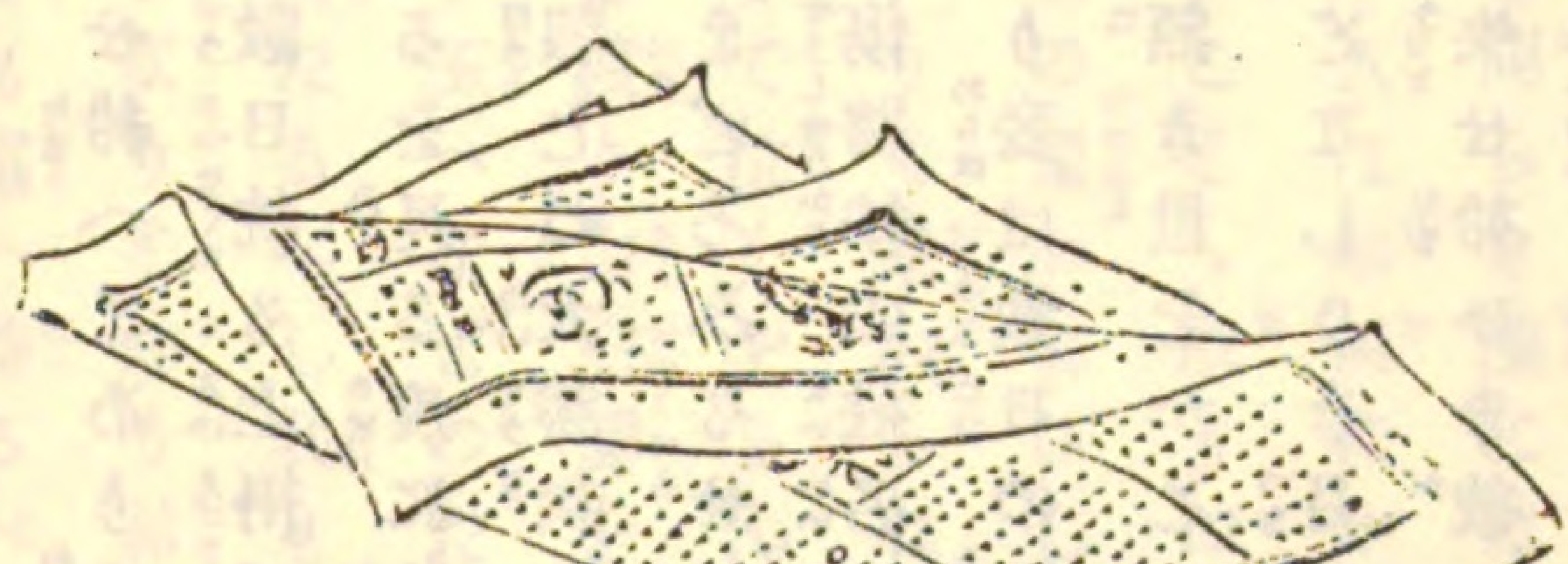
貧しといふ程ならず並々の生計を立て二とせ三年を過しぬ妾が十七歳の春なりき或人の媒にて陸軍中尉某に許嫁しぬ然れど其年は亡父の三回忌なる故其後に式を擧ぐる事となし折々問ひつ問はれつゝ其日を待ちしに思ひがけ無くも日清戰端を開らき陸には成歡牙山の戰、海には豐島沖の戰あり將校士卒の渡韓すると聞く度毎に彼の人は如何にやと胸まづとゞろきて安き心もなく思ひみだれし甲斐も無く七月の末出軍することゝ成りぬ其前日音づれ給ひて我も明日出發と定まりぬ、何時しかと待ち渡りしに日頃の望かなひしこそ嬉けれ豚尾と戰ふは如何に面白からん御國の爲に捨つる生命は露ばかりも惜からねとの給ひしが妾は傍にありて悲しさやるかた無く泣伏せるを見何かなしとて泣くやらん武夫の戰場に出るは其役務なるを、やがて敵軍を粉の如くに打敗り鴨綠江を渡り山海關をも打敗り北京の城も乘取りて國光を世界に輝かし目出度凱旋する日を待ち玉へなどのたまひしが歸りたまわんとして妾に仰するやう戰場に出でし後は音信は無用たるべし我もたよりせじ生死の程は新聞にても分るべし死傷者の内に我姓名無くば無事なりと知り給へ妾は其時おしかへし彼の人に向ひ事問ひまゐらする事の惡くば戀しくとも堪へ侍るべし然れど無事に着しと云ふ事だけにて宜ければせめて其丈は知らせて妾が思ひをゆるめ給へ只明暮そなたの空を詠めつゝ恙なく歸り給ふ日を待ちはべるべし病に罹り給はぬやう呉々厭はせ給へ」と云ふも涙に聲くもりてはか〳〵しくは云ひかねし心の内を思ひ汲みてや彼の

の人は然らば彼の地へ着し事はすぐに知らすべし御身も身躰を大切にして我歸る日を待ち給へと云すてゝ去り給ひぬ妾は只明暮涙にひぢて過しぬ、幾日か過し後彼地より手紙來りぬ封押切りて讀下せば無事にて何日に當地へ着しと計り有りて少し奥に戰場の事なれば何時野邊の、露と消ゆるやも計られず御身は未だ年若く其上いまだ式も擧ねば猶更の事我身に萬一の事あらば知らぬ昔と思ひ捨て如何なる人にも身を寄せ給へとあり妾が其を見し時の心麻の如く亂れ胸も張さくるが如くに覺へ打臥せるまゝ數日枕も上得ざりきかくて八月も過ぎ九月初よりは新聞などに何日頃には戰わらんとあるを見る度に胸まづとゞろきぬ十日程立ちし時新聞紙は平壤の戰報を載せ我軍大勝利を報じぬ、大勝利〳〵、大勝利には必ず多くの死傷あるなり妾は彼の人の生死如何を思わびてまどろみもせで明しぬ死傷者の數は出たり妾は其多きに驚き益々氣づかいたり後幾日死傷將校の姓名は載られたり夢か〳〵彼の人の姓名は確にありき、しかも死者の中に有るなり妾は數日の間人事を辨ぜざりき樣々に慰め呉るゝ母上も遂には一ツ涙におちてあぢき無き世をかこちぬ、世に亡き人を如何に云ふとも甲斐なしと思ひあきらめてあと弔ふを務となしうき月日を送るうち母上のふと風の心地とてふし給ひしがもとにて其年のうちに失せ給ひき彼の人の失せ給ひし折同じ道にと思ひしも母上のおはすに心引かれて惜からぬ命をながらへしなり今は淵川へたゞ身を捨めと思ふ内同じく東京に居らるゝ伯父上の妾を引取らんとの給ひ

ぬ然れど伯父上は養子にて養母のいまだ居らるゝ事なれば如何につらからんと思ひやるにも戀しと思ふは亡き人々なり、思ひあまりてある夜一通の書置を殘して家を出で死なんとせしも人の爲に止められて心をはたさゞりしかば今は姿を變んと思ひなりて何地へ行かんと思ひしが父上存生の折此三浦に海水浴のため來し事あり其時見し事ある此寺を思ひ出し住なれし都を後になし此所にたどり來て住寺の尼にこひて姿をかへ亡き人々のあとを弔らいつゝ我罪障消滅の折を待ち侍るなり」と云ひつゝ尼は涙をぬぐひぬ

最前より聞居し予は袖も絞る計りもらい泣せしが其時漸く口を開らきさま〴〵に説き慰め及ばずながら折々は訪ひ參らせんと云ひしに尼は答へて世を捨てつ世に捨てられて此山寺に入りしよりはうき世の事は露も思はず然れば御心はうれしけれど訪はるゝにつきてもよし無き事を思ひ出でゝ往生の障げなるべし唯をり〳〵は妾が如きあはれの者も世にある事をおもひ出で玉へ

＊　＊　＊　＊　＊　＊



夕日漸く暗く成りてねぐら求むる鴉の峯にさわがしきにおどろき尼にはねんごろにいと

まを告げ村に出る近道を教へられて月山の背にかゝる驛宿に歸りぬ
二日の後予は用事ありて歸京する事となりぬ爾來いそがしき身の何事も忘れ勝ちなれど
予が心頭を常に往來して折々涙を催ほさしむるは問ふ人も無き山寺に行ひすます尻の身の上なりけり





下村房子　蘇峰生

下村房子とは、余が友人下村孝太郎氏の母君、浮田和民氏の姑君、而して余が母上の親しき友達にぞありける。

彼女の父は、熊本藩にて、名高き櫪原五郎助先生にして、房子は其の三女なりき。

櫪原氏は、肥後菊池郡の農なり、先生に到りて、志を起し醫を學び、儒に入り、遂に藩侯に拔擢せられて、藩學時習館の教授となり、木下韡村先生と與に、藩中の教育を分任し、名聲一時に振ひたりき。然も木下先生も亦た菊池郡の農家より、身を起したるぞ、不思議なれ。

先生沒して、嗣子猶幼、一門落寞たり。彼女は十六歳にして、父の門人下村九十郎氏に歸きぬ。

彼女の一生は、樂の日、甚だ少く、苦の日、甚だ多かりき。彼女は一生に於て、人生窮困の幾多を甞め盡しぬ。然も天性謹厚、温柔にして、和易、恭敬の心を持し、良妻として、賢母として、親友として清淡、温良なる婦人として、黑點なき生涯を送りぬ。

家を治むる耐忍、勤儉、舅姑、良人に事へて婦道を盡しぬ。明治九年、良人没するや、其の一男七女の教育は殆んど一身にて之に任じたりき。

天は彼女に清福を賜へり。一子孝太郎氏幼にして精敏、學校にあるや、恒に其の年長者を超へて進みぬ。加ふるに最も孝順。故に母子の際、其樂融々として殆んど傍人をして欽羨に禁へざらしむるものありき。

孝太郎氏の米國に留學するや、母子の至情は、太平洋の水を越へて、恒に書信の往復をなし未だ曾て間斷を見ざりき。

三年經てかへり來む日のうれしさを
おもへば今日はをしからなくに

是れ彼女歳晩の詠なりき。

今日とくれ明日とあかしの浦波の
立かへりこん時をこそまて



是れ其の歸を待たる詠なりき。

あまりにも我がなきことのしけゝれば
神のみまへも恥かしきかな。

是れは孝太郎氏の身上を神に祈りたる詠なりき。其の罔々の情、殆んど人をして涙下らしむ。

たらちねの母につかへん願ひより
　外に願ひはなき身なりけり

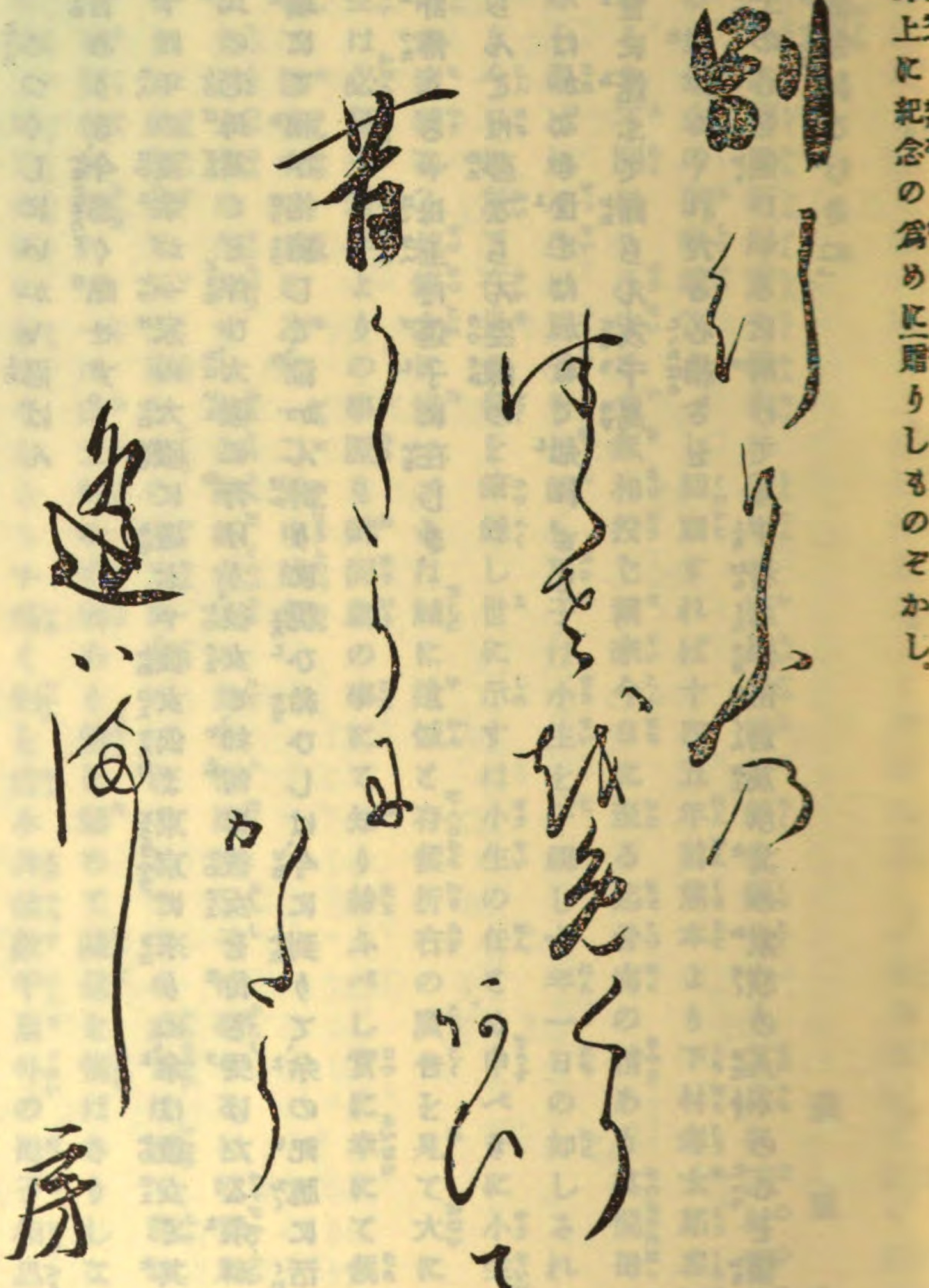
是れ孝太郎氏の米國より彼女に贈るの詠、氏や少小にして其抱負尋常ならず。而して其の阿母に眷々たるもの此の如し。斯母にして斯子ありと云はん乎、斯子にして斯母ありと云はん乎。

斯くて其の女は良婿を得、孝太郎氏は業成りて歸り、漸く安樂の境遇に、身を處せんとしたるに、遂に端なく明治二十八年八月二十日、病に罹りて沒しぬ。彼女始め佛門に歸依し、後基督教を信ず。其の臨終に際して、從容自若、毫も平生に異らず。其の素養の厚きや知る可きのみ。

彼女は天保九年十二月二十日に生る、余が母上に比して九歲の妹たり。余が一家の熊本大江村にあるや、彼女の家と相距る僅に三四丁に過ぎず。時に彼女は熊本新屋敷櫔原先生家塾の跡に寓せり。孟宗竹數竿庭前に扶疎たり。衡門茅屋晝靜かにして、唯だ庭外を繞る白川支流の水碓の響を聽くのみ。故に母上と日夕往來し、與に杖となり柱となりき。其の與に和歌を詠じて、文字の交をなしたるが如きは、抑も末なりき。されば余が一家の東京に移らんとするや、彼女は特に離別の情に禁へざるものありき。本誌に揭ぐる彼女の寫眞と、眞筆の詠とは、彼女が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

手から母上に紀念の爲めに贈りしものぞかし。



杖とのみ頼みし君に別ては

ふみ迷ふらむ老の山路を
今日よりは誰を友とも志らぬひの
心つくしにいかゞ忍ばん

其他幾首ありき、今悉く記せず。

明治二十四年の夏、余が一家の大磯に遊ぶや、彼女偶ま東京に來りぬ。余は彼女と其の姉君たる石光氏の老母君とを伴ひ、大磯に行けり。彼女と、如何に彼女を待ち受けたる余が母上と、大磯停車場にて相ひ抱擁して、泣かん計りに悦ひ給ひしは、今に到りて、余の記臆に活躍し居るぞかし。

彼女の訃傳ふるや、母上は逗子に在しき。

夢ならんとは夢ならん空蟬の
はかなき世とはかねて知れども

後の世に逢ふて語らん友千鳥
誰がおくれたる心細さを

余は母上の心を懷ひやるに附けても、下村君、浮田君及び其の家族の人々の心を懷ひやりて、人生の無常になげきぬ。

* * * * * * * * * *

前文印刷に付したる後大坂なる池袋清風君より別紙到着しぬ則ち掲げて以て房子の君在天の靈を慰む。

蘇 望 生

却說昨今の國民新聞廣告欄内に新年の家庭雜誌附錄の廣告あり其内に下。村。房。子。(の傳歟)の題あり先生の御執筆なるべし回顧すれば十四五年前熊本より下村孝太郎君同志社に再來あるや不測にも小生と意氣相投じ爾來今日に至る迄骨肉の情あり其間母上も小生に和歌を學ばれ小生は房子を母視し房子は小生を子視し十年一日の如しされば房子の世になき今日に於て在世の德を筆錄し世に示すは小生の任とも申べきに小生病害の爲に學問の素養なく拙筆之に堪へざるは誠に遺憾と存候折右の廣告を見て大に喜躍仕候先生は必房子若年よりの事歷も御同鄉の事にて知り給ふべし實に幸にて候今房子の事に就て御參考の爲に左に一二言申述候

房子は九州大藩に生長せし故勿論都會人の如き浮薄の分子は毫もなし唯實着也漢學者の子なりし故律義と云ふ事を心の奧底に藏めてありしやう也感情は至て深かりしが如し而も喜憂色に顯れず一は武士的の素養あり情を矯めて禮儀を傷はさりしならんと存候先年孝太郎君米國に遊學せらるゝや痛く別を惜み其後數千里外の母子相思ふの情甚切にして再會を期する一日三秋の如し實に感ずべし孝太郎君亦月に數回は必音信を送られ又詠歌の往復あり其間の消息は小生一ゝ知れり其内の秀詠は淺瀬の波にも撰び候

志かして四五年を經母子恙なく再會あるや喜躍の情に任せず擧止淡然たり又先年長女則浮田氏妻末子病死するや小生浮田氏を訪ひ母上を慰めんと乞ふ浮田氏之を辭せり歸れば自宅に下村君より迎の車來り居一刻も速く來て母を慰めよと則ち行て慰む母上哀情を抑へて談話せり偶一人來り末子を今棺に歛めたりとて遺髮を渡せり母上一見涙二三滴を落せり此時情を抑ふるに最苦しかりしと見ゆ房子の最嗜む處のものは和歌也我案山子の舍の中男女四百餘名熱心の人少からず志かも房子は最熱心なる一人なりし其詠無慮數千首に及ぶべし其内秀逸は淺瀨の波初編に八首同第二編に十首か入撰と存候皆後世に殘るべく是が房子唯一のかたみにて候一昨年第二編編輯後も秀詠少なからず今一〻記臆せざれども其數首を掲けば

都萩　小男鹿のなくね戀しくおもふらん都の園の萩か花妻

老後歳暮　いそがれぬ老のあゆみのいかなればはやくも年の果にきつらん

現、　夢ならでむかしに歸るよしもなしはかなきものはうつゝ也けり

近きほどにあめりかより歸り來る我子の衣をぬひて

子にきせて長きみじかき見るまでは糸のみだれて物をこそ思へ

野蟲　八千草の露わけ行けばむしの音も袖にこぼるゝ心ちこそすれ

萩露　萩の花折らんとおもひて來たれどもいかゞはすべき露の白玉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

田家月　小山田の鴫の羽音に夢さめて蘆のまろやの月を見しかな

山春曙　あらし山花の上のみ明そめてなほ夜を殘す松の色かな

春曙　うぐひすの聲にねざめて春の夜の夢をしからぬ花の香ぞする

小生本年七月末京都に行き一年ぶりに下村氏を訪ふ房子偶病に臥してありと則二階の病床に入り面會せしにいたく喜ばれ病も快き方にて兩三日中には臥蓐を出らるべき容躰也歌題など乞はれ別れて歸阪後八月三四日頃詠草を送られ其中に

述懐　わかの浦に藻くづかきよせあされども玉ひとつたになきぞ悲しき

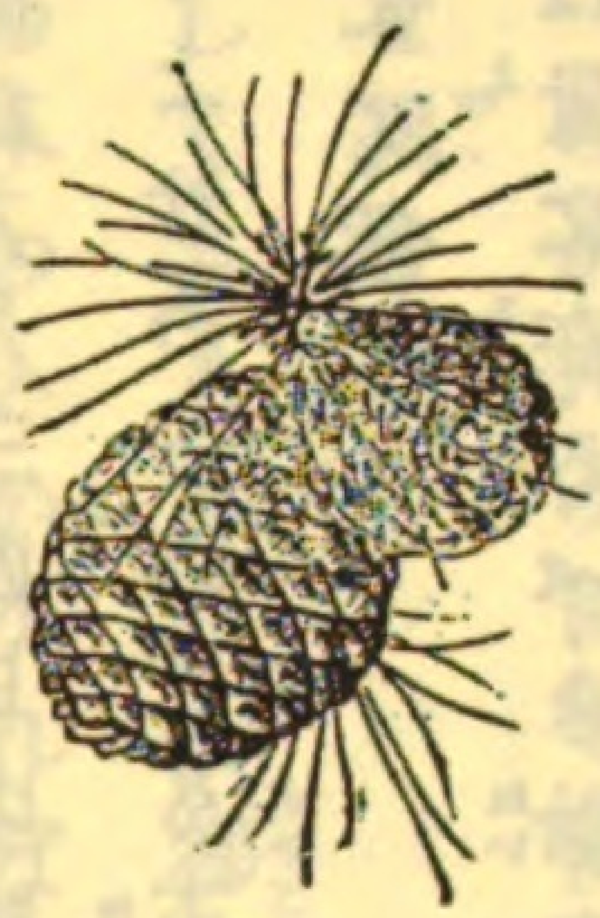
とあり是が此世のよみおさめにて候

房子若し壽命を得ば尚十餘年は世に在るべき齡なりし故自身にも最早世を去る事は豫想せられざりしなるべし去かして其老年の樂は詠歌にありし也そは小生に向ひて今後は孫の子守がてら歌よまん事是のみが第一の樂み也といく度も申され候去かして小生を無二の師と賴まれし也若し故人の傳記を著はさん人は亦故人在世の好尙情願の奈邊にありしかをも考ふべき事必要ならば房子の志は自身の實歷を誌さるゝよりも詠歌を後世に遺すは倘愉快におもはれしならんと存候去かして一個人の傳記は一時にて消滅するも詠歌は數百年後に愛誦せらるゝ事あり願くは先生御執筆中房子の詠歌も御挿入下さらば幸と存候尚委細申述度も多忙中匆卒申上候敬白

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

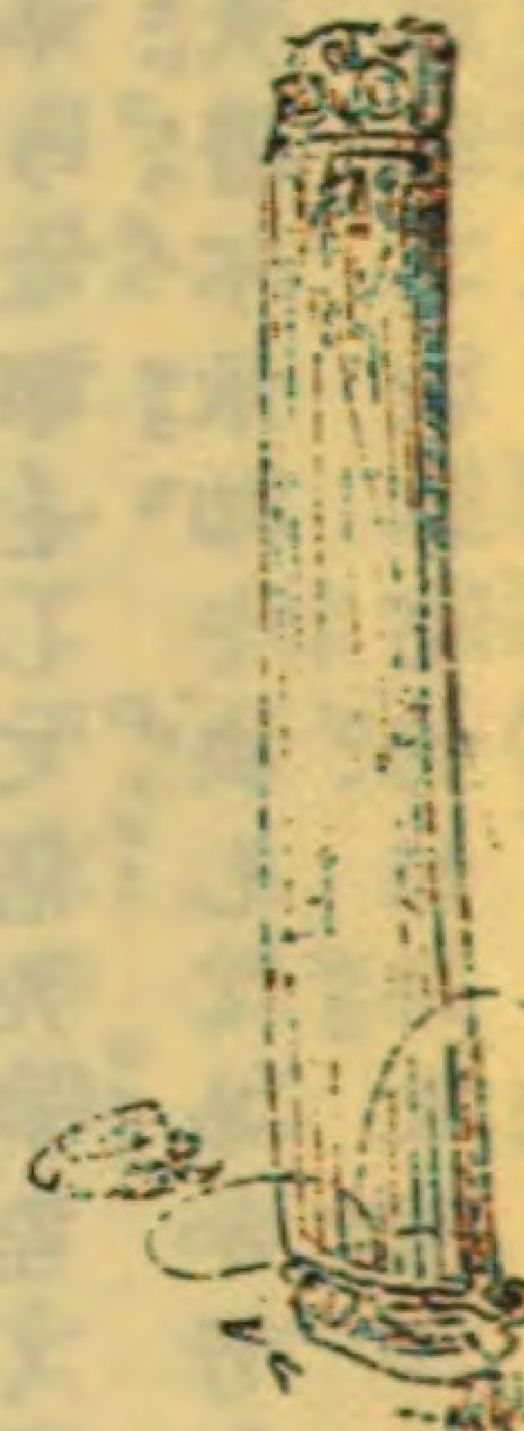
明治廿八年十二月廿二日　池袋清風

蘇峰先生高榻下



糸のもつれ（一）

金子春夢



懺悔は罪を亡すとやら、申せど私の大罪、さても世に恐ろしき罪を犯し、今思ひ出せば身の毛彌立ち肌に粟を立つほどのものなれば、何條罪の亡ぼさるべき、語るも憂し書くも耻かし。

私の父は官吏で、而も天皇の御名によりて是非善悪を裁判する職務私は父の姓名を玆はあらはすは、ます〳〵不孝の罪を重ぬるを恐れます、私の名は八重、唯八重と明しても天下に同名は多いから父母の名は傷つけますまい、姓を名乗るを耻入る私の宿所も明かに記すすら、尚ほ心に快と思ひません、しかし宿所は本所で、深川區と相隣れる彌勒寺橋に程遠からぬ所でした。

父は奏任官の職に居ること久しく遠から本所に住居を定め居ることも久しき間、私が十六歳の年の末、私の家庭はそれは〳〵恐しい大波瀾が起きて、みんなが不幸の身の上となりま

した、殊に母と私は其の大波瀾の中心に捲込まれて、誠や金輪際まで陷りまた浮ぶ瀬もないやうになりました、思へば〳〵、これも全く私一個の了簡違ひから、母にも憂目を見せました、思へば〳〵私は胸を搔き挘りたいほど心苦しい其事を思ひ起すと今でも身體がブル〳〵震へて來る私一個の心からと思へば泣き出したいが、泣いても今は追付ない、寧有樣に物語りて懺悔をするに増すことはないと思ひます。

父は其役柄だけに頗る嚴格な人ですが私を大層可愛がりて、八重よ八重よと四季折々の花見遊山へは母諸共に祖母も妹のとよ子も弟の清一も一諸に連れられ、上野の彌生櫻に樂しき一日を費すもあり、庭前の明月に一家打まどゐて笑ひ興じて一夕を送るもあり、樂しき神は我家にのみと思ひましたは私の十六歳の春まで、それよりは、樂しき神も鬼と、惡魔と變りましたは、其年の夏の初におたけと呼ぶ妾を家へ入れたばかりです。

其時おたけは二十三、私より七つ年上で、母よりは七つか八つ年下でした、元は牛込神樂坂とやらの藝妓で名を小竹と呼んで居たのを、父が久しく贔負にして、とう〳〵家へ呼び入れて始めは小間使のやうな仲働のやうな事をして居たが、全く妾でした、それは母も承知、承知の上で家へ呼び入れたが祖母が大層不承知で、決してめかけやてかけのやうなものは家へは一寸も入れない、と邪魔をなされましたれど、母は外に圍つて置くよりも家へ入れたが双方の利益だと母からむしろ勸めた結果が、母も私もお竹と一つ竈の飯を喰ふやうになりまし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たさうで、
お竹は實に利口者で如才ない女、母には奥樣々々と、私にはお孃樣々々と下にも置かぬやうにする祖母をいたはり、妹と弟二人へは我子も及ばぬやうに親切、お竹が家へ來たばかりで大きに便利、臺所の雜巾掛まで自分でして下女の働きをたすけ、家の內は奇麗に掃除が行き屆いて、母や私が少しでも病氣に罹つたら、親身も及ばぬ介抱、殊に母の身に附き纏ひて何から何まで氣をつけて呉れるゆゑ、母も大きに喜び竹は眞の妹のやうだ、お世辭でない、輕薄でない、眞に實意のある感心な女だと、竹や〳〵と言ッて、母の氣に入りました、私も竹と片時も側を離るゝが厭で偶々竹が親元に出て行く事があれば、母も私も待遠しほどでした、母は私よりも竹を氣に適ッたか、彼女を最負になさることと一通りでないから、私は時々嫉妬を起したこともありました。

併しお竹は多舌の性質なのは、始から知れてあるが、其時分は左程とは思はないお竹は最も交際に長けて父を尋ねて來る客の氣を反らさぬことに妙を得、元は藝妓とは言ひながら、あんな旨いものかと祖母と母が話し合ッて居るを聞いたこともあつた、けれど女の客を取扱ふのは下手だと見へて、女客からは評判面白からず、隣家の細君が私にお竹の事を譏したこともあつたが、却つて私は小腹を立てゝお竹に密告をしたくらゐ、それでも男客へ愛想の好いことと酒の座などは別してなれば父が氣に入ッたのも無理はないと思ひましたお竹は清

元が地で長唄でも、常盤津でも、富本でも、義太夫でも、都々一でも、潮來でも、月琴でも唐詩選でも阿呆陀羅でも何でも間に合ひ、カッポレは勿論踊り、時によると殘月とか衣は肝にいたるとやら自づから詩を吟じて劍舞の眞似をする、それゆゑ私の一家は誠に賑やかでいつも春の陽氣でした、夏など父が役所から歸ッてざつと行水をつかひお竹が心を籠めし膳部の酒盃で麥酒を傾けながら床柱にもたれて、淡化粧のお竹の意氣姿の爪彈に眉を暢ばし滿面に笑を含みて喜び玉ふ父の顏、此頃は母の心の奥こそ知らね、父の機嫌麗しきにお竹は親切な善い女だと私は喜んで居ましたが祖母ばかりはいつも苦々しき顏色、惡い女を引き入れて智惠のない息子殿だと獨言のやうな言葉を耳に觸れしこともありました。

（二）

大惡人、猫かぶり、お竹は容易ならぬ奸物でした、家へ來た當座こそ、伯母へも、母へも、私へも、親切を盡したがそれはほんの僅の間、其年の夏の末、早や秋風が立ちそめし頃より、そろ〳〵惡魔の本性をあらはしかけた、私は左程とも思ひませんが、母との交際が酷く惡くなつた樣子で、母は獨で泣いて入らつしやる所を見懸けた、見懸けて私は其譯を聞いても何とも仰しやらない父は素より嚴格の人ではありますが、是迄つい無暗な亂暴はなさらない、それにそれからといふものは母へ對して荒々しく、怒り罵り、はては腕力にて母を突飛ばし私共まで飛汁がかゝるやうになりました。

これは全くお竹が內々父を煽り立つるからで、私の目から母の身には罪はない、罪のないものを父に左樣に讒訴して亂暴をさせるのは、お竹が黑幕となッて父を繰つるからです、かうなると私は母子の人情から母が最負で、お竹の顏を見るも憎らしい、腹が立つ、これまで彼奴が私達を親切にしたのは、馬鹿にした私達も旨々其罠にかゝつて馬鹿にされたと思ふと倘さらとお竹の顏へ唾液でも吐きかけてやりたくなる、此方にこふいふ氣で居ると先方でも私へ對して取扱がガラリと違つて、萬事ツンケンと私へ突かゝり私を苛めるやうに聞へ、私は生來が癇性であるから、飛びかゝつて摑みかゝらうと思つたことも珍らしくない、私にすら、此通りにするから母へはどんな酷い事をするだらう、だが母は私程には腹が立たないと見へて、其心が顏に出ないか泣いてばかり入らッしやッた。

私は彼の女を下婢だと心得て居るから矢張竹、竹と呼捨に言へど、もう碌に返事もしないで、私へは從來お孃樣〳〵と敬つて居ッたが、それから八重さん〳〵といふやうになッた、私はそれを聞く度に癪に障り腹が立つて、もう〳〵彼の女と口を利くのも厭やなりいやなり。

憎々しく思ふと彼の女の爲すこと言ふこと、氣障でたまらず、父の吩附か、又は自分での思立か知らねど毎日ナショナル讀本を抱へて近所の英語敎授所へ「イット、イズ、ドック」の稽古に行く、髮を束髮に結び、肩掛引かづきし風は、頓と奥樣なり、束髮は輕便で好いには違ひなけれど、あのべた〳〵と紅白粉を塗り立てし風情は何事ぞ、私は二目と見る眼はない、私は竹と數

へきれぬやうに口論をしたが其の束髮の事で大議論が始りました、それは吾家へ出入の唐物屋が參つて竹が差圖でメリヤスの女シヤツを私に持つて參ツた、見ると二三個所は汚點がある上に、ボタンで胸開になつて居ず頭から被らねばならぬ、私は氣に入らないから氣に入らないといふと、お竹は口を尖らしてナニ何でも好いぢやありませんか、私もそれを取りました、此時節だから何でも間に合ひさへすりや好いではありませんかとオホヽと笑ふ私はこれが祖母か母から言はれたなら何とも思はしないが平生仇敵と思ふ竹からだゆゑ例の癇癪がムラ〳〵と起きてお前にはそれでもよからうが、私は島田を結ふから頭から被つては髮がこはれると剣ねつけると、竹は透さず、八重さんも敎育のある癖に島田とは可笑い、ちと私のやうに束髮でもお結ひなさい、それだと髮のこはれる心配はないと人を嘲けるやうに言ふ、私はお前下女なら下女のやうに生意氣を言ひなさんなと撞き返す所へ、父が來ましたからアトは其儘に立ちきへ。

竹が英語を稽古をするやうになつてから、生意氣で氣障で、傍には居られない、客が來ればそれに相手、而も黃色な聲で「ノー」とか「イエス」とか「オーライト」とか洩れ聞いても齒が浮き出すやう一度知らぬ西洋人が來て竹を我家の細君と心得、奧樣貴女御名は、と問ひし時、ハイ私の名は「バンブー」(竹)と申しますとは、可笑いにも可笑く、私が其後腹がたつ時は每時も「バンブー〳〵」と呼び立てられて、流石の女も避易したらしい。

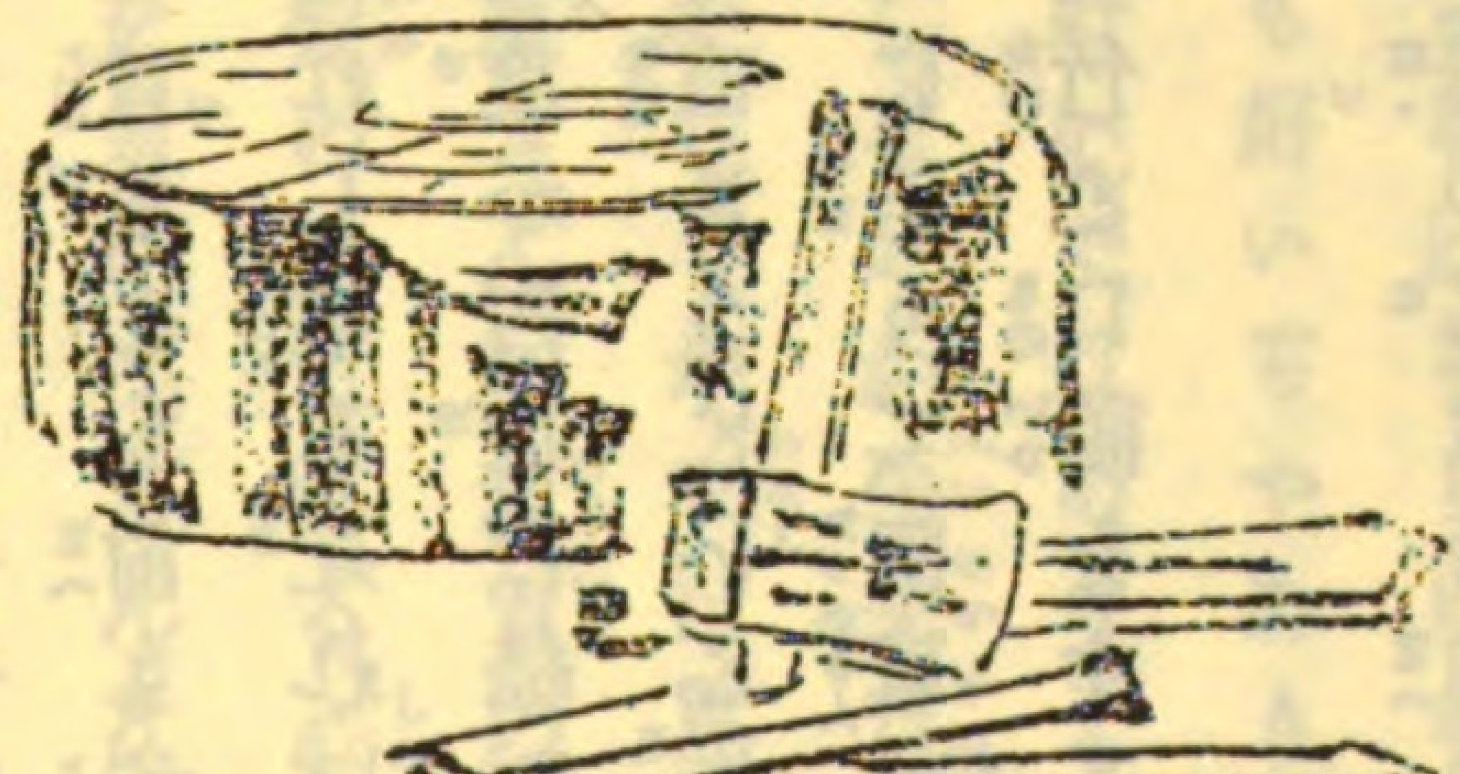
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

双方ともこんな鹽梅で其年の十一月になると、不意に唐突に、私の母は不埒とか、不都合とかあつたと、父は非常に立腹して、つまり離縁の沙汰になりましたが、父は世間に名譽を重んずるゆゑ、公然離緣はしない代りに一生飼殺しにして遣ると庭の片隅にある四疊半の隱居屋に謫居て、一切交通を謝絶しました。

私は何が何やらどういふ事が起つたか、母にどんな悪い事があつたか、父へ一度聞いて見やうとしたが、お前達の知ることではないと何にも話さらない、母へ聞くと何事も竹の故だと仰しやつたきり、私は何にも事情が分らぬが、祖母の言葉に、お前も能く氣をつくるが宜しい、女の外出をすると、お前の母のやうに間違かと言はれし處を見れば、母の過失は外出にありますが、母は内氣な人だから外出は嫌ひ、尤も月に三度か四度は綠町五丁目の鬼子母神へ參詣をなさるが、これは母が身躰が弱い故、信仰の力で直さうといふ心の外はない、それが過失になる氣遣はないにとどう考へても分らぬゆゑ、母に迫りて阿母はなぜ身の潔白を立てませんかと、いくら言ッても母は存外平氣で、もう父や竹と口論をするのは、厭だ〳〵と聞入てくださらない。

一日父は私を呼び寄せて、公然離緣こそせね、おすが(母の名)はお前の母でない、これからはお竹を眞の母と思ひなさい、何でもお竹の命令を聞きなさいと其譯は一向知らさず、私は竹を母と思ふは死んでも厭な事だと思つても父に逆ひもされず、涙を呑み込んで承知しました、

がそれからといふものは、竹は私に復讐とも心得てか、權柄づくで、私へ何でも命令ける、庭を掃かせるのみか、臺所の雜巾掛をさせるのみか、庭に下女と諸共薪割までさせた、私はこんな手荒き仕事は出來難けれど、父が北海道から持つて參つた「アッシ」を着て、右の掌にはしたゝかに肉刺をでかし、働くこともならで空しく割臺に取ついて泣き伏したこともありました。必竟竹は私を意地で苛める積り、私もこうなれば意地づく、彼の女に何か失策があれば、それを證據に我家を追ひ出して遣ふと心を配る、心を配れば欠點はあるもので、不圖竹が記す日記帳を見ると、張面に曖昧がある、現に私が不斷着の双子、一圓二十四錢なりしに、一圓五十錢と書いてある、張面を後に繰つて見れば曖昧はます／＼歷々と出て來る、これぞ能き證據を得たりと父が歸宅を待ちて二階の居間へ行けば父は私の顏を見れば立つて仕舞なさるか、何か忙しい用をなさる、丁度能き機會があれば、生憎竹奴が來て厭な目で私をにらむ、とう／＼言ひ出さずに止みました。



（三）

母が隱居家に別居をしたれば、竹は母よりも私を一番煙たがる、私も彼の女を仇敵と思ふも無理はありますまい第一私の母を苦しめて日蔭の身となした私は始終彼女に目を止めて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居るから、ますく\欠點は分かつても、それを父へ告げ知らすることは六かしい、祖母と其事を話してせめての腹癒となるが、其の話した事が一々竹の耳へ這入と見へて、父は私を召び寄せ頭から怒り飛ばされる、私はこれく\と分疏しやうとすれば、其時は氣が轉倒して返辭が出來ぬ、後でこう言ッて遣れば宜かッたと思へど、素人の後思案、また何故に伯母と話した事が直ぐに竹が知ると言ふに、妹のとよ子が全然彼の女に欺されて私達の事を密告する、それゆゑ竹は酷くとよ子を可愛がり、我子のやうにはすれど、彼の子も最う十二歳、物の分別は知れさうなもの、竹から折々おいしい物やら小使錢を貰へばとて、現在の母や、姉を苦しめる仇敵の仲間になるとは淺猿しい、私はとよ子は現在の妹でありながら、仇敵の片割ほど憎らしい。

とよ子は全く繼母の竹に馴染んで、もう眞の母は回顧もしない樣子、濤一は小見だけ無神經で隱居屋へ往來すれど母も義理を立てゝ從來の通り撫でつ擦りつしないから、これも竹の方へかぶれて來る風情が見ゆる、私は一人前の女だから義理を破りて母に遭ひに行くことは到底出來難い、遭ひに行く所か、一度私は庭前の池の畔に立ちて隱居屋の障子を明けて此方を向ひてござる母と顏を合せて會釋をする所を、二階の窓から父が御覽で、嚴しい叱責を受けてよりは、他所ながら母の顏を見ることも出來なくなッた。

私は竹の惡事を伯母に話しますが、祖母も私の話に耳を傾けて呉れぬ、それは何時も其話が

洩れて後で面倒になるからで不平は毎日積り、其鬱憤を洩らす道がない、で母に遭ひたい、遭ふには夜間に如かずと思案を定め、近所へ遊びに行く振で家を出ます、私の家は玄關から少し折曲りて扉門に達し、左手は建仁寺垣を結ひ廻はし、其内が庭で、門を入つて直ぐに霜除をしてある蘇鐵があつて、其所に庭の池から流れ來る筧の口、右手は最早葉が落ち散つた青桐數株と皮膚の眞白とされて居る百日紅が、物寂しひ形をして居る私は敷石を駒下駄でワザと音高く蹈んで出で、門を出ると、急に足の運びをゆるめ左へ廻り枳殼と小杉の生垣を押し破り、藪疊の中を拔けて行くと、隱居屋の勝手口に出る、私は怖々ながらこんな眞似して母の住居に參つて、內の樣子を障子の破綻から覗き込むと、母は淡闇い洋燈の下の長火鉢に凭れて頻りに物を考へて居なさる、私は其所から阿母さんと低い



聲をかけても氣づかない樣子、今度は窓板をコツ〳〵と叩けば、母は此方へ振向く途端に、再び低い聲で阿母さんと聲をかくれば、母はどなたですと仰しや

る私です、八重でございます、オ、さうか能く來ておくれだと立つて裏口の戸を一枚音のせぬやうに開ける、私はそこから母に手を牽かれて上り、矢庭に母の身躰に取りついて少時は泣きました、そして私は竹が毎日の振舞を一部始終話す中にも、忍の間だから怖くて〳〵若しや人の來はしまいかと心も落つかず、左の貝殻骨の邊からガタ〳〵顫へて、手先も唇頭もブル〳〵として話も後や先になる、母は私ほどには怖れないで、まあ落着いてお座り、私は捨てられた人間だから誰も來る氣遣はない、が清一が唐突に來られてはばつが惡いゆゑ、臺所の口へ私の履物を立てかけ、若し來る跫音がしたら直ぐと臺所の中仕切の障子に姿を隱すため、燈光に暗き障子を身躰の出入するだけ明けて置きました、私もこれで大きに安心して一日越には隱居屋へ忍んで母に出合ふ、其間の苦心はいかばかり、刺々のある枳殻の間をくゞり、見ても不氣味な竹藪をぬけ、或時は自宅に飼ひある「ポチ」にまで吠えつかれ、犬の機嫌を取るなど、全然私は盜賊の仕打です、現在の母に遇ふすら、さも〳〵大惡事をするやうな苦勞をするは、全く竹一人のため、思へば八ツ裂にしても足りない女、こう思ふと寧泣きたくなります、それでもこんな苦勞をして十二月中頃まで母と密會をしました、併し密會しても別に大した話があるではなく、竹を怨んで母と諸共愚痴をこぼすばかり。

忘れもせぬ其月廿六日、夕食を終りて八時過ぎ竹は不意に私に向ひ、ちとお話があるゆゑ、彼の女の居間へといふから、私は何用か、何を言ふのかと思つて元は母が居間であつた四疊半

に參ると、竹は座蒲團へ乘つたまゝ、横柄に長羅宇で煙を吹き、私が夜出をするのを、何か男でも拵へ居るやうに心得、一應そんな事は宜しくない、併し出來たことは仕方がない、これ〳〵と打明けたが得策だといふ、私はないからそんな覺へはない潔白だと立派に答へた、竹は冷笑ッて、ない筈はない、何日の夜は近藤さんへ行く何日の晩は星野のお鶴さんの宅へ行くと家へは言ッて、實は何處へお出なされた、聞きませう、聞かう、若し先方を呼んで引合せたら隱るゝ穴はあるまじと、竹は十分證據を押へて詰る、私は男なぞそんな不潔は露覺がないが、母と密會したといふ疊があるから、實はこれ〳〵と暴露られぬ、それで私は覺えず下を向ひて何とも言はぬに圖に乘り、竹は口頭ばかりは親切らしく、私に色男があるなら明かしなさい、及ばずながらお世話しやう、野暮を言はずにさつぱり言ッたが早分り、八重さんも阿母さんの子だから、そんな事に拔目のある氣遣はないと言はれし時は、私は逆上して滿身の血は頭部に上り、胸元に固い塊物がこみ上げて耳鳴がして呼吸せわしく堪らず私はどうならうがお前さんのお世話にはなりませんとついと立つて私の居間へ立ち戻りました。

彼女は私ばかりでなく、母を辱しめました、阿母さんの子だからなどゝ失禮なと言はれし時は飛びかゝつて喰ひ殺して遣りたかッたが、此方へも痍持つ脚だから、其の勇氣が消えて、私の居間の戸棚から夜具を引摺り卸し、帶も解かずに其まゝゴロリと寢轉び、額際から蒲團をかつぎて我と我小指を噛み〆め聲も得立てず泣きました、殘念で殘念で耐らない、おのれぞ

うかして此怨み、此怨み、覺えて居よ家内の紛亂もおのれ一人のためと、我知らず岸破と滿團を刎ね飛ばして起き上りました。

（四）

父は刀劍が好きゆゑ幾口かの業物を簞笥へ藏め、また二階の居間の刀懸には備前物がかゝツて居れど、それを取りに行く間に露顯しては一大事、幸ひ清一が玩具に私の手箱の裡に「まきり」がありました。これは父が北海道に住み居ましたころ、其歸りに珍らしいと土産にしたもので「オイヌ」がこれをもて、種々な細工をし、形は變なれど餘程鋭利なもの、こゝにある「まきり」は「せん」の木で鞘をつくり「アイヌ」が着る「あつし」の摸樣なものが彫刻し、大熊の牙の根付をして、刃は三寸ばかり少し反を打たすこれなれば仕損じはあるまじ、天の與と喜ました。素知らぬ風で行くと、次の次の間へは祖母は清一の添寢をして伏せッて、とよ子は其枕元で何かして遊んで居る私は此機を失ひてはと、直ぐと廊下傳ひに「まきり」を逆手に持つて、忍足に段々と竹の居間に進み行くと、障子が一枚開いて居る、私の志を達するにこれ倔強其所より足音を盜みて竹が居る次の間へ這入ると、彼の女はもう寢に就いたか、物音がしない、それで四疊半の唐紙一枚開いて六枚折の屛風を立て廻はしてある。

私は夢中です、眞に夢地を辿る心地がしても非常に神經は鋭敏になつて、柱時計の刻む音は早鐘を撞くやう聞えて胸の動氣はドキ〳〵と德利の水を逆にかへすやうで、ふるへる足を

踏〆め〳〵、漸く忍び〳〵て屛風の側へ寄り添ふと竹の枕頭には籠形の枕行燈がカン〳〵と燃され、角火鉢の小鐵瓶は枯野の蟲よりも哀れな聲して鳴いて居る、竹は寢床に入ッても未だ眠らないで横向に小説本を讀み續けて私の入り來りしを氣付かぬ樣子、誠に竹の生命は風前の燈。私はまだ竹は起きて居る、そこを素知らぬ顔で側へ近寄り一えぐりと思ッたが勇氣が挫けたではないが、寧熟睡をして居る所をと分別を變へ寢靜まるのを待ちました、すると、竹は讀物に飽



いたと見えて書冊を手から落して、今度は煙草盆の押手から煙草を長羅宇につめて、二吹つゝけて吸ひ終り、煙管を投げ出し、行燈のねぢを捩りて燈火を黒くし、傾向に枕に就きました、燈光が暗くなつたから、今まで光りかゝやきし黒檀の床柱も、天井の光の輪も消えて室内はドンヨリとなつた、やがて寢息も聞ゆる、此時ぞと私は屛風の陰から半身を顯はすと、私の刄物持つ手を確り握ると同時に腰の邊を懷き抱えて後ろへ制するものがある、私は胸がドッキリして振向くと何時の間にか祖母が來たのです、白髮の顏が暗中に明に見えました、私はハッと驚いても、それに搆はず前へ進まうとするを、祖母は無言で顏を顰めて私を後に引張る、私は行かうとする、祖母は尙も無言で頭を振つて止める機會に、屛風はパタリと竹が寢床の上へ倒れました。

竹は驚いて、飛び起きますと此有樣、何です／＼と私の側へ來た、私は一刺怨まんと悶へても、私の右の手を握る老の力に適ひません、私はもう是迄と握り固めた「まきり」を投げ捨てゝ、兩手を顏に押當てゝ打伏しました。

それからは尙更一切夢中、私は火のやうに逆上して祖母と竹との話が分らぬ、併しオ、恐い、恐ろし女だ、私を殺さうとは、大膽な、年齡に似氣ない惡人だなぞと竹が憤怒の聲は耳の底へ響いて聞える、惡口雜言をするやうだが、私は何とも言はぬ、石のやうになつて動きもしないが泣いては居ませんでした。

やがて、今夜の事はどうぞ私に免じて内々でいづれ明日いかやうともお詫をしやうから、勘忍して呉れと、平生は口を利くのも汚らはしいと思召す祖母が手をついて竹に詫して居らつしやる様子は、確かにわかる、竹も得心したと見へて、それでは早く彼方へと竹の言葉に私は蘇生の思をして祖母に連れられ、立つて行ふとすると、竹は呼び止めて、八重さんも前途が長いから、能々氣をつけてこんな恐しい了簡は起さぬが宜しい、オヽ恐しい、オヽ恐しいと身震してまだ何か言ふ樣な風情があるから、立つた私は中腰になつてだん／＼膝が疊へつく、もうお話はないといふから立とうとするとまた何か言分がある樣子、私も祖母も躊躇する折しも、轔々と車の音敷石に軋りカチリと梶棒の音と共に玄關へお歸と高く叫ぶ車夫の聲。

父が歸り玉ひしかと又もハツとする、竹は何とも言はないで、父が次の間に來た時、早く／＼彼方へとせき立つ、私と祖母は慌てゝ父を避けんと足早く廊下へ出ると、竹は少し大きな聲で、もうこれから必らず刄物三昧なぞをなさいますなと申した、私は此聲に立ちすくむ、父は竹が行燈の火を大きくした明で私二人の姿を見つけ、ちよと待てと言はれてギツクリ胸を劈く。

私は竹を殺さうとして仕損し、祖母より異見を聞く内は、アー惡い事をした、恐しい罪を作つたと後悔をしたのみか、竹も平生の邪慳な性質に似もやらず、穏に祖母の詫を聞入れて呉れた取計に、私の心の鬼も角を折つた、其時は竹に心からお詫をしたかツた、然るに／＼それは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

外面で、内實は其夜の事を父の耳へ入らせんと、ワザとグズ〳〵私を引止めた憎いも憎いも憎いといふ一心に父が歸り來ませしに一禮もせず突立ちたまゝ、ヂッと竹の顏を睨んで居ました。

祖母は石像のやうに立てる私の手を引張ッて再び四疊半に連れて、どうも今夜はこれが飛んだことを仕出かしてなど私の天窓に手を加へて自分と共に頭を下げさしましたが、丁度其時の心持は、電氣魔術者が私を電氣にかけたやうで、殆んど私の意思の働きはない。

父は洋服を着たまゝ、ドッカリ座ッて刄物三昧とはどういふ譯だと竹へ尋ねなさると今夜の事一伍一什落ちもなく語り、さも〳〵仰山らしういへど、虚言はなかッた、虚言はないが竹の口からいふと、悉皆虚言のやうに聞ゆる、父は始終默ッて聞いて入らッしやッたが、突然にオイ八重、貴樣謀殺を行ッたな、謀殺未遂だ、コレと頭を垂れて居る私の横面を二ッつゞけて三ッ毆たんとなさるを祖母は其手に縋りつき、マァそんな手荒い事を徐に言ひ聞かしてと威丈高になりて衝立ち玉へる父と疊へ顏を押つけて居る私の間に挾りましたれど、父は打ちやッて置きなさい、一人の了見で出たことではない、詮議するから來いと伯母を押し除け、私の左の手をムヅと鷲摑み、荒々しく廊下まで私を引摺り行き、雨戸の鈎鐵を外づして一枚繰り明け、片足を踏み出し、私を庭へ引き卸さうとなさる、私は苦しいやら悲しいやら、雨戸の緣に手をかけて我を忘れ大聲を發して泣き出しました。

祖母は私の泣聲を聞くに忍びず、其所へ飛んで來て父の手に縋りつき、泣聲で、どうぞ耐へて呉れと拜まんばかりにしても、父の怒りはなか〳〵に消えやらず、それでは好い、己獨りで行くからと祖母と私を突き飛ばし、靴襪のまゝ庭へ飛び下り、竹も一緒に來いと聲がかゝり、竹は早速彼方へ行きて父と自分の履物を持ち來て、二人連にて隱居屋の母を苛めに出かけた樣子、私は突き飛ばされたまゝ冷たい椽側に取亂したまゝ、倒れて聲も得立てずに泣き入りました。

(五)

ふつと頭を擡げて見ると、祖母は居なさらない、何處へ何時の間にか私は鬢のほつれを鬢櫛で搔き上げつゝ、私の居間へ歸りました私は恐しい了見を起しました。

もう死ぬより外はない、と思つて左程深くも考へず、簞笥の抽斗から晴衣を取り出し死んだ上にも人より笑はれまい、それには成るべく上等衣服を着けなければ、父母親戚の耻と思ひ、其時は死ぬといふ事が父母の名を傷くるとは氣遣ないで盛岡の叔母さんから戴いた梅模樣の半襟をつけた襦袢を重ね二三日前横濱の親類から新年の遣物に貰つた南部表縮緬鼻緖の駒下駄と此夏父が買ひ與へられた丸形の蝙蝠傘を取出しましたれど、これが死ぬのに用はない、併し其節は氣が轉倒して今思つて見ると何が何やら薩張夢の心地。

準備は出來た、誰か來ると惡い、氣はソワ〳〵するゆゑ幸ひ下女は宿へ歸つて居ないを幸ひ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

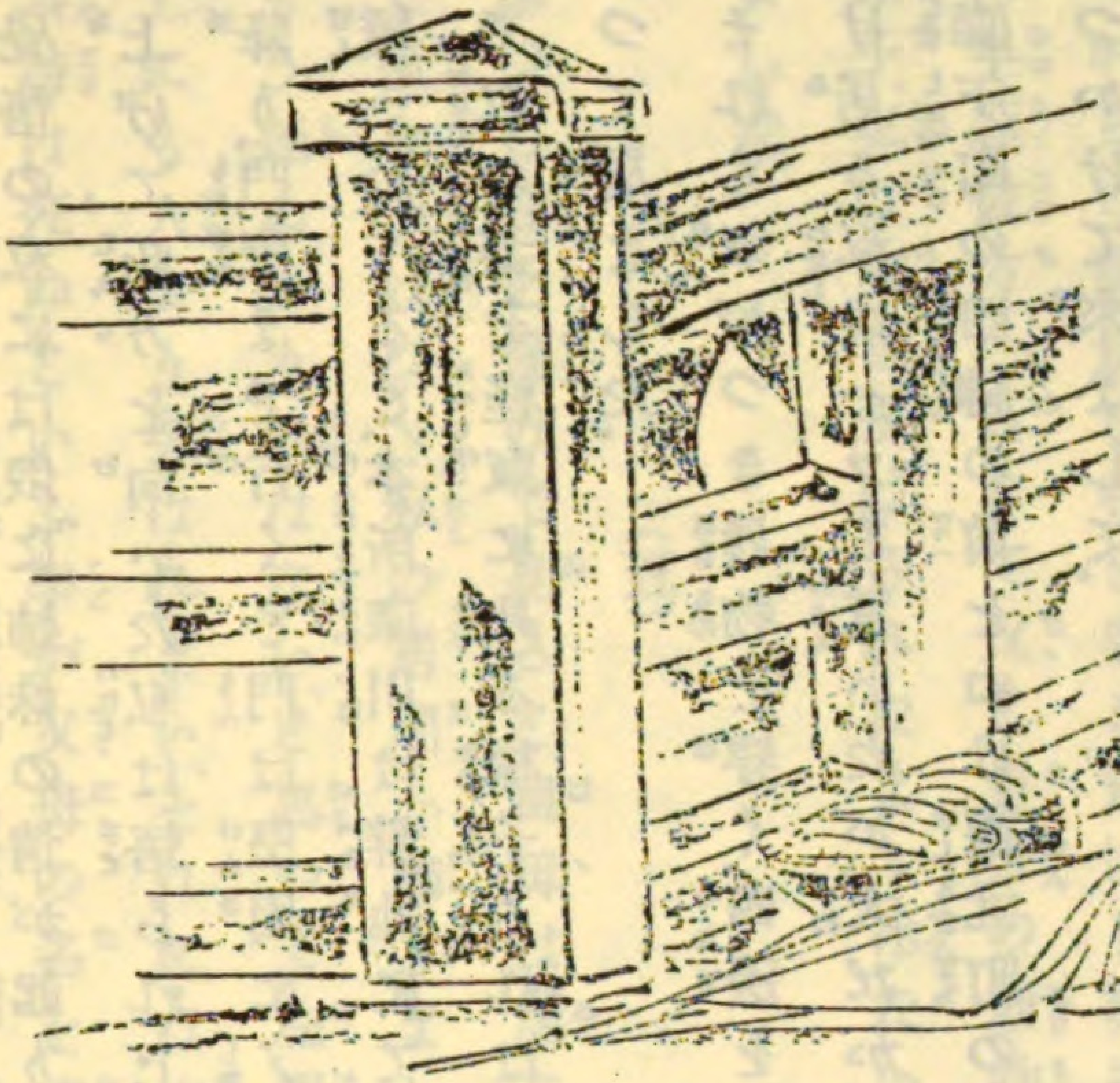
履物と傘を手にして玄關まで出かけたが、何だか名殘が惜しい、家の清一に一寸目遣つてそれからと、立ち戻つて拔足で祖母の居間を唐紙の隙間からのぞき込むと、清一は祖母の添寢を離れて少さな鼾聲をして寢て仕舞つて居る、とよ子はまだ寢ないで洋燈の前に座り玉子箱の中に千代紙で折鶴や紙人形を拵へて、餘念なし、私は敵の片割と思ふとよ子なれど、死ぬと覺悟の私には俄に姉妹の情が起りて、覺えず身躰が唐紙にさわると、一心不亂のとよ子頭を上げて此方を向いた、私は悟られじと再び拔足で玄關に出で、跣足のまゝ玄關の敷石へ飛び降り、門際まで行くと門は堅固に〆りあれど、小門が開いて居る、それから韋駄天走に彌勒寺橋へかゝると、本所深川は僻地にてもう十一時過なれど師走の廿六日、チラホラ往來がありて私の姿を怪氣に見る樣子、これは氣の故ばかりでなく、私は跣足で手に履物と蝙蝠傘を持つて居ました。

それと氣がつき履物を穿く、四邊を見ると何時の間にか私の犬の「ポチ」が橋柱に小便を仕かけ居る、私はハッと驚いたが、犬だから大丈夫と心を落着け、それより東森下町の街を通り、西森下町の明神の前をぬけ、西元町の深川亭を過ぎて大橋へ達する、「ポチ」はまだも私の後を追つかけて來まして。

愈々心を決して大橋の中央に來ました、橋の兩袂には巡査が見張をして居なさるゆゑ、私の生命を捨つる所は、此處だと觀念して橋下へ目を下すと、其夜は水嵩が増したやうで、急流が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

橋の脚を洗つて渦を捲き、舊暦何日かの片われ



月は凄い光を水面に投げ、怪しき波がうね〳〵と動き、中洲の方へは荷足らしい舟が繋やツて幽な燈が苫を通して見え淺野セメントの八つ九つの煙突が空にぬきんでゝ焦熱地獄の苛責も思ひ出されてゾッとして右の方を振向くと誰かゞ來る氣合私は惶てゝ身躰を欄干の外へ返し橋桁に兩足をかけてまだ水には落ちない「ポチ」を見ると「ポチ」は無心な顏を欄外へ差し出し太き尾を振り動かし居る私の氣も知らないでと私は犬の顏を見て俄に悲しうなり心が緩む機會に脚を蹈はづし身體の重量で欄干にかけた手の私はズル〳〵と滑りて私はざんぶと水中に陷りました。あはて、もがく、沈む、私はもう死ぬるだらうと眼を閉ちましたが、なか〳〵死なれぬ二三度水面に浮んで永代の方の漁火が確に見えました、また沈む、身躰は横にクル〳〵と廻り、何かへぶつかると思ふとさらりと流れて、またクル〳〵と廻る、私は水を呑み込む苦しさ、やがて耳鼻から水が闖み入ると思ふと其後の事は一切覺ません。

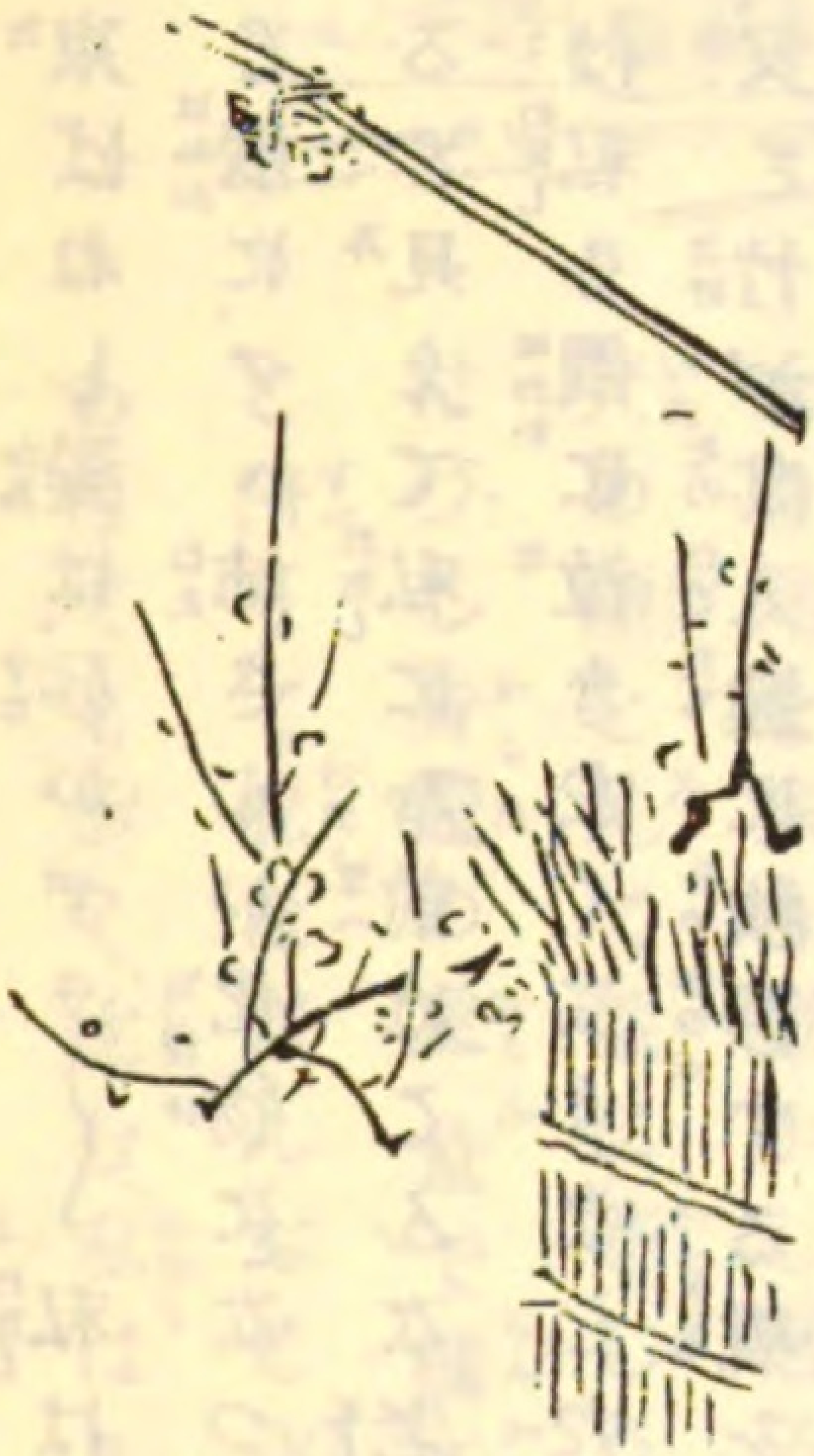
私はふつと眼をさますと私は靜に寢床の中に寢て居ます、ハテと眼を配ると全く私の部屋で椽側の日向に、私が着て出た晴衣が曝してある、私は自分は死なゝかッたと始めて氣つき、右の手を擧げてはれぼッたい指を動かして見れどしやきばッて自由ならず、其手で私の頭に障ると銀杏にあらで何かで束ばねし髮は、砂がザラ／＼、私は指が自由にならぬゆゑ、指をモヂ／＼動かさうとする、すると俄に、ア、姉さんが化物になつたよと聞ゆるは、枕頭に居た清一の聲に違ゐない、伯母も居ると見えて私にお前はこんな老人が居るのになぜ無分別をおしかと泣き出されましたには私も俄に泣きたくなりました。

奥には大勢人が來て居る樣子、父と竹が其人達に挨拶する聲を幽に聞くに其人々は昨夜私の家出せしにつき、手を分けて探がした、父は私の入水を隱して昨夜麻布の親類へ一泊しましたと分疎をして居ました。

其後四五日私は寢床から起きられない併し氣分は確ゆゑ或日私はなぜ一命助かつたかと祖母一人へ聞きますと、深川八幡町邊に住む父の知邊の漁師が其夜私を救ふて内々に連れ來たとの事、誠に小説のやうです、私は生命を拾ひましたは、幸か不幸か、明けて正月の二日の朝、大敵の竹が始めて私の寢床の側へ來て、あなたの阿母さんも御本望、望の通りおすがさんは公然に離縁せられて不義をした色男の齋藤さんと一緒になんなすッた、お目出たうと言

はれし時は私の胸は張り裂けるやう、母もあんまり情ないと私は夜具を頭から引かぶッて歯を喰しばり竹へは何とも返事なし。

其後私の身躰は次第に悪く成り行き母も竹と同じやうな道を踏み違へた人かと、其事のみ口悔涙に泣き暮しました。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一月新刊圖書廣告

幸堂滑稽談 幸堂得知翁著　全一冊
正價金廿五錢　郵稅六錢

名人長二 三遊亭圓朝氏作　全一冊
正價金二拾錢　郵稅四錢

情說 蝦夷なまり 三遊亭圓朝氏述　全一冊
正價金三拾錢　郵稅六錢

安達ヶ原 鹽谷廼山人編　全一冊
正價金五錢　郵稅二錢

子供のしつけ 寒澤振作君著　全一冊
正價金拾五錢　郵稅四錢

十九世紀史 英國ロバート、マツケンヂー氏著　全一冊
正價金四拾錢　郵稅八錢

太陽小說 第壹卷
正價金二拾五錢　郵稅六錢

新撰日本帝國史 松井柏軒君著　全一冊
正價金三拾五錢　郵稅八錢

希臘獨立戰史 柳井絅齋君著　全一冊
正價金拾八錢　郵稅六錢

忠臣藏淨瑠璃集 幸堂得知翁校訂　全一冊
正價金五拾錢　郵稅十六錢

勤學と處世 博文館編輯局編　全一冊
正價金二拾錢　郵稅六錢

砂糖篇 農學士石井淳二郎君編　全一冊
正價金拾五錢　郵稅六錢

住居と園藝 博文館編輯局編　全一冊
正價金二拾錢　郵稅六錢

日本名勝地誌 北陸 山陰 野崎左文君著　第七編
正價一圓四錢　郵稅八錢

相場必勝法 平田統一郎君著　全一冊
正價金五拾錢　郵稅六錢

一月中新刊雜誌全書類に悉く特別割引券を添へたり

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恭賀新年

倍舊御愛顧の程奉願上候敬白

京橋區尾張町松田白牡丹本舗

廿九年新春

松田幸一郎

第五國民小説

紙數三百二十餘頁
定價金二十錢
郵税六錢

國民小説の瀟洒、俊逸、沈痛、慘憺、小説の粋を鍾めたるとは江湖の愛讀諸君が普く知らるゝ所なり明窓淨几巻を繙て一讀すれば人をして眠食を忘れ憂苦を忘れ身の塵界に在るとを忘れしむべし

第五國民小説　目次は

恩愛刄◎夏◎すみれ日記◎鶴が無事◎三國物語◎その曙に◎不思議の家◎革羽織

にして何れも名篇雄作たり

東京々橋區日吉町

民友社



書籍雜誌卸小賣トモ精々勉強御注文次第何地ニテモ迅速發送可仕候

書籍及雜誌代金御送附ノ節ハ郵便爲替小爲替又ハ内國通運會社貨幣早達便ノ内ニテ願上候實際不便ノ地ニ限リ郵券代用一割増ノ事

但シ御注文ハ總テ前金ノ事

郵便爲替小爲替ハ東京銀座四丁目郵便取扱所宛ニテ御送リ被下度候弊店ハ書籍雜誌トモ其賣捌ノ部數非常ニ大多數ニ付各發行元ト特約ヲ結ビ居候ニ付随テ通常直段ヨリハ非常ノ廉價ヲ以テ御注文ニ應ジ可申候

地方賣捌ノ諸君ニシテ弊店ト取引ヲ望マルヽ諸君ハ御照會アルベシ弊店ハ親切ト確實ニ應ジ可申候

書籍雜誌等弊店ヘ特別大賣捌ヲ御依頼ノ方ハ極メテ誠實ニ御求ニ應ジ充分勉強可致候

明治廿八年十二月大改正書籍雜誌目録調製有之郵券二錢封入ニテ御申込アラバ何時ニテモ呈ス

東京市京橋區銀座參丁目拾五番地

書肆 文海堂支店

東京兩國廣小路四つ目や狩野眞輔製劑

商標

大人
小兒
寐小便之藥

藥價 三日分拾五錢●七日分參拾錢(送料貳錢ヅヽ)●拾五日分六拾錢(送料四錢)●貳拾五日分壹圓(送料六錢)
●代金郵券代用不苦

男女を問はず○大人小兒を論ぜず○如何程重き永年治せざるれ小便にても本舗が發賣の本劑を廿五日內外連服すれば恰も雪に熱湯を注ぐが如く奇妙に漏尿をさゝめ身体を健康ならしめ亦幾らず○極輕症は三日分にて全治す○本劑が斯く非凡の確効あるに就ては從來實驗諸彥の深く賞讃せらるゝ處なり○乞ふ速に服用して本劑の卓効を知り賜へ

四つ目屋製劑廣告

天下無双洗劑
いろしろくつやのでる藥
美白散
一週間用 金五拾錢

黑本尊の中子如き如何程色黑き御方なりとて御心配なぞは御無用なり靜陵石井源吉氏が多年苦心焦慮數十回の經驗を經て發明したる此美白散を御使ひあれば烏が鷺鬪炭が雪の肌となり生れ變つた樣になる事必ず請合早く試みたまへ

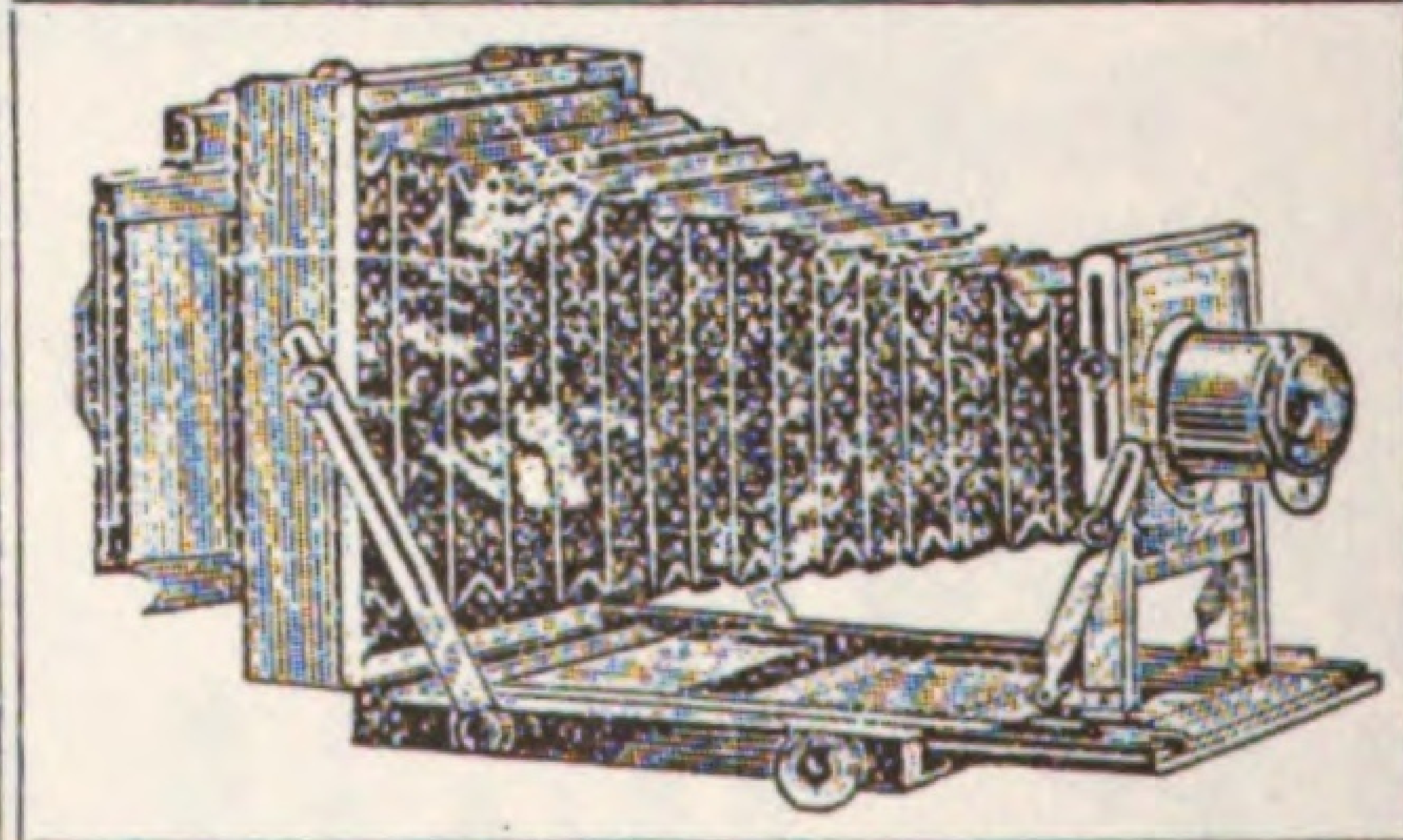
發賣元 東京兩國廣小路米澤町一丁目七番地賣藥卸問屋 大木口哲

●御求の節家庭雜誌にて見たりと御書添あれは美白散の方は送料弊舗にて負擔す

素人方にて手易く撮影し得る

新形早取
輕便寫眞器

⊙東京寫眞館より發賣せる「新形早取輕便寫眞器械」を使用せんとする には從來毫も寫眞術の事柄に經驗のなき全くの素人方と雖も人物、景色、美術工藝品及其他諸種の寫眞を自由自在に且迅速鮮明に撮影し得る至極愉快なる便法にして方今內外貴顯紳士及學生諸君に大賞讃を博したる高尙有益なる寫眞器なれば速に其一個を備へて寫眞術の趣味を試み賜はらんことを謹んで懇白す⊙御使用向……⊙營業用⊙旅行携帶用⊙學校教授用及學術參考用⊙慰樂用其他有益なる諸般の事業に適用す⊙代價は各附屬品共寄組金五圓●七圓●八圓●十圓●十三圓●十六圓●廿圓●廿五圓●廿圓●廿五圓●四十圓●五十圓●七十圓●以上二百圓迄



●遠國へは小包郵便にて遞送す⊙御來館にて御購求の節は該器械を即座に撮影の上實見に供すべし⊙遠隔へは詳密なる使用說明書を以て御教授し尙不明瞭の點は幾十回にても御質問に應じ御用ひて即座に ⊙寫眞術開業の御望の方へは營業上毫も差閊へなきやう無料にて速成と懇篤に御教授致すべし⊙郵券二錢封入せよ

投じ玉はゞ定價明細書送呈す●實習所へは特約す

東京市日本橋區人形町通田所町

寫眞器械問屋
東京寫眞館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA